

余 部 遺 跡

中世河内銹物師の工房群及び屋敷地の調査

(本文編)

2002年3月

大阪府教育委員会

南河内郡美原町所在

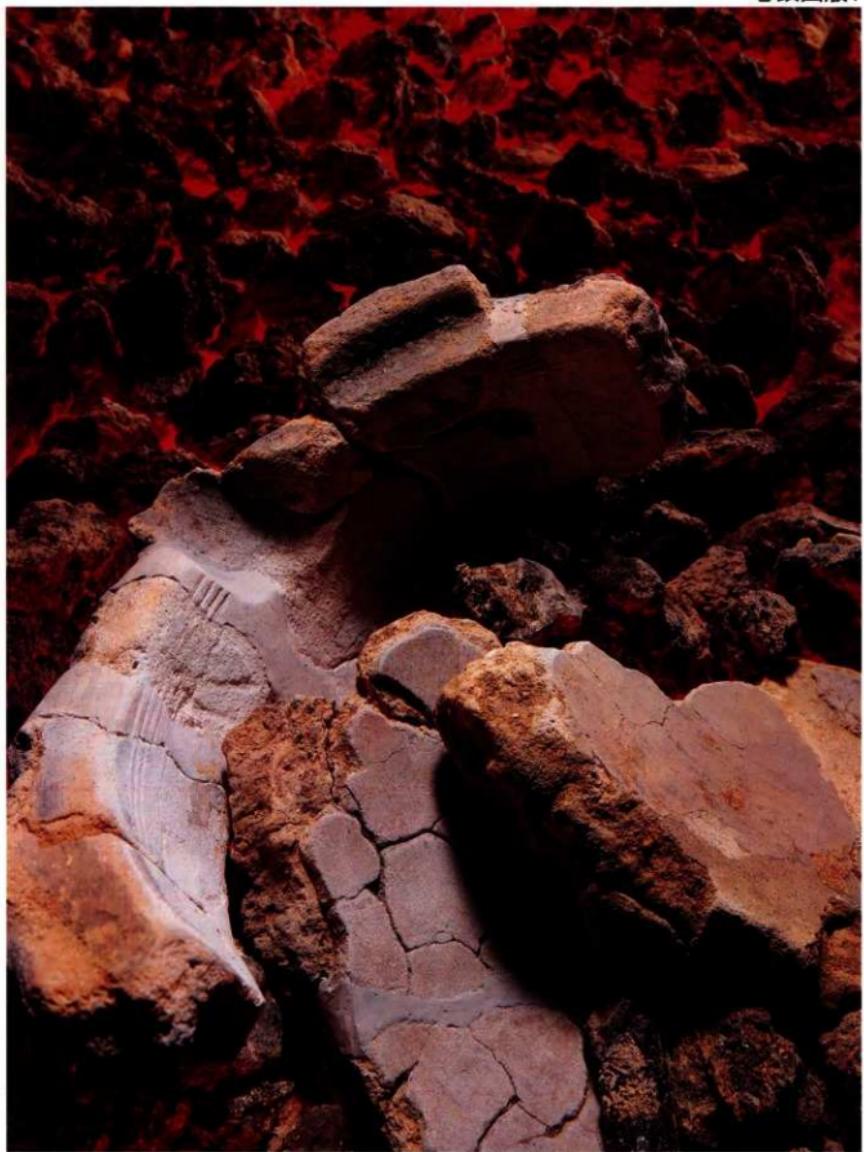
あま べ い せき
余 部 遺 跡

中世河内鋳物師の工房群及び屋敷地の調査

(本文編)

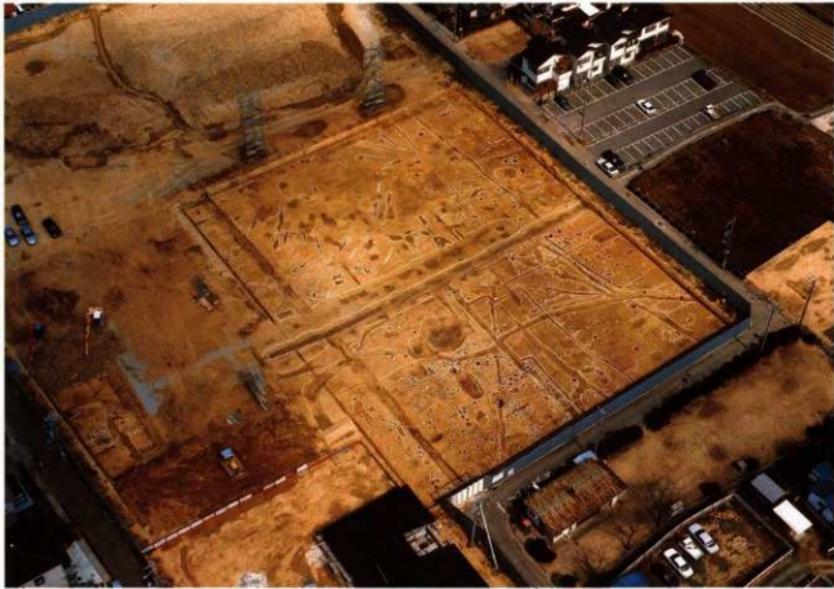
2002年3月

大阪府教育委員会





铸造土坑近景



方形区画敷地全景(97-C区)

方形区画敷地南限付近(98-C1~3区)



調査地遠景（西から）



鉄造土坑701



鉄造土坑11

はしがき

余部遺跡のある河内丹南地域は、現存する文献や金石文資料から、梵鐘や仏具、鉄鍋などの日常容器の鋳物製作に関わった、河内鋳物師集団の本拠地として全国的に知られています。

大阪府教育委員会では、南河内郡美原町北余部に所在しております府営美原北余部住宅の建て替え工事（第1・2期）に先立ちまして、平成9・10年度に発掘調査を実施いたしました。その結果、12世紀から14世紀までの、鎌倉時代を中心とした鋳造工房群やそれを管理していたと考えられる方形の区画溝で囲まれた大きな屋敷跡などが見つかりました。

当遺跡周辺は、すでに近畿自動車道松原すさみ線および松原泉大津線建設に伴う発掘調査によりまして、鋳造に関する遺構が、隣接する堺市日置荘遺跡や美原町太井遺跡・真福寺遺跡などで見つかっており、一帯が鋳物製作を行っていた一大生産地であったことが、考古学的にも分かってまいりました。そして、今回の調査成果を合わせて、河内鋳物師集団の実態がかなり具体的に復元できるようになりました。

また、この地周辺は、日置荘という地名が現在も残っていることから、文献資料に見られる「日置荘」にあたると考えられ、中世には奈良興福寺の荘園として栄えていたことが分かります。余部遺跡も、当時の日置荘の範囲に含まれていたと考えられます。方形の区画溝で囲まれた屋敷地が密集する様相は、この地が荘園としての機能をもち、鋳物師集団が隆盛を誇っていたことを物語っています。

本書は、平成11年度・12年度の2ヶ年にわたり、本格的な整理作業を行った発掘調査報告書であります。ここに、成果を皆様に示す本書を上梓するにあたりまして、大阪府建築都市部住宅整備課、美原町教育委員会及び地元の住民の皆様ほか関係各位から多大なご助力とご指導を賜ったことに対し、深く感謝いたします。今後とも、文化財保護行政へのご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。

平成14年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、府営美原北余部住宅建て替え工事（第1・2期）に伴う、南河内郡美原町北余部所在、余部遺跡の発掘調査報告書第1冊である。
2. 現地における発掘調査は、大阪府建築部住宅建設課（現・建築都市部住宅整備課）から依頼を受けた大阪府教育委員会文化財保護課が、平成9年度は調査第一係技師林口弘子（現：府立弥生文化博物館）・小浜成を、平成10年度は調査第一係技師上林史郎（現：府立近つ飛鳥博物館）を担当者として実施した。遺物整理は、平成11年度を上林と資料係技師井西貴子（現：調査第一グループ）が、平成12年度を調査管理グループ技師小浜が担当した。報告書作成は、平成13年度に調査管理グループ小浜が担当した。なお、各年度の調査概要については、『余部遺跡（その2）発掘調査概要』I・IIが刊行されている。
3. 本調査区での土壤に含まれる花粉の分析は、平成10年度に川崎地質株式会社に委託した。
4. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 本調査の写真測量は、平成9年度を大東航空測量株式会社に、平成10年度を株式会社かんこうに委託した。なお、撮影フィルムについては、各受託会社において保管している。
6. 出土遺物および記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
7. 第5章自然科学的分析においては、出土した鉄塊系遺物に関して、九州テクノリサーチ、大澤正巳・鈴木瑞穂両氏から分析成果を賜り、掲載した。また、花粉の分析では、分析委託報告書をもとに、体裁を改変して掲載している。
8. 本書の執筆は、第6章第1節を上林が担当し、第5章を除くその他の執筆および編集を、小浜が行った。
9. 府営住宅建て替え工事に伴う調査・遺物整理及び本書作成に要した経費は、全額を大阪府建築都市部が負担した。
10. 現地での発掘調査、遺物整理および報告書作成にあたっては、下記の方々および機関から助言と協力を得た。記して、感謝します（敬称略、五十音順）。
五十川伸矢・亀井聰・北野重・斎部麻矢・鋤柄俊夫・庖丁道明・眞鍋成史・森屋美佐子・山本彰・横田賢次郎・鑄造遺跡研究会・堺市教育委員会・美原町教育委員会

凡　例

1. 遺構番号は、各概要報告書刊行以降、諸発表等で用いている遺構もあり、変更による混乱を避けるため、各調査時に用いたものをそのまま使用した。ただし、2ヶ年の調査において、それぞれ遺構番号が1から付けられているため、本文中では97-、98-小調査区名（A・B・C等）を付して区別することとした。
2. 掃図中の方位は、すべて座標北で示している。
3. 遺構の平面位置は、すべて国土座標軸第VI座標系に基づいている。
4. 本書におけるレベルは、すべてT.P.値（東京湾標準潮位）で示している。
5. 土色については、基本的に小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』1992年版に準拠した。
6. 写真図版中の遺物番号は、掃図と対応している。
7. 中世上器に関する観察・編年は、中世土器研究会1996『概説 中世の土器・陶磁器』を参考とした。とくに、瓦器焼の編年観については、現在も諸見解があるが、第6章で触れる余部遺跡の歴史的盛衰を考慮するに、上掲書中の森島康雄氏の編年案に準拠した。しかし、曲解があるとすれば、筆者に責任がある。

余 部 遺 跡

中世河内鋳物師の工房群及び屋敷地の調査

本 文 目 次

巻頭図版

はしがき

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と経過..... 1

第2章 余部遺跡周辺の環境..... 3

 第1節 地理的環境..... 3

 第2節 歴史的環境..... 3

第3章 調査の方法と概要..... 7

 第1節 調査区の設定..... 7

 第2節 97年度の調査成果..... 9

 a. 基本層序..... 9 b. 古墳～飛鳥・奈良時代 9 c. 中世..... 9

 第3節 98年度の調査成果..... 10

 a. 基本層序..... 10 b. 古墳～飛鳥・奈良時代 10 c. 中世..... 10

第4章 検出した遺構と遺物..... 15

 第1節 古墳～飛鳥・奈良時代の遺構・遺物..... 15

 1. 97年度調査区..... 15

 a. 掘立柱建物・ピット..... 15 b. 溝 15 c. 土坑..... 18

 2. 98年度調査区..... 19

 a. 掘立柱建物・ピット..... 19 b. 溝 19 c. 上坑..... 19

 d. 故溝..... 20 e. 輹 22

 第2節 中世の遺構・遺物..... 23

 1. 97-A区..... 23

 a. 掘立柱建物・ピット..... 23 b. 溝 23

 c. 土坑..... 27 d. 井戸 31

 2. 97-B区..... 39

 a. 掘立柱建物・ピット..... 39 b. 鋳造遺構 42 c. 溝..... 48

 d. 上坑..... 50 e. 井戸 57

3. 97-C区	62
a. 挖立柱建物・権列・ピット	62
b. 溝	72
c. 上坑	86
d. 井戸	94
4. 98-A区	99
a. 挖立柱建物・ピット	99
b. 鋳造遺構	106
c. 溝	109
d. 上坑	116
e. 井戸	121
5. 98-B区	131
a. 挖立柱建物・ピット	131
b. 溝	136
c. 土坑	136
d. 井戸	138
6. 98-C1区	143
a. 挖立柱建物・ピット	143
b. 溝	143
c. 上坑	147
7. 98-C2区	148
a. 挖立柱建物・ピット	148
b. 溝	148
c. 道路状遺構	150
8. 98-C3区	150
a. 挖立柱建物・ピット	150
b. 溝	151
c. 上坑	151
d. 井戸	152
e. 墓	158
第3節 鋳造関連遺物	160
1. 97年度調査	160
a. 鋳型	160
b. 築羽口	161
c. 砥石	163
d. 鉄塊系遺物	164
e. 炉壁	164
2. 98年度調査	165
a. 鋳型	165
b. 築羽口	168
c. 砥石	169
d. 鉄塊系遺物	169
e. 炉壁	169
第4節 包含層他出土の遺物	170
1. 97年度調査	170
a. 鉄製品	170
b. 石器類	170
c. 土器類	170
2. 98年度調査	174
a. 石器類	174
b. 上器類他	174
c. 鉄製品	176
第5章 自然科学的分析	177
第1節 余部遺跡出土鉄塊系遺物の金属学的調査	177
第2節 花粉分析	187
第6章 考察	198
第1節 古墳時代の畑 一余部遺跡検出の畑を中心として	198
第2節 余部遺跡の屋敷地と鋳造工房群	204

挿 図 目 次

第1図 日置花遺跡及び余部遺跡調査区位置関係図	2
第2図 余部遺跡位置図	4
第3図 余部遺跡と周辺の地形	6
第4図 地区割概念図	7
第5図 調査区設定図	8
第6図 97・98年度調査区遺構全体図	11～12
第7図 97・98年度調査区主要土層図	13～14
第8図 97-C区溝1125・1290・1300断面図	15
第9図 97-C区溝1125出土遺物	16
第10図 97-C区溝1290・1300出土遺物	17
第11図 97-C区溝1591・1610断面図	17
第12図 97-C区溝1593・1610・1988、上坑1248・1367、ピット1606出土遺物	17
第13図 97-C区上坑2395山上遺物	18
第14図 97-C区土坑2395平面・断面図	18
第15図 挖立柱建物98-B-10平面・断面図	19
第16図 98-A・B・C区各遺構山上遺物	20
第17図 98-A区畝溝全体図	21
第18図 98-B区土坑502・509出土遺物	22
第19図 98-B区上坑502・509断面図	22
第20図 98-B区土坑618平面・断面図	22
第21図 97-A区遺構図	24
第22図 挖立柱建物97-A-1平面・断面図	25
第23図 97-A区ピット39・75・76・274出土遺物	26
第24図 挖立柱建物97-A-2平面・断面図	26
第25図 挖立柱建物97-A-3平面・断面図	27
第26図 挖立柱建物97-A-4平面・断面図	27
第27図 97-A・B区溝96断面図	28
第28図 97-A・B区溝96出土遺物	28
第29図 97-A区溝35・98断面図	29
第30図 97-A区上坑33平面・断面図	29
第31図 97-A区土坑36・64平面・断面図	30

第32図	97-A区土坑150平面・断面図	31
第33図	97-A区上坑36・150出土遺物	32
第34図	97-A区土坑285平面・断面図	32
第35図	97-A区井戸10・29・102平面・断面図	33
第36図	97-A区井戸10出土遺物①	34
第37図	97-A区井戸10出土遺物②	35
第38図	97-A区井戸29山上遺物	36
第39図	97-A区井戸140出土遺物	36
第40図	97-A区井戸102出土遺物	36
第41図	97-A区井戸140平面・断面図及び井戸141平面・立面図	37
第42図	97-A区井戸141出土遺物	38
第43図	97-B区遺構図	39
第44図	掘立柱建物97-B-5平面・断面図	40
第45図	掘立柱建物97-B-6平面・断面図	40
第46図	掘立柱建物97-B-7平面・断面図	41
第47図	掘立柱建物97-B-8平面・断面図	42
第48図	掘立柱建物97-B-9平面・断面図	43
第49図	97-B区各ピット出土遺物(502・556・650・944)	43
第50図	97-B区鋳造土坑438出土遺物	43
第51図	97-B区鋳造土坑436平面・断面図	44
第52図	97-B区鋳造土坑436の覆屋遺構	45
第53図	97-B区鋳造土坑438平面・断面図	45
第54図	97-B区鋳造土坑群遺構図	46
第55図	97-B区鋳造土坑701平面・断面図	47
第56図	97-B区鋳造土坑701出土遺物	47
第57図	97-B区鋳造土坑705平面・断面図	48
第58図	97-B区鋳造土坑705出土鉄製品	48
第59図	97-B区鋳造土坑705山上遺物	48
第60図	97-B区鋳造土坑707平面・断面図	49
第61図	97-B区鋳造土坑707底面遺物出土状況	50
第62図	97-B区鋳造土坑707山上遺物	50
第63図	97-B区溝442断面図	51
第64図	97-B区溝442山上遺物	51
第65図	97-B区溝806出土遺物	51

第66図	97-B区上坑477・524平面・断面及び土坑689・700平面図	52
第67図	97-B区土坑435断面図	52
第68図	97-B区土坑441平面・断面図	52
第69図	97-B区土坑501平面・断面図	53
第70図	97-B区上坑605断面図及び土坑606平面・断面図	53
第71図	97-B区土坑501・520・605・607出土遺物	54
第72図	97-B区土坑524出土遺物	54
第73図	97-B区上坑606出土遺物	55
第74図	97-B区各土坑出土遺物 (435・466・477・491・541・555・689・700・711・712・ 789・836・851・859・869・893)	56
第75図	97-B区上坑1119・1123出土遺物	57
第76図	97-B区井戸437平面・断面図	58
第77図	97-B区井戸437出土遺物	59
第78図	97-B区井戸610・653山上遺物	59
第79図	97-B区井戸500・526・600・610・653平面・断面図	60
第80図	97-B区井戸847・857平面・断面図	61
第81図	97-B区井戸500出土遺物	61
第82図	掘立柱建物97-C-10平面・断面図	62
第83図	97-C区遺構図	63~64
第84図	掘立柱建物97-C-11平面・断面図	65
第85図	掘立柱建物97-C-12平面・断面図	66
第86図	掘立柱建物97-C-13平面・断面図	66
第87図	掘立柱建物97-C-14平面・断面図	67
第88図	掘立柱建物97-C-16平面・断面図	67
第89図	掘立柱建物97-C-15平面・断面図	68
第90図	掘立柱建物97-C-17平面・断面図	68
第91図	掘立柱建物97-C-18平面・断面図	69
第92図	97-C区各ピット出土遺物 (1308・1406・1453・1653・1657・1676・1688・1690・ 1692・1716・1756・1778・1795・1834・1849・1906・ 1939・1983・2405・2474・2499)	70
第93図	掘立柱建物97-C-19平面・断面図	71
第94図	掘立柱建物97-C-21平面・断面図	71
第95図	掘立柱建物97-C-20平面・断面図	71
第96図	97-A区溝2断面図	74

第97図	97-A区溝2出土遺物①	75
第98図	97-A区溝2出土遺物②	75
第99図	97-C区溝440・900断面図	76
第100図	97-B・C区溝900出土遺物	77
第101図	97-C区溝440出土遺物	78
第102図	97-C区溝1126・1282・1284断面図	79
第103図	97-C区溝1346・1369・1450山上遺物	79
第104図	97-C区溝1985断面図	79
第105図	97-C区溝1126山上遺物①	80
第106図	97-C区溝1126出土遺物②	81
第107図	97-C区溝2231断面図	82
第108図	97-C区溝1284・1603・1985出土遺物	82
第109図	97-C区溝1126出土遺物③	82
第110図	97-C区各溝断面図 (1346・1369・1378・1390・1430・1449・1450・1603)	83
第111図	97-C区溝1378山上遺物①	84
第112図	97-C区溝1378出土遺物②	85
第113図	97-C区溝1378出土遺物③	86
第114図	97-C区溝1430山上遺物	87
第115図	97-C区土坑1186・1201平面・断面図	88
第116図	97-C区土坑1258平面・断面図	88
第117図	97-C区土坑1258山上遺物	88
第118図	97-C区土坑1623平面・断面図	89
第119図	97-C区上坑1608平面・断面図	89
第120図	97-C区土坑1601・1604山上遺物	90
第121図	97-C区各土坑出土遺物 (1456・1602・1623・1626・1628・1631・1975・1992)	90
第122図	97-C区上坑1609・1986断面図	91
第123図	97-C区土坑1609出土遺物	92
第124図	97-C区土坑1986出土遺物	92
第125図	97-C区土坑2225平面・断面図	93
第126図	97-C区土坑2225出土遺物	93
第127図	97-C区上坑1987・2010・2026・2421・2486出土遺物	94
第128図	97-C区各造構出土遺物 (溝2231、上坑1193・1353・2318・2493、 井戸2181、ビット2207)	94
第129図	97-C区井戸1226平面・断面図、井戸2181遺物出土状況	95

第130図	97-C区井戸2182出土遺物	95
第131図	97-C区井戸2181・2182・2186・2224・2275・2284平面・断面図	96
第132図	98-A・B区造構図	97~98
第133図	掘立柱建物98-A-2平面・断面図	100
第134図	掘立柱建物98-A-3平面・断面図	101
第135図	掘立柱建物98-A-1平面・断面図	102
第136図	掘立柱建物98-A-4平面・断面図	102
第137図	掘立柱建物98-A-5平面・断面図	103
第138図	掘立柱建物98-A-6平面・断面図	103
第139図	掘立柱建物98-A-7平面・断面図	104
第140図	掘立柱建物98-A-8平面・断面図	104
第141図	98-A区各ピット出土遺物 (13・254・272・276・277・280・292・314・354・ 358・359・364・366・368・443・482・577・578)	105
第142図	98-A区铸造土坑5出土遺物	107
第143図	98-A区铸造土坑5・8平面・断面図	108
第144図	98-A区铸造土坑8・11山上遺物	109
第145図	98-A区铸造土坑11造構検出状況平面・立面図	109
第146図	98-A区溝17・47遺物出土状況及び溝47断面図	111
第147図	98-A区溝200遺物山上状況	112
第148図	98-A区溝25出土遺物	112
第149図	98-A区溝14・16・18・24・48・421・446・522出土遺物	112
第150図	98-A区溝17山上遺物	113
第151図	98-A区溝47出土遺物①	114
第152図	98-A区溝47出土遺物②	115
第153図	98-A区溝200山上遺物	116
第154図	98-A区土坑1・3・41平面・断面図	117
第155図	98-A区土坑1出土遺物	118
第156図	98-A区土坑3出土遺物	118
第157図	98-A区土坑23出土遺物	118
第158図	98-A区土坑41山上遺物	118
第159図	98-A区土坑77・78・134平面・断面図	119
第160図	98-A区土坑201・216遺物出土状況平面・立面図	119
第161図	98-A区土坑77山上遺物	120
第162図	98-A区土坑201出土遺物	120

第163図	98-A区上坑216出土遺物	120
第164図	98-A区上坑249遺物山上状況平面・立面図	121
第165図	98-A区各土坑出土遺物(7・9・103・121・134・149・239・240・249・468)	121
第166図	98-Λ区十坑435・455・825平面・断面図	122
第167図	98-A区井戸4・120・140・165平面・断面図	123
第168図	98-A区井戸4出土遺物①	124
第169図	98-A区井戸4出土遺物②	125
第170図	97-A区北端と98-Λ区南端造構合体図	126
第171図	98-A区井戸139平面・断面図	127
第172図	98-Λ区井戸120出土遺物	128
第173図	98-A区井戸139山上遺物①	128
第174図	98-A区井戸165出土遺物	128
第175図	98-Λ区井戸139出土遺物②	129
第176図	98-A区井戸444・445出土遺物	130
第177図	98-A区井戸140・177・461出土遺物	130
第178図	98-Λ区井戸444・445平面・断面図	130
第179図	掘立柱建物98-B-9平面・断面図	131
第180図	掘立柱建物98-B-11平面・断面図	132
第181図	掘立柱建物98-B-13平面・断面図	132
第182図	掘立柱建物98-B-14平面・断面図	133
第183図	98-B区ピット529・628・656出土遺物	133
第184図	掘立柱建物98-B-12平面・断面図	134
第185図	掘立柱建物98-B-15平面・断面図	134
第186図	掘立柱建物98-B-16平面・断面図	135
第187図	掘立柱建物98-B-17平面・断面図	135
第188図	98-B区溝507・530・531・547・559断面図	136
第189図	98-B区溝531・559・586出土遺物	136
第190図	98-B区土坑528平面・断面図	137
第191図	98-B区土坑534・572平面・断面図	137
第192図	98-B区土坑534・551・565・572・592・619・646出土遺物	138
第193図	98-B区上坑551・井戸552検出状況及び光掘状況図	138
第194図	98-B区井戸552出土遺物①	139
第195図	98-B区井戸552出土遺物②	140
第196図	98-B区井戸571山上遺物	141

第197図	98-C 1・2・3区遺構図	142
第198図	掘立柱建物98-C-18平面・断面図	143
第199図	掘立柱建物98-C-19平面・断面図	144
第200図	98-C 1区溝1001・1002・1003・1004・1043・1044断面図	144
第201図	98-C 1区溝1001山上遺物	145
第202図	98-C 1区溝1002・1003・1004出土遺物	145
第203図	98-C 1区溝1038出土遺物	145
第204図	98-C 1区溝1069断面図	146
第205図	98-C 1区上坑1041、ピット1014・1050山上遺物	146
第206図	98-C 1区溝1043出土遺物	146
第207図	98-C 1区溝1044山上遺物	147
第208図	98-C 2区ピット1230出土遺物	148
第209図	98-C 2区溝1201・1202断面図	148
第210図	98-C 2区溝1201出土遺物	149
第211図	98-C 2区溝1202出土遺物	149
第212図	98-C 2区道路状遺構1215平面図	150
第213図	掘立柱建物98-C-20平面・断面図	151
第214図	98-C 3区ピット1339・1343・1348・1378・1380出土遺物	152
第215図	掘立柱建物98-C-21平面・断面図	152
第216図	掘立柱建物98-C-22平面・断面図	153
第217図	98-C 3区溝1351・1354・1358出土遺物	153
第218図	98-C 3区上坑1333断面図及び土坑1334遺物山上状況図	154
第219図	98-C 3区土坑1333出土遺物	155
第220図	98-C 3区土坑1334山上遺物	155
第221図	98-C 3区井戸1350・1355・1359平面・断面図	156
第222図	98-C 3区井戸1350出土遺物	157
第223図	98-C 3区井戸1355・1359出土遺物	158
第224図	98-C 3区墓1324・1357出土遺物	158
第225図	98-C 3区墓1324・1357平面・断面図	159
第226図	铸造関連遺物① 鋳型他	160
第227図	铸造関連遺物② 驚羽口	162
第228図	铸造関連遺物③ 砥石	163
第229図	铸造関連遺物④ 鉄塊系遺物	164
第230図	铸造関連遺物⑤ 鋳型	166

第231図 鋳造関連遺物⑥ 鋳型・鑄羽口	167
第232図 鋳造関連遺物⑦ 鑄羽口・砥石	168
第233図 鋳造関連遺物⑧ 鉄塊系遺物	169
第234図 溝1126山上鉄製品	170
第235図 包含層他出土石器類	170
第236図 97- A区包含層出土遺物	171
第237図 97- B区包含層出土遺物	171
第238図 97- C区包含層出土遺物①	172
第239図 97- C区包含層出土遺物②	172
第240図 97- C区包含層山上遺物③	173
第241図 包含層他出土石器類	174
第242図 98- A区包含層出土遺物	175
第243図 98- B区包含層山上遺物	176
第244図 98- C 1・3区包含層出土遺物	176
第245図 包含層他出土鉄製品	176
第246図 試料採取地点	189
第247図 試料採取位置（柱状採取）	190
第248図 柱状採取の花粉ダイアグラム	193
第249図 平面採取の花粉ダイアグラム	196
第250図 余部遺跡の烟と建物	199
第251図 各地の古墳時代の烟と集落	200
第252図 方形区画屋敷地内遺構全体図	203～204
第253図 調査小区分別に見た包含層中の鋳造関連遺物出土比率	207
第254図 主要遺構における鋳造関連遺物の出土比率（97年度調査区）	209
第255図 上主要遺構における鋳造関連遺物の出土比率（98年度調査区）	210
第256図 余部・日置莊遺跡群における主要方形区画の分布	213～214

写 真 目 次

Photo. 1 鉄塊系遺物の顕微鏡組織	181
Photo. 2 鉄塊系物の顕微鏡組織	182
Photo. 3 上段 鉄塊系遺物（AMB-1）のマクロ組織（×10） 下段 鉄塊系遺物（AMB-2）のマクロ組織（×10）	183
Photo. 4 鉄塊系遺物（AMB-1）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	184
Photo. 5 鉄塊系遺物（AMB-2）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	185
Photo. 6 鉄塊系遺物（AMB-3）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	186

表 目 次

表 1 検出花粉化石種類一覧表	191
表 2 柱状採取の花粉化石組成表	192
表 3 平面採取の花粉化石組成表	194
表 4 掘立柱建物一覧	215
表 5 97年度調査 鋳造関連遺物遺構別山上量統計表	216～218
表 6 98年度調査 鋳造関連遺物遺構別出土量統計表	219～224

第1章 調査に至る経緯と経過

余部遺跡は、大阪府南河内郡美原町北余部・南余部地内に所在する（第1・2図）。当遺跡の調査は、府営美原北・南住宅建て替え工事に伴い、本府建築部住宅建設課（現建築都市部住宅整備課）と協議を重ね、1989年の本府教育委員会の試掘調査結果に基づき、実施したものである。本調査は、平成6（1994）年度に助大阪府埋蔵文化財協会、平成7（1995）年度は助大阪府文化財調査研究センターにより行われた。平成9（1997）年度および平成10（1998）年度は、本府教育委員会が調査を行った（第1図）。本府教育委員会調査部分は、両年度とも北・南の両住宅地内部分の調査を行ったが、請負工事の発注が別々であり、同じ余部遺跡であることの区別を付けるため、南住宅部分は余部遺跡（その1）、北住宅部分は余部遺跡（その2）とした。

足かけ10年に及ぶ調査面積は、延べ4万6千㎡を越える。そのうち平成6・7（1994・95）年度調査の北住宅地部分の約1万3千㎡、平成9・10（1997・98）年度調査の南住宅地部分の約1万6千㎡については、それぞれ本報告書が刊行されている（財団法人大阪府文化財調査研究センター1997、大阪府教育委員会2000）。余部遺跡（その2）の調査部分約1万5千㎡は、平成11・12（1999・2000）年度に遺物整理作業を、平成13（2001）年度に報告書作成作業を行った。

なお、発掘調査の請負工事発注時に付した（その2）は、調査次数や発行順を示すものとは異なるため、既刊の概要報告書にはタイトルに（その2）を付したが、今回の本報告書作成にあたっては（その2）を付さず、北余部住宅建て替え工事に伴う本報告書の第1冊目とした。

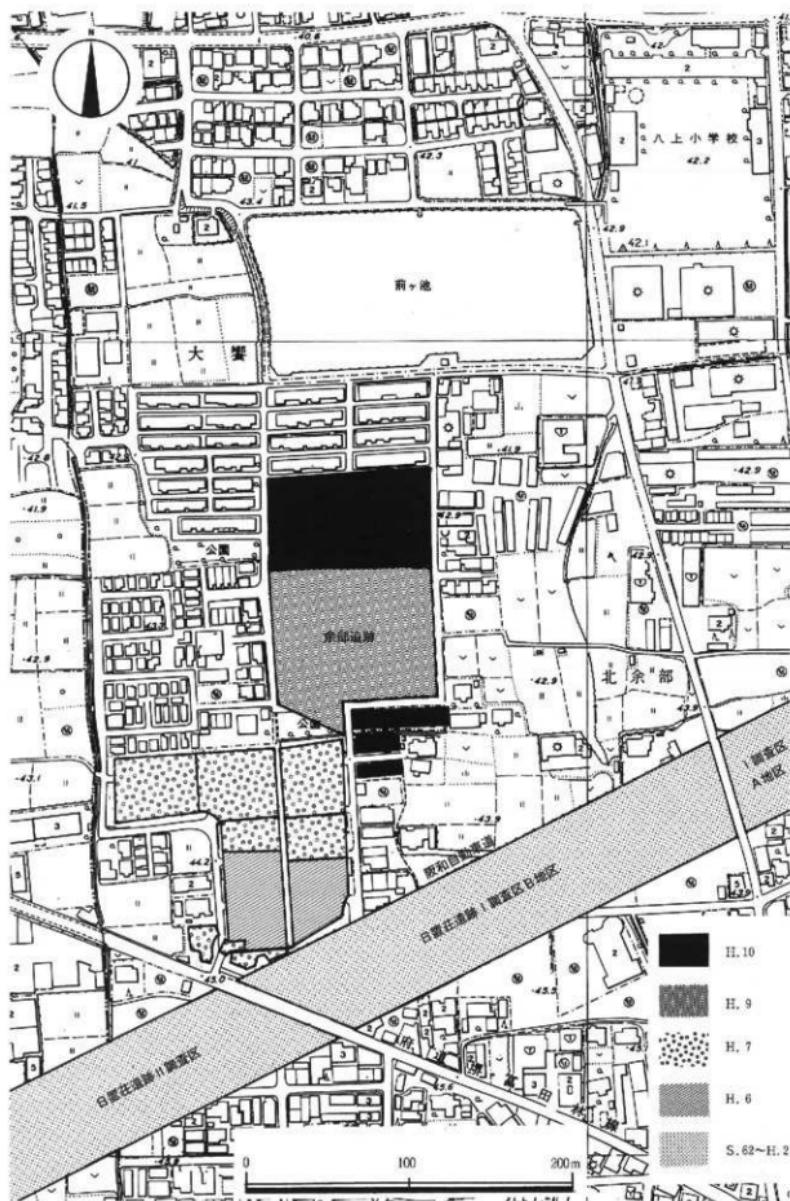
余部遺跡に関する既刊報告書

助大阪府文化財調査研究センター 1997 『余部遺跡』 府営美原住宅の団地建設工事に伴う
発掘調査報告書 調査報告書第11集

大阪府教育委員会 1998 『余部遺跡（その1）発掘調査概要』 I
1998 『余部遺跡（その2）発掘調査概要』 I
1999 『余部遺跡（その1）発掘調査概要』 II
1999 『余部遺跡（その2）発掘調査概要』 II
2000 『余部遺跡（その1）』 大阪府埋蔵文化財調査報告1999-5

また、調査および整理に当たり、以下の方々の参加・協力を得た。記して、感謝します。

（調査）井上宗嗣・江川紀子・大橋一弘・河奥祥子・佐藤千晶・十河美奈・谷内保志・仁木聰・野崎明美・星川尚志・道下司・森下尚美・正岡大実・周藤光代・河原清見・仲谷昌巳・佐藤香代子・高橋綾美・藤井千尋・黙村沙絵・藤井暁・戸川拓司、（整理）東英美子・井上能子・宇沢ヒデ子・江藤豊子・大矢ノリ・奥野容子・河東貴子・河本直子・河本美穂・神吉タエ子・岸田啓子・藏松恵美・北村美紀・木下智美・小門邦代・古下伸代子・高野綾子・中辻三沙穂・中村祐子・西沢寿子・東野穂澄・二見雅子・藤丸祐子・細川眞弓・堀口友里・増川順子・村井律子・八柄あさ代・矢野早苗・山下美佐子・山田洋子、（編集・校正）西村香織



第1図 日置莊遺跡及び余部遺跡調査区位置関係図

第2章 余部遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

当遺跡は、和歌山県との府県境にある和泉山地から北にのびる羽曳野丘陵と陶器山丘陵に挟まれた扇状地形上にあり、かつ狭山池から北流する西除川の西側に広がる中位段丘面に立地している。標高は、およそT.P.41.5mから43.5mの範囲である。西除川は、狭山池築造以前、上流にある天野川と同一河川であったが、「古天野川」の氾濫・浸食により中位段丘が形成され、余部遺跡の立地する扇状地が作り出された。その後、中位段丘の間にできた谷が埋まり、西除川の左岸に沖積段丘が、そして谷底平野・自然堤防などが形成されたと考えられる。

このように、当遺跡周辺は、東の羽曳野丘陵と西の陶器山丘陵との間の扇状地中央を北流する西除川を中心に、その東西には狭山池から流出する河川網と多数の開析谷の埋没地形が認められる。明治8年の大日本帝国陸地測量部の地形図を見てみると、多くのため池が築かれており、当地域の地理的景観を特徴づけている(第3図)。この、「古天野川」の開析谷を堰き止めて築造された狭山池と多くのため池の存在により、それまで耕作が困難であった中位段丘上の部分が灌漑可能となり、耕作地として開発され、条里地割が顕著に遺存することとなったと考えられる。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺が歴史的な重要度を増してくるのは、古墳時代中期以降のことである。5世紀に入ると、当遺跡の東北東約1.5kmには、前方部の竪穴式石室から24両の短甲を大量副葬した全長114mの黒姫山古墳が築かれる。現在は開発等により地上にまったく残っていないが、黒姫山古墳の周辺には陪冢と考えられるサバ山古墳など小円・方墳が6基以上存在していたことが分かっている。つまり、前方後円墳である黒姫山古墳を中心とする、階層性をもった古墳群が当地域に形成されていたことを示している。この地域における、首長の出現である。また、さらに北方には天皇陵級の大型前方後円墳である河内大塚山古墳が6世紀に入って築かれている。日置莊遺跡では、埴輪や須恵器を生産した窯も見つかっており、とくに埴輪窯は日置莊西町窯と合わせて、ここに一人生産地が形成されていたことを物語っている。この日置莊埴輪窯で生産された埴輪は、消費地である古墳がいまだ不明である。また、南東の陶器山丘陵上などには、5世紀以降、須恵器生産の一人拠点である陶邑窯跡群が展開している。

7世紀以降の当遺跡周辺の歴史的発展は、狭山池の築造と古代官道の整備によるところが大きい。狭山池は、乍輪年代法により6世紀末に築造された可能性が高い。この狭山池の出現によって、羽曳野丘陵と陶器山丘陵間の扇状地に大規模な灌漑水田が可能となり、耕地の拡大や集落の増加を促すこととなる。それは、難波津と大和を結ぶ南北道の難波人道、東西道の大津道など古代官道の整備とも連動していたと考えられる。



- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 余部遺跡 | 10. 小寺遺跡 | 19. 城岸寺城跡 | 28. 日置莊西町窯跡 |
| 2. 日置莊遺跡 | 11. 丹上遺跡 | 20. 八坂神社遺跡 | 29. 黒山遺跡 |
| 3. 竹内街道（丹比道） | 12. 石原町遺跡 | 21. 太井遺跡 | 30. 平尾遺跡 |
| 4. 中村町遺跡 | 13. 長和寺遺跡 | 22. 黒崎山古墳 | 31. 阿弥陀寺跡 |
| 5. 河合遺跡 | 14. 大保遺跡 | 23. 黒山庵寺 | 32. 丈六大池遺跡 |
| 6. 清堂遺跡 | 15. 真福寺跡 | 24. 丹比神社遺跡 | 33. 北野田遺跡 |
| 7. 金岡遺跡 | 16. 真福寺遺跡 | 25. 丹比窑寺跡 | 34. 野田城跡 |
| 8. 石原町北遺跡 | 17. 郡戸遺跡 | 26. 日置莊西町遺跡 | 35. 西高野街道 |
| 9. 八下遺跡 | 18. 日置莊北町遺跡 | 27. 新池古墳群 | |

第2図 余部遺跡位置図

集落遺跡としては、平尾遺跡や太井遺跡などが挙げられる。平尾遺跡は、庇付大型掘立柱建物を含む42棟の建物群と柵列が整然と配置された、7～8世紀代の大規模な集落遺跡である。これは、郡衙あるいは当時の丹比郡である当地周辺を本拠地とする丹比氏の拠点集落である可能性が考えられている。また、平尾遺跡と近接した、8世紀初頭の銅鏡遺構が見つかっている太井遺跡は、和銅元年鑄銭司の長官に任命されたと『統日本紀』和銅2月甲戌条に記されている多治比真人三宅麻呂をはじめとして、その後の銅鏡司長官・次官に多治比氏が多く見えることから、銅造に関わる丹比氏が所管した銅造遺跡である可能性が高い。真福寺遺跡からは、銅造に必要な白炭を作る窯が見つかっている。また、8～10世紀頃では、丹比道を挟んで南北に位置する観音寺遺跡と丹上遺跡で、規格性の高い掘立柱建物群が見つかっている。

中世に入ると、本書で述べる余部遺跡のほか、日置荘遺跡など西除川左岸に集落遺跡が著しく増加する傾向にある。「余部」という地名は、大平15（743）年の『河内国西淋寺僧宝帳』にある「余部郷」が初見とされている。また、「日置荘」という地名は、古代の「日置部」を由来とし、中世にかけて栄えた奈良興福寺の荘園「日置荘」の名残である。この余部遺跡・日置荘遺跡は、行政区域としては南河内郡美原町と堺市に分かれているが、空間的広がりとしては一連のものであり、遺跡の性格から鑑みても、大きく一つの遺跡として把握しなければならない遺跡群である。この遺跡群およびその周辺は、文献や梵鐘の金石文などで、河内銅物師の本拠地として全国的に知られている。また、前述のように奈良興福寺の荘園として栄えている。文献に残る荘園と比較すると、鎌倉時代、周辺には広隆寺領の松原荘、淨金剛院領の大富荘、興福寺領の日置荘、石清水八幡宮領の田井荘などがあり、日置荘は「日置荘銅物師」に、大富荘は銅物師村とされる「大保千軒」に、川井荘は真福寺遺跡を含む地域にあたるなど、荘園地帯の丹南地域が銅物師集団と深く関わった地域であることが分かる。具体的な銅物師の銅造関連遺構が見つかっている遺跡として、前述の余部遺跡や日置荘遺跡のほか、真福寺遺跡・太井遺跡などが存在する。これらは、すべて近畿自動車道松原さみ線建設に先立って調査が行われ、発見されたものであり、遺跡の分布範囲はそれぞれの道路工区部分を中心に広がりを見せているが、当時は連続と集落が営まれていたと推測される。これらの遺跡では、鎌倉時代の掘立柱建物とともに溶解炉跡などの銅造土坑群や、さまざまな銅型片が見つかっており、鉄鍋・釜などの日常容器のほか、仏具や梵鐘などを製作していたことが分かっている。とくに梵鐘は、香川県長勝寺の梵鐘に建治元（1275）年大工河内国丹南郡黒山郷下村住人平久末の銘、滋賀県金剛院寺の梵鐘に乾元2（1303）年の大工河内国丹南郡黒山郷河内助安の銘など数多くの金石文をもつ梵鐘が全国各地に残されており、河内銅物師集団が全国各地に広がって製作活動を行っていたことが窺える。

このように、これらの遺跡が河内銅物師の活動拠点であったが、21世紀となった現在、地場産業としての銅物産業の痕跡もなく、水田を中心とした景観も近年の宅地開発や道路建設に伴って急速に失われている。



第3図 余部遺跡と周辺の地形

第3章 調査の方法と概要

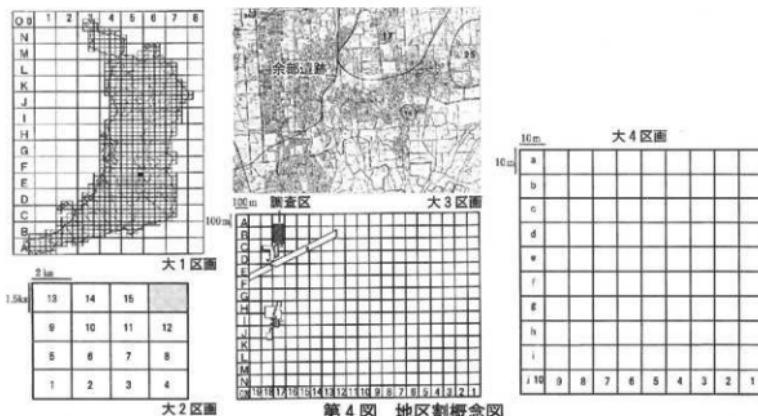
第1節 調査区の設定

97年度・98年度調査区は、ともに統一した地区設定で調査している。詳細は以下のとおりである(第4・5図)。

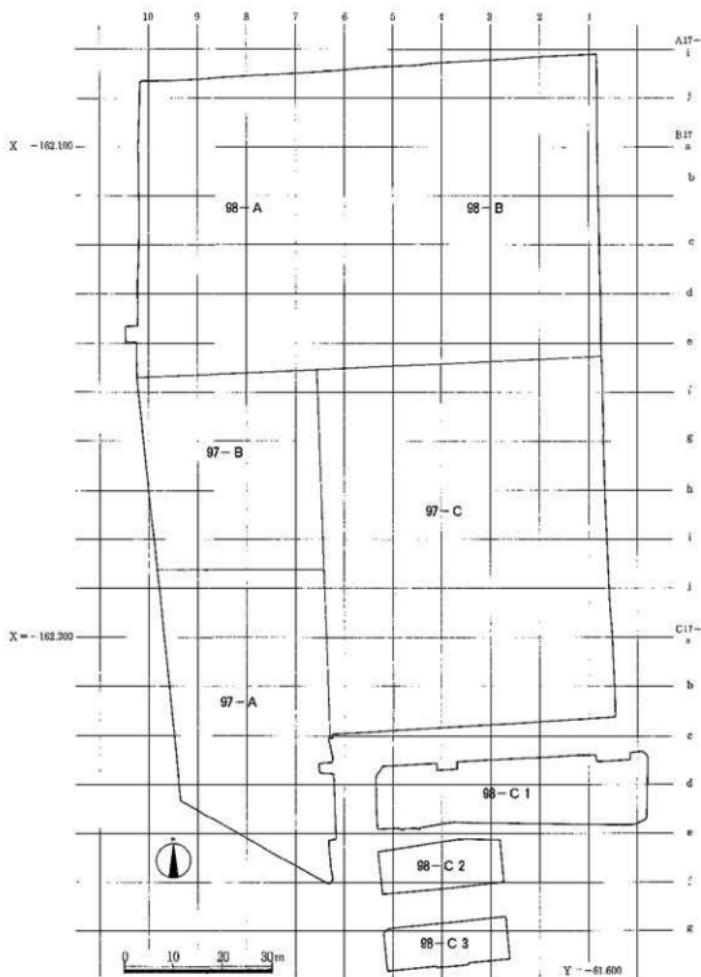
国土座標軸第VI座標系に基づいて、大小4段階の区画設定をしている。第1区画は10,000分の1地形図の地区割を用いたもので、南北6km、東西8kmの範囲が1区画となる。縦軸は南から北に向かってA～O、横軸は西から東に向かって1～8で表示する。第2区画は2,500分の1地形図の地区割を用いたもので、第1区画を南北1.5km、東西2kmに16分割する。南西隅を1とし、平行式で北東隅を16と表示する。すなわち、余部遺跡は大E 5—16に位置する。さらに、この区画を100m単位で区画し、南北15・東西20に等分する(第3区画)。縦軸は北から南に向かってA～O、横軸は東から西に向かって1～20となる。これをさらに、縦軸は北から南に向かってa～j、横軸は東から西に向かって1～10に等分する、10mメッシュを組む(第4区画)。この第4区画までの表示を発掘地点の呼称とし、調査を実施した。呼称記号は、北東隅を基点とするもので、この余部遺跡の場合では、E5(第1区画)―16(第2区画)―A16・A17・A18・B16・B17・B18・C16・C17・C18(第3区画)―a1～j10(第4区画)となる。

発掘調査は、地表面から盛土、旧耕土、床土を重機で掘削したのち、包含層を遺構面(地山)まで人力で掘削した。このとき検出した遺構・取り上げた遺物の出土位置は、すべて上記の区画記号を基にしている。

なお、97年度・98年度とも調査面積が広く、仮土置き場の確保に限界があることや、97年度は



第4図 地区割概念図



第5図 調査区設定図

調査と並行して工事が一部行われることとなったため、調査区を便宜的に分け、97年度はA・B・Cの3小調査区に、98年度はA・Bの2小調査区に分けて調査を行った。具体的には、97年度は、先行調査の西半南側をA区、西半北側をB区、東半をC区とした。98年度は、調査区西半をA区、東半をB区、97年度C区の南側をC1・2・3区とした(第1図参照)。

検出した遺構の番号は、各年度とも1番から付して、2000番代、3000番代に及ぶ。さらに、遺物が出土していない遺構も含めてすべてに遺構番号を振っている97年度調査と、遺物が出土した

遺構を中心に遺構番号を振っている98年度調査とでは、遺構の情報管理が異なっている。そこで、両年度の遺構番号を振り直して既刊の概要報告書2回により認識されている遺構番号との照合に混乱をきたすのを避けるため、遺構番号は敢えて一括統合していない。以下本文中で、検出遺構を説明する場合、それぞれ97or98(調査年度) - A or B or C(小調査区)を示した上で、遺構番号を表記する形式をとっている。また、復元した掘立柱建物の記号化を、同じく調査年度と小調査区を頭に付し、年度ごとに1から順に番号を与えていた。その際、98年度調査の掘立柱建物に関して、建物を構成するピットに遺構番号がない場合、新たに3000番代の番号を与えた。

遺構番号は、97年度調査では1~433がA区、434~1123がB区、1124以降がC区で、B・C区の新規発見遺構に2000番代を付した。98年度調査では、基本的に1~499がA区、500~999がB区、1000番代・1100番代がC1区、1200番代がC2区、1300番代がC3区となっている。

第2節 97年度の調査成果

a. 基本層序

基本的には、府営住宅建設時の整地層が約60cmあり、その下に旧耕作土層が約15cm、床土が約5cm、中世の耕作土層と思われる灰色粘質土が約15~20cm堆積している。その下に、中世の遺構面上に堆積している純粋な包含層の灰色粘土層が部分的に3cm程度認められる。遺構面である地山は、西半では黄褐色粘質土であり、東半は黄褐色の段丘疊層である。ただ、北半中央部はやや窪地状に下がっており、オリーブ灰色粘質土が堆積している(第7図)。なお、その比高差は西側の地山面とは約35cm、東側の地山面とは約60cmある。

b. 古墳~飛鳥・奈良時代

古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にかけての遺構は、そのほとんどがC区に存在している。なかでも北東部のB17-11~11・B16-11~11および南半の下層遺構に集中している。北東部は、最も低い北半中央の窪地とは約60cm比高差のある段丘疊層面に立地している。検出されている当該期の遺構には溝や土坑、ピットなどがあるが、単独で存在するものが多く、建物や生産遺構などと関連付けることは、今回の調査区の中だけでは不可能である。しかし、調査区の東方約400mの位置を北流する西除川が形成した左岸の河岸段丘上に、古墳時代の集落が形成されている可能性は高い。その集落などに関連する遺構が今回の調査区内で検出されたと考えられる。

c. 中世

今回、日置花遺跡第1調査区および余部94・95年度調査区でも発見されたのと同様の区画溝が発見された。その規模は、幅2.1~2.8m、深さ40~60cmで、南北辺は約50m、東西辺は70m以上となる方形区画溝である。さらに、その内部には複数の掘立柱建物がA区東辺およびC区南半で見つかった。少なくとも2回以上の建て替えが行われたと考えられる建物群である。内部は、さらに小区画の東西・南北の溝に囲まれている。区画溝の外側西方、A区西半およびB区西半では、南北に連なる鋳造関連のT形跡が見つかった。各T形跡は、建物内あるいは付設される形で大きな

土坑をもつ。近接して、各々戸をもつ。

また、調査区北半のB区東部・C区北西部では、溝地状の地形が認められた。畠溝などの明確な遺構は検出されなかったが、畠溝の残欠のような溝も数条平行しているようであり、耕作地のような利用状況であったと推測される。

第3節 98年度の調査成果

a. 基本層序

97年度調査区の北側に接する98年度調査区では、地山が北に向かって下がっており、堆積層が厚い。府営住宅の整地土が50cm～1mあり、その下に旧耕上が10～15cm、床土が5cm、中世の耕作上層が10cm～15cm堆積している。その下には、97年度調査と同様、純粹な中世包含層が部分的に約10cm認められ、遺構面の地山となる。また、調査区西半が黄褐色粘質土、東半が段丘礫層になるのも、97年度調査区と同じである。さらに、調査区中央部は、地山の黄褐色粘質土が掘り窪められて畠地とされており、灰黄色砂礫土が覆う。当初から、97年度調査区部分と合わせて調査区中央部分は一段窪んだ深い谷状地形を呈していたと考えられ、水気が多く、居住・工房空間には向かず、生産地として利用されたことによる堆積である。中世包含層の灰色粘土層は、この灰黄色砂礫土の上層に堆積している（第7図）。

b. 古墳～飛鳥・奈良時代

当該期の主な遺構は、B区東端の掘立柱建物とA区東半（調査区中央部の窪地）の畠溝群である。掘立柱建物は、97年度調査区と同様、全体の調査区の東辺、段丘礫層が地山を形成している部分に集中する。畠溝群は、調査区中央部の標高が一番低い場所に遺存していた。6世紀後葉頃まで遡る可能性がある。この煙作遺構は、当地周辺では初めて確認されたものであり、この地域の生業を知る貴重な資料となった。また、7～8世紀代と考えられる轍跡も見つかっている。

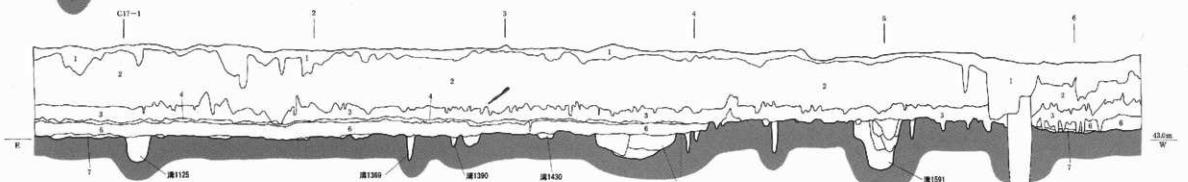
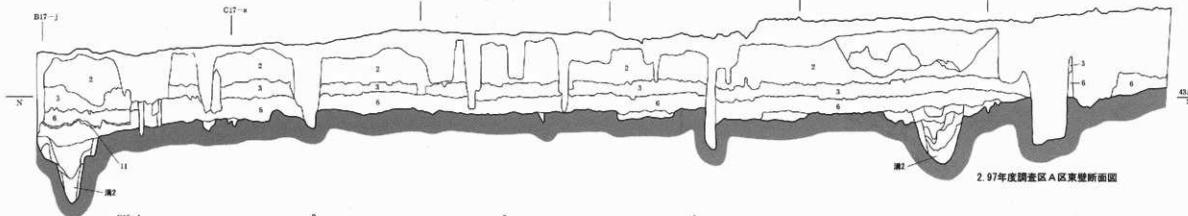
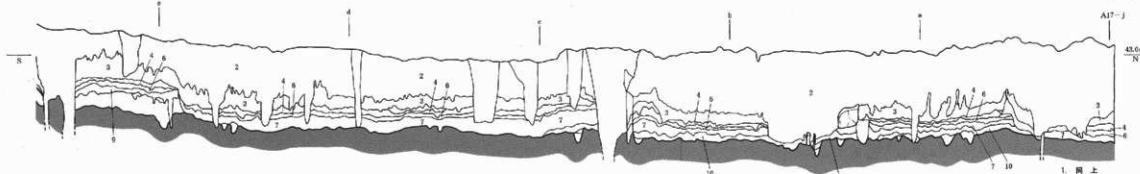
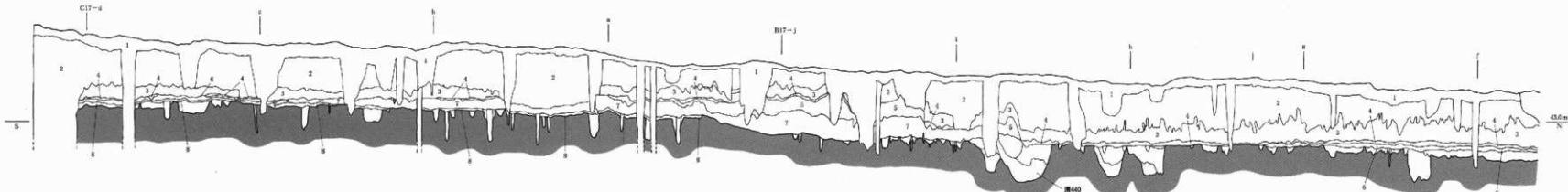
c. 中世

97年度調査区と同様、調査区西辺すなわちA区西半に、鋳造関連の工房跡が密集して見つかった。土坑および近接の戸などから、鉄鍋を製作する鋳型片が比較的まとまって出土した。このことから、これらの鋳造関連工房が、周辺の既往の調査で見つかっている工房群と同様、少なくとも鉄鍋などの生活用煮炊具を製作していたことが明らかとなった。

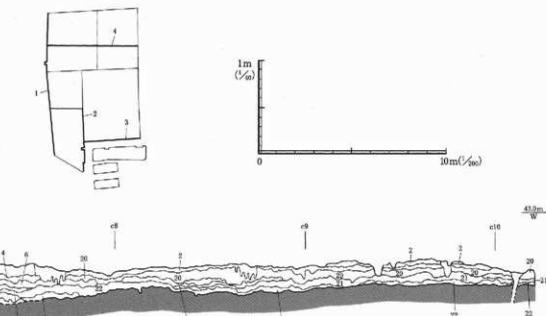
また、掘立柱建物が、区画溝の外側北方、B区東南部にも広がることも明らかとなった。これらの掘立柱建物は、大きな土坑を伴わず、A区西半の工房とは明らかに異なる。さらに、掘立柱建物1棟が、工房の集中する数ヶ所からどれも少し離れた西方で見つかっている。この掘立柱建物は、総柱建物であり、ほかの掘立柱建物とは異なり、倉庫などとして利用されていたと考えられる。その機能の差が立地の差に現れていると推測される。



第6図 97・98年度調査区構造全体図



- 層名
 1. 土(砂質粘土層の部分)
 2. 砂上(砂化粘土層の部分)
 3. 3.73m/1 ダマー(黒色粘土上)(砂質土)
 4. 3.84m/1 黒色粘土(砂質土)
 5. 5.6/1 黑色粘土(砂質土)
 6. 10.98m/6 黄褐色粘土(中土・云代の耕土)
 7. 1.09m/6 黄褐色粘土(中土・云代の耕土)
 8. 7.85m/2 黄褐色粘土(耕土部分)
 9. 1.97m/2 黄褐色粘土(底土多く含む)
 10. 0.95m/2 黄褐色粘土
 11. 6.8m/1 黄褐色粘土
 12. 7.37m/6 楊柳修復シート
 13. 2.57m/1 黒色粘土シート
 14. 2.59m/2 黑色粘土シート
 15. 2.59m/2 線状被毛砂質土
 16. 1.07m/8 黄褐色粘土
 17. 1.07m/9 黄褐色土
 18. 1.07m/10 黄褐色粘土
 19. 1.07m/9 黄褐色粘土
 20. 2.37m/1 黄褐色粘土
 21. 1.07m/6 黄褐色粘土シート
 22. 1.07m/6 黄褐色粘土
 23. 1.07m/6 黄褐色粘土
 24. 1.07m/6 黄褐色粘土
 25. 2.37m/3 二じき(黒色粘土)
 26. 7.39m/1 灰色粘土
 27. 2.39m/2 黑色粘土(耕層の根上)
 28. 0/1 黄褐色粘土



第7図 97・98年度調査区主要土層図

第4章 検出した遺構と遺物

第1節 古墳～飛鳥・奈良時代の遺構・遺物

1. 97年度調査区

a. 堀立柱建物・ピット (第12図、図版41)

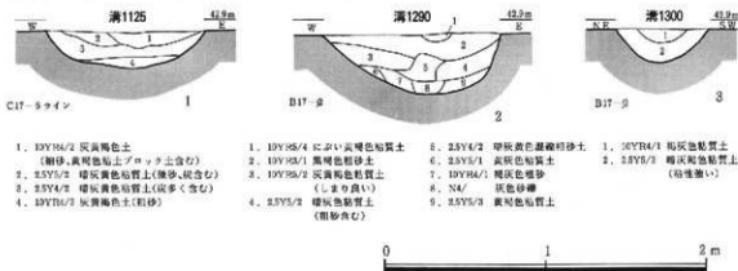
古墳時代のピットと断定できる遺構はほとんどなく、確実に当該期の建物と比定できるものはない。ただ、遺物が散見できる地点は、調査区東半のC区北半およびC区東端にはば限られる。C区北半は、地形的に浅い谷地形を形成している地点であり、その谷地形をはさむ東西両側の微高地よりも削平が及ばなかったために、中世より古い段階の遺構・遺物が遺存していたと考えられる。C区東半は、微高地であるので削平度は高いが、すぐ東側を流れる西除川の左岸に形成された太井遺跡や南東側の日置荘遺跡において、古墳時代の遺構がまとまって認められるので、その連続性がこの調査区にまで続いている可能性が充分に考えられる。

B17-j1で検出したピット1606から、須恵器の龜が1点出土している(第12図5)。口頭部は欠損しているが、体部は球体よりもむしろ長円形に近く、最大径は上部3分の1前後のところに求められる。体部の最大径を測る部分のやや上に1条の沈線を施している。体部の穿孔部直下まで、回転ヘラケズリが及んでいる。田辺編年のT2K209型式に属すると考えられる。なお、ピット1606の規模は、径約25cm、深さ約13cmである。

b. 溝 (第8～12図、図版20・21・38～41)

溝1125および溝1290・1300は、C区東南隅のC17-b1からやや北西に振りながら北流する一連の溝として捉えられるものである。これらの溝は、中世の溝1126によって切られており、遺構の存続主体時期は、出土遺物により古墳時代後期から飛鳥時代に求められる。

溝1125は、幅約1.0m、深さ約40～45cmの規模を測る(第8図1)。検出総長は約35mである。出土遺物(第9図)は、須恵器の壺蓋(1～5)・壺身(7・8)・平瓶(10・12)・高壺(11)・壺(13)・甕(14)、土師器の壺(9)・甕(15)などである。1の壺蓋は、端部のみであるので詳細は不明だが、



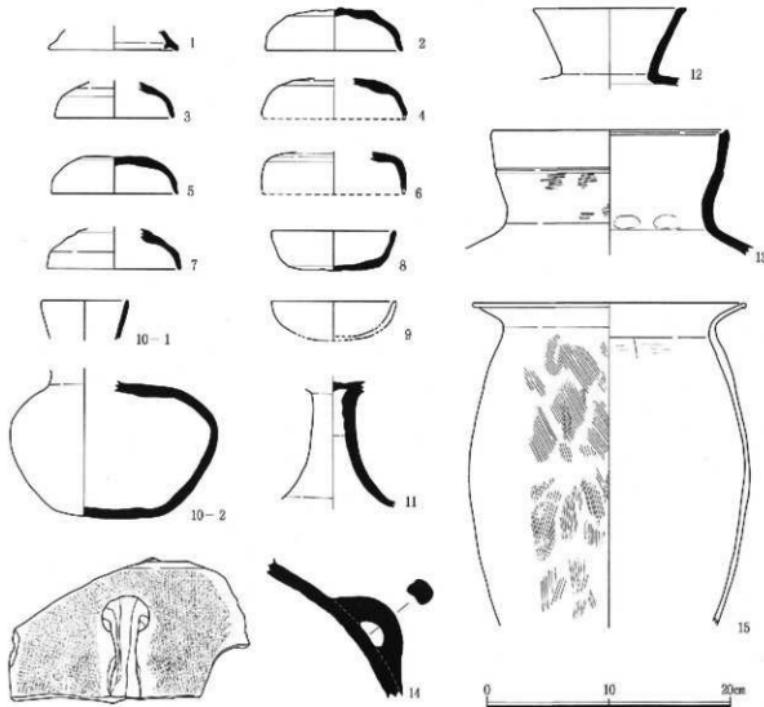
第8図 97-C区溝1125・1290・1300断面図

内面に比較的長いかえりを有し、頂部に向けての立ち上がりも急である。飛鳥ⅠあるいはⅡに属すると考えられる。2～5・7・8の坏身・坏蓋も、形態的特徴からTK209・TK217型式に属すると考えられる。6は、壺の蓋になると思われる。9の坏は、内外面とも摩滅がひどく、ミガキ・暗文が観察できない。14の甕は、把手が付き、内面には同心円文が消されずに残っている。

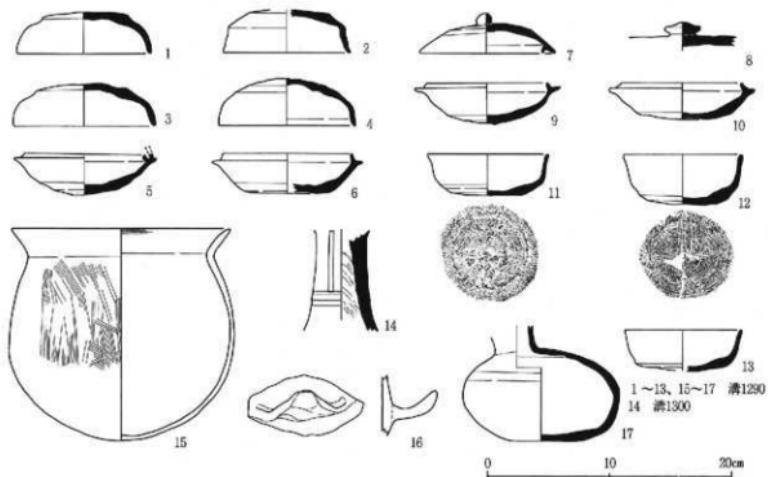
溝1290は幅約1.0m、深さ約40cmの規模である(第8図2)。出土遺物(第10図)は、須恵器の坏蓋(1～4・7・8)、坏身(5・6・9～13)、平瓶(17)、土師器甕(15)などがある。蓋坏は、TK209～TK217型式が主体を占めている。しかし、8の宝珠つまみの新しい様相も少ないので含まれており、全体的には若干の時期幅が認められる。

溝1300は幅約55cm、深さ約20cmの規模である(第8図3)。出土遺物は少ない。第10図14は、須恵器の高坏脚部で、長脚2段透かしのタイプである。

B17-i3で検出した溝1593と溝1988は、北東から南西方向に並行する溝である。それぞれ幅約30cm、深さ約3cm、検出長約2.8m、幅約50cm、深さ約5cm、検出長約3.8mの溝である。溝1593から須恵器の坏身(第12図4)が出土している。口径約11.8cm、底部はヘラ切り未調整で、TK217型式に属すると考えられる。溝1988からは、須恵器の器台(第12図7)が出土している。脚部のみで



第9図 97-C区溝1125出土遺物



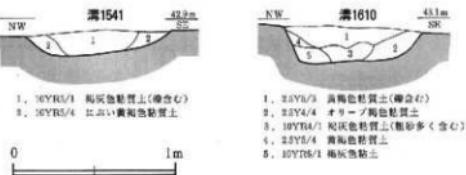
第10図 97-C区溝1290・1300出土遺物

あるが、端部近くで大きく外反する形状を呈する。外面には、カキ目が施されているのみである。TK43～TK209型式におさまるものと考えられる。

以上の溝はすべて、南東から北西方向、あるいは南西から北東方向となっており、明らかに中世段階の東西あるいは南北に走る整然とした溝群と異なっている。

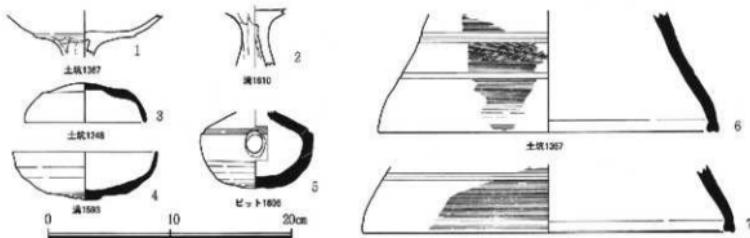
なお、溝1290・1300と近接し

ている溝1282は、中世の溝1346に

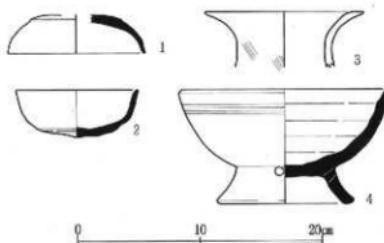


第11図 97-C区溝1591・1610断面図

切られていることなどから、時期的に古く遡り、溝1125から派生する溝である可能性が残されている。



第12図 97-C区溝1593・1610・1988、土坑1248・1367、ピット1606出土遺物



溝1610は、C区南半のC17-j4からB17-i3にかけて、南西から北東に走る溝である。幅は約90cm、深さは約15~20cmである(第11図2)。溝1126および溝1378によって切られている。土師器の高壺(第12図2)が出土していることから、古墳時代まで遡る可能性が高い。

第13図 97-C区土坑2395出土遺物

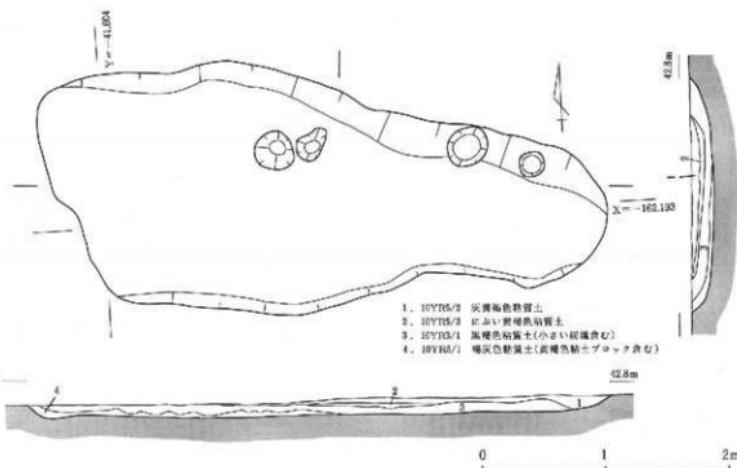
c. 土坑(第12~14図、図版41)

C区南半では、B16-j10で検出した土坑1248およびB17-i2で検出した土坑1367がある。

土坑1248は、幅約55cm、深さ約35cmを測る。検出長は約2.5mである。須恵器の壺蓋が出土した(第12図3)。口径は約10.7cmで、TK209型式に属すると考えられる。

土坑1367は、東西最大幅約4.6m、南北最大長約5.5m、最大の深さ約35cmの、不定形の不明土坑である。中世の溝900に切られている。土師器高壺(1)や須恵器器台(6)などが出土している(第12図)。器台は、溝1988出土資料と同様、脚端部近くで大きく外反する形態で、1条ないし2条の沈線間にカキ目を施す。TK43~TK209型式に属するものと考えられる。

土坑2395は、C区北半のB17-h1とB16-h10にまたがって位置する、東西に長い土坑である(第14図)。東西幅4.5m、南北長2.0m、深さ約12cmを測る。この付近には、ほかにも須恵器などが出土する古墳時代の遺構が存在する。出土遺物(第13図)には、須恵器の壺蓋(1)、壺身(2)、器台(4)、土師器の壺(3)などがある。1はTK209型式、2はTK217型式に属すると考えられる。



第14図 97-C区土坑2395平面・断面図

2. 98年度調査区

a. 挖立柱建物・ピット (第15・16図、図版42)

掘立柱建物98-B-10は、桁行4間・梁行2間の東西棟の建物である(第15図)。桁行6.2m、梁行4.5mで、柱間は桁行1.4～1.6m、梁行2.2～2.3m間隔である。中央やや東南寄りに、隅丸方形の土坑618を有する。ピット519の廃絶後の埋土から环蓋が出土している(第16図7)。この环蓋は、擬宝珠つまみが付くタイプで、8世紀代である。また、西側梁行の柱列が7世紀代の溝507によって切られていることや、西側の生産域との関係から、掘立柱建物の年代は6世紀末葉から7世紀にかけての時期を想定しうる。柱穴の掘方は、他の建物と異なり、やや大きい隅丸方形のものが多い。

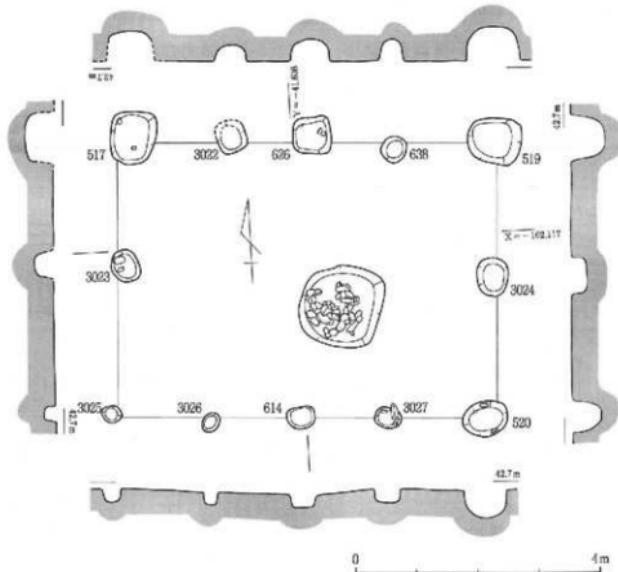
b. 溝 (第16図、図版42)

当該期の溝としては、A区の溝2・溝478、B区の溝506、C2区の溝1222がある。いずれも単独で分布しており、古墳時代に集落などが存在していた可能性を濃厚に示すものではない。

出土遺物(第16図)は、C17-c・f4で検出した溝1222で土師器の甕(9)が出土している。規模は、幅約30cm、検出長4.2m、深さ約12cmである。そのほか、溝2から須恵器の甕(11)が、溝478から須恵器の环蓋(5)が、溝506から須恵器の环蓋(1)や平瓶(8)が出土している。

c. 土坑 (第18～20図、図版42)

A区の東南部では、東西幅約13m、南北長約17m、深さ約20cmの浅い落ち込み状の土坑28が検



第15図 挖立柱建物98-B-10平面・断面図

山された。山上遺物は非常に少なく、年代決定するには根拠が少ないが、須恵器の坏身が出土している(第16図2)。口径は、復元で12.0cmを測り、体部の1/2までヘラケズリが施されている。立ち上がりの形態も合わせて、TK43型式に属すると考えられる。6世紀後葉頃であろう。

B17-c5北東部に位置する土坑35は、径約1.2m、深さ約22cmの不整円形の土坑である。須恵器の坏蓋(第16図4)が出土している。口縁端部は内傾する段を持ち、体部の約1/2にヘラケズリを施している。また、天井部の丸みはなくなり気味である。これらの特徴から、5世紀後葉から末頃に比定できる。

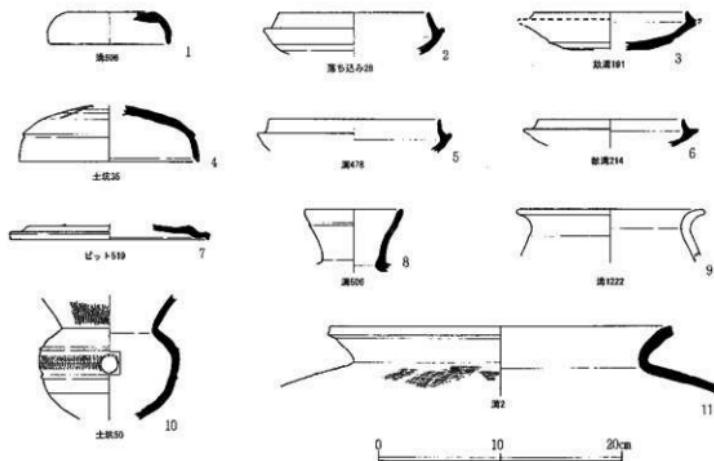
B17-d・e7に位置する土坑50は、径約1.5m、深さ約6cmの十坑である。遺物は、須恵器の龜が出土している(第16図10)。

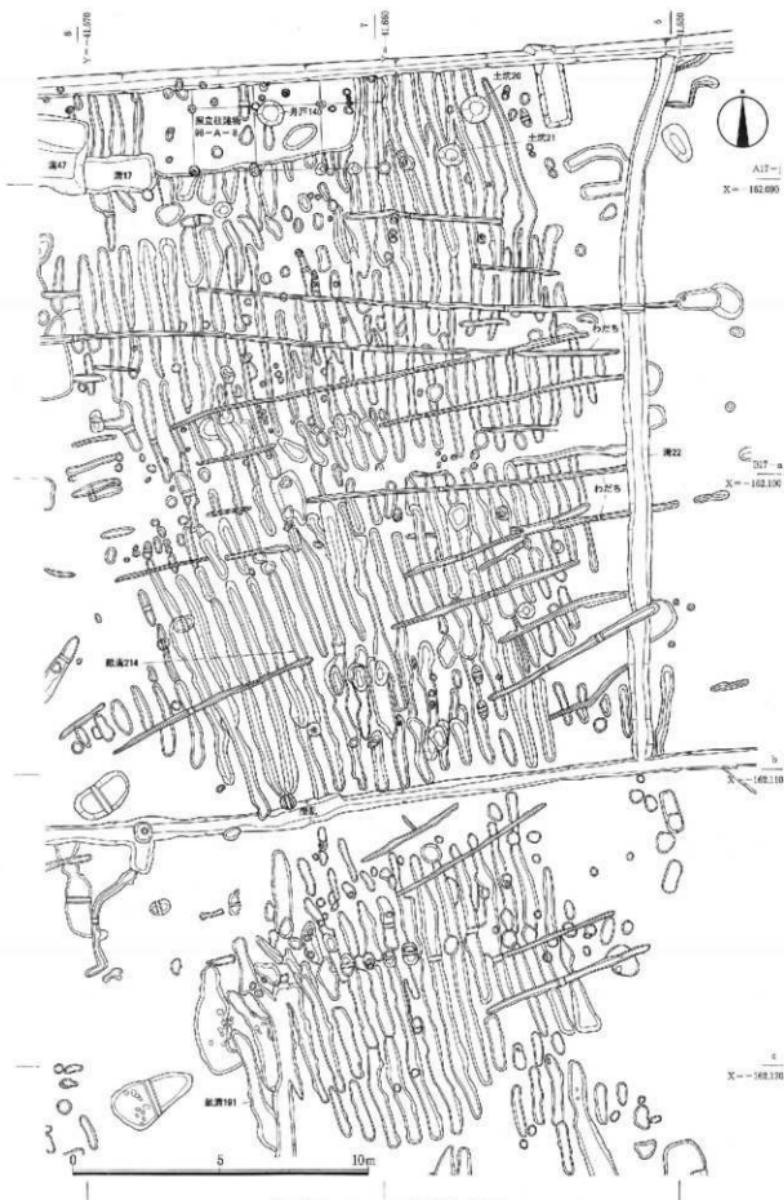
B区では、B17-b3の中央付近に位置する土坑502およびB17-b2の中央付近に位置する土坑509が検出された。規模は、土坑502が径約1.4m、深さ約30cmの不整円形で、土坑509が幅約1.0m、長さ約3.3m、深さ約13cmである(第19図1・2)。また、遺物は土坑502から8世紀代の須恵器の坏蓋(第18図1)が、土坑509からは十獅器の小型臺(第18図2)が出土している。

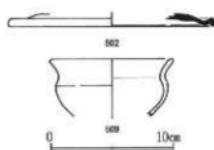
掘立柱建物98-B-10に伴うと考えられる土坑618は、径約1.4m、深さ約13cmの不整円形の土坑である(第20図)。中央部には径10cm程度の礫が敷き詰められていた。遺物は出土していないが、掘立柱建物の年代から、当該期の十坑であると判断する。

d. 畦溝(第16・17図、図版31・42)

A区の北東部で畾溝群を検出した。その範囲は東西約20m、南北約40mに広がっている。東端は、溝22によって区画されているようである。畾溝群が検出された部分は、A・B区の中で地形的に最も低い部分であり、東・西側との比高差は0.5~0.9mになる。畾の盛土は、後世の開発に





第18図 98-B区土坑502・
509出土遺物

よって大部分が削平されていたが、良好に残存していた畠は、幅40cm、高さ10cmの断面蒲鉾形を呈していた。規模は、長いもので10m、短いもので3mを測るが、全体的には7m前

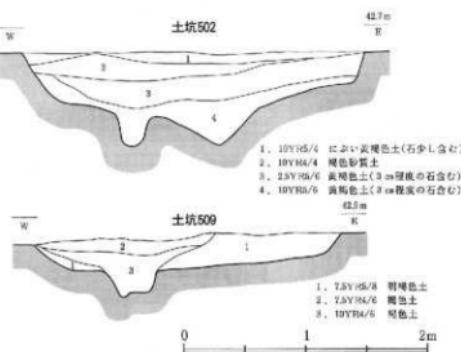
後のものが最も多い。また、畠溝の幅は約35cm、深さは約15cmを測り、断面はU字形を呈している。畠溝の方向は、北半がN-8°-W、南半がN-20°-Wである。これは、浅い谷状地形に制約され、斜面に直交する形で營まれたと考えられる。

畠溝191は、B17-b・c8で検出した。幅約45cm、長さ約4.2m、深さ約10cmを測る。畠溝群の連続した溝の流れの西端に位置している。遺物は須恵器の壺身(第16図3)が出土している。口径は復元で12.4cmを測り、底部はやや間隔が広めのヘラケズリを施している。また、立ち上がり部分の形態も合わせて、TK43型式に属すると考えられる。

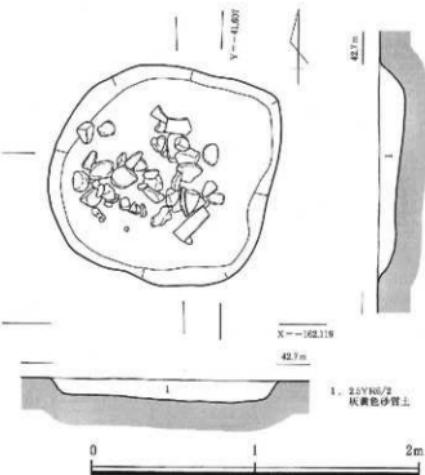
畠溝214は、B17-a7で検出した。幅約30~40cm、深さ約15cm、長さ約7.8mを測る。須恵器の壺身が出土している(第16図2)。口径は復元で11.6cmを測る。畠溝191の資料と同様であり、TK43型式に属すると考えられる。このことから、畠溝の時期は、6世紀後葉頃まで遡る可能性が高い。

e. 車(第17図、図版31)

畠溝と直交する、細長い溝を平行して数条検出した。これらの溝間隔が1.5m前後とほぼ均等であることから、牛車の車(わだち)の痕跡であると考えられる。規模は長いもので19m、幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。出土遺物がなく時期は不明であるが、畠溝を切っており直上には奈良時代の包含層があることから、7~8世紀代に比定できる。



第19図 98-B区土坑502・509断面図



第20図 98-B区土坑618平面・断面図

第2節 中世の遺構・遺物

1. 97-A区(第21図、図版3)

a. 挖立柱建物・ピット(第22~26図、図版43)

掘立柱建物97-A-1は、基本的に桁行5間・梁行2間の南北棟の建物である(第22図)。南側に庇をもち、全体的には桁行6間となる。また、東南部に土坑36をもつ1間×1間の張り出した空間をもつ。桁行は12.2m、梁行は4.5mで、柱間は桁行2.4~2.5m、梁行2.1~2.3mである。庇の出は1.2mである。張り出した空間は、東西2.9m×南北2.5mである。柱掘方は円形で、径が0.3m前後、深さが最大0.4m程である。ピット39から瓦質の甕(第23図4)が出土している。13世紀後葉から14世紀前半までおさまるものである。このことから、掘立柱建物の時期は少なくとも14世紀前半を下らないが、後述する土坑36から出土した瓦器碗・上師質羽釜などの特徴から与えられる年代が13世紀前葉頃であることから、存続時期はほぼ13世紀代でおさまるものと考えられる。

掘立柱建物97-A-2は、桁行4間・梁行2間以上の南北棟の建物と考えられる(第24図)。また、南側に仕切った土坑64をもつ。桁行は10.3m、梁行は3.2m以上で、柱間は桁行2.1~2.9m、梁行2.6~2.8mである。柱掘方は円形で、径が0.3m、深さが0.2~0.3mである。

掘立柱建物97-A-3は、桁行2間以上・梁行2間の東西棟の建物と考えられる(第25図)。桁行は3.0m以上、梁行は4.0mで、柱間は桁行1.6・1.8m、梁行2.0mである。柱掘方は円形で、径が0.3m、深さが0.2~0.35mである。

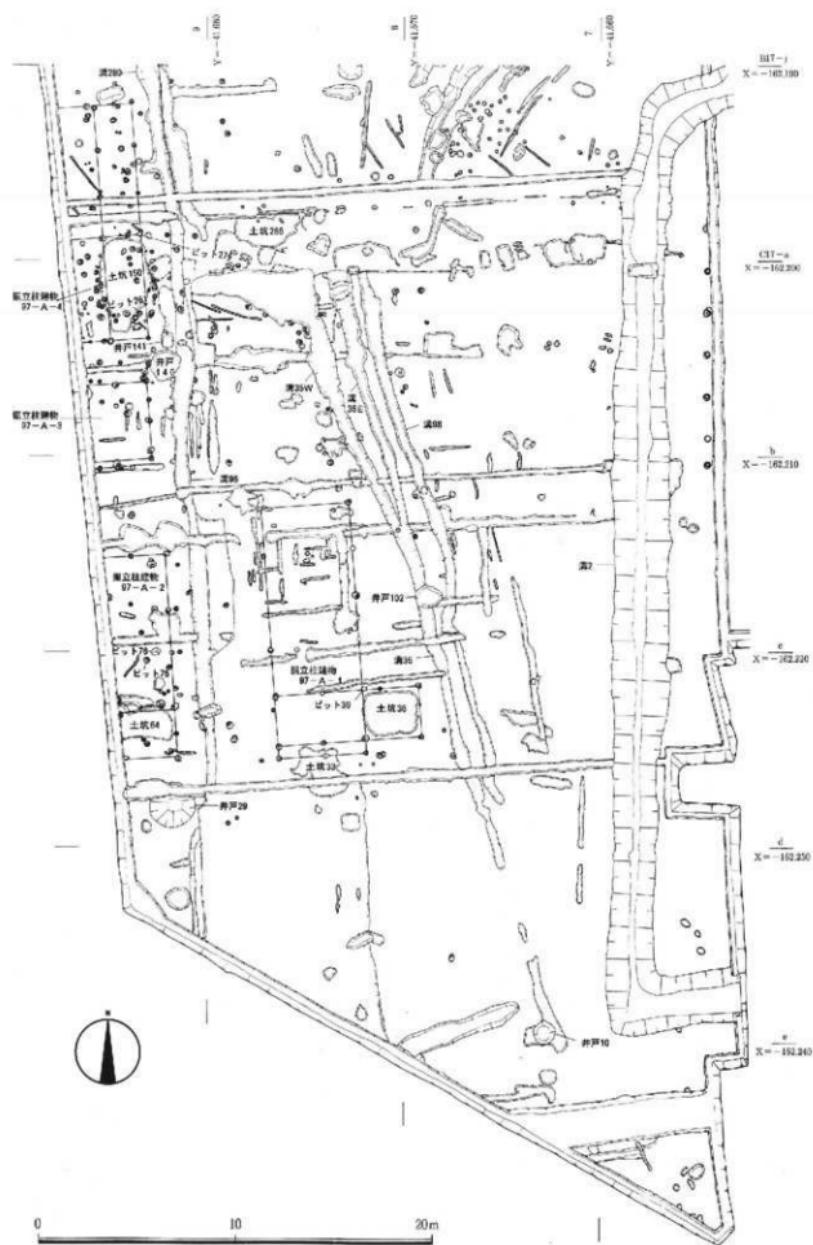
掘立柱建物97-A-4は、桁行4間・梁行2間の南北棟の建物である(第26図)。南東部に大型土坑150をもつ。桁行は12.0m、梁行は3.7m以上で、柱間は桁行2.1~2.4m、梁行1.9~2.0mである。土坑150をもつ部分の柱間桁行は、5.3mと他より長い。柱掘方は楕円形で、径が0.25~0.35m、深さが0.15~0.25mである。ピット274から瓦器の高台片が出土している(第23図3)。高台は小片のため、詳細は不明であるが、わずかに貼り付けられた高台から13世紀後葉頃と考えられる。

ピット75は、C17-c9において検出された。平面は円形で、径約30cm、深さ約20cmの規模を測る。柱芯痕跡の下部に、礎板としてこぶし大よりやや大きい石が置かれていたが、その直下から瓦器碗が1点出土している(第23図1)。口径11.2cm、器高3.2cmの、高台が消失してしまった形態である。13世紀末葉から14世紀初頭頃に比定できる。

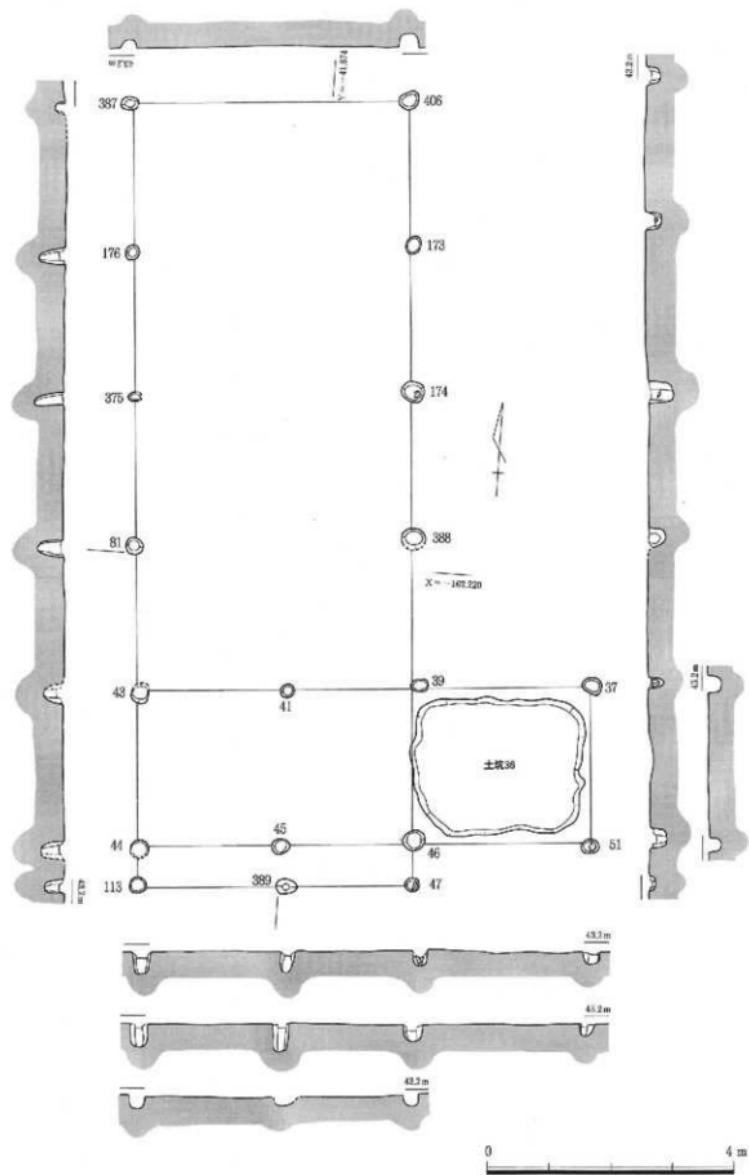
ピット76は、C17-c9でピット75の北東に近接して検出された。平面は不定形な楕円形で、長径約50cm、短径約35cmで、深さ約25cmを測る。上師器皿が1点出土している(第23図2)。

b. 溝(第27~29図、図版5・43)

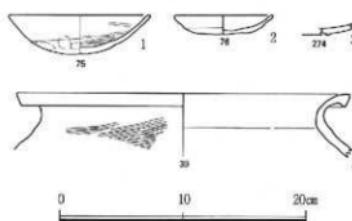
溝96は、調査区西端でA・B区にまたがって検出された。B17-d9からC17-d9までの南北約54mにわたって北流する。方向は、西に約7°振るが、ほぼ南北を意識して設定されていると思われる。規模は、検出段階で幅約0.7~1.0m、深さ約15~25cmである。この溝は南北方向に連立



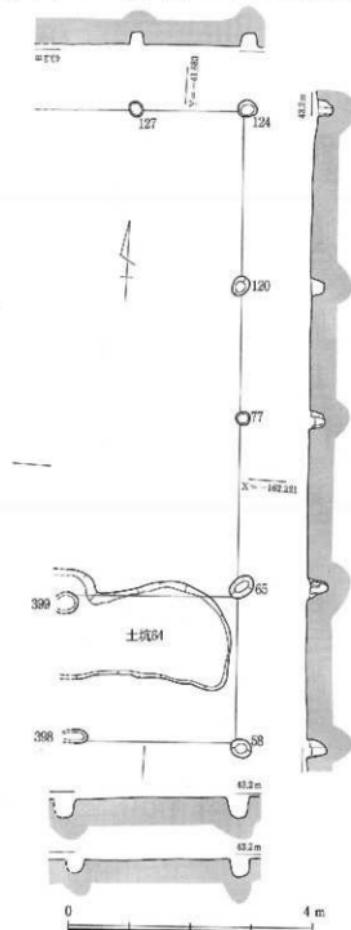
第21図 97-A区構造図



第22図 据立柱建物97-A-1平面・断面図



第23図 97-A区ピット39・75・76・274出土遺物



第24図 挖立柱建物97-A-2平面・断面図

する掘立柱建物群(铸造工房群)のすぐ東脇を流れ、铸造などの諸作業に伴って使用された溝である可能性が高い。

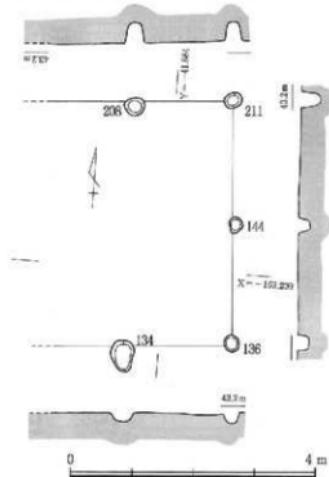
出土遺物(第28図)には、青磁碗(1~3)、白磁皿(4)、瓦器碗(5)、土師器皿(6・7)、軒平瓦(8)、土師質甕(9)、東播系須恵器鉢(10)などが出土している。青磁碗は龍泉窯系で、鍋をもたない蓮弁の1と鍋をもつ蓮弁の2がある。4の白磁皿は、口縁が口禿げである。5の瓦器碗は、高台が消失してしまっているタイプであり、13世紀末葉から14世紀初頭頃である。8の軒平瓦の唐草文は、巻き込みがしっかりとしており、外縁の幅も狭い。また、中心部は欠損してしまっているが、円形の剥離が認められ、梵字が配されていた可能性も残る。これらの特徴から、12世紀代に属すると考えられる。9の甕は、口縁を大きく外反させ、端部に面をもたせている。体部には、細かな平行タタキを施している。10は、体部下半が丸みをもっており、体部上半から口縁部にかけて若干外反する。口縁部は、上下両方向への拡張が認められ、丸く作られている。これは、13世紀初頭から前半頃に比定される。このように、遺物には時期幅が認められる。すなわち、溝96は、少なくとも13世紀初頭から14世紀初頭にかけて機能していたと考えられる。

溝35および溝98は、A区東南部から北西部にかけてほぼ平行して北流する溝である。規模は検出段階で、溝35が幅約0.55~1.45m、深さ約12~18cm、溝98が幅約0.45m、深さ約10cmである(第29図)。時期を決定しうる遺物が出土しておらず、時期は不明である。ただ、中世段階のほかの遺構がほぼ南北・東西方向を基準に設定されていることを考えると、西に約20°振るこの二つの溝は、先行する時期の遺構であると考えられる。

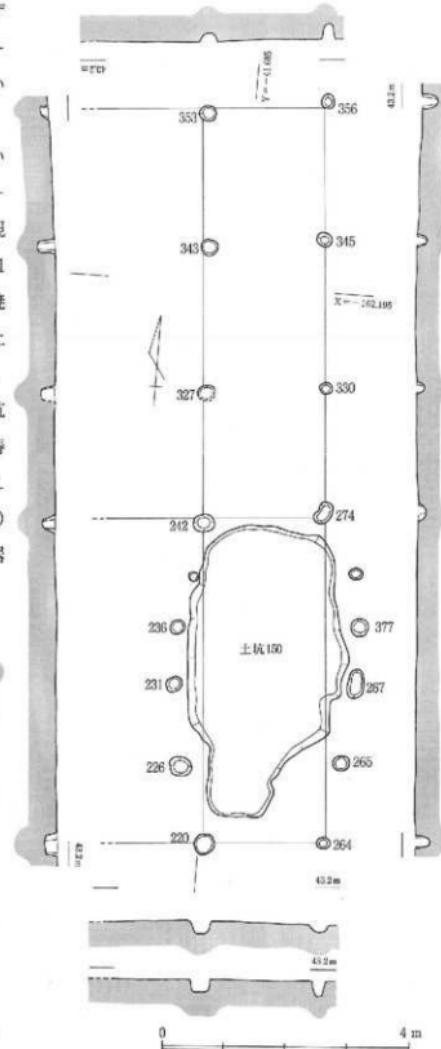
c. 土坑(第30~34図、図版6・44)

上坑33は、C17-c8で検出した。規模は、径約2.4m、深さ約6cmで、不定形の浅い土坑である(第30図)。一部、現代の埋管によって損壊を受けていた。掘立柱建物97-A-1の南側底部の真下から建物外にかけて広がっている。この土坑内からは遺物が出土しておらず、浅い窪地に灰黄色粘土が入り込んでいた。しかし、わずかにか壁片も出土した。掘立柱建物97-A-1は、鋳造に関わる作業を屋外で行っていたことも考えられる。

上坑36は、C17-c7・8にまたがっている。また、前述のとおり、掘立柱建物97-A-1に伴うと考えられる上坑である。規模は、2.2m×2.9mの隅丸方形で、深さ約10cmである(第31図1)。土坑内からは、焼けた石などがある程度西端に密集して出土した。また、鋳型片がわずかに出土した。建物の一画を張り出させて形成された土坑で、建物内に取り込んでいることから、鋳造作業などを屋内で行った場であると考えられる。出土遺物(第33図)では、瓦器楕(1)や、土師質釜(2)などがある。1の瓦器



第25図 据立柱建物97-A-3 平面・断面図

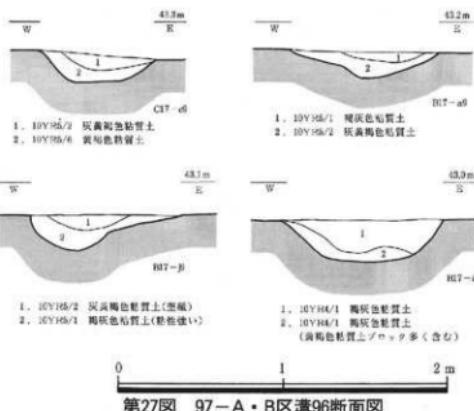


第26図 据立柱建物97-A-4 平面・断面

第4章 検出した遺構と遺物

椀は、復元口径14.6cm、器高5.1cmであり、縮小化の傾向はまだ認められない。ミガキはやや粗雑ながら、高台は断面台形である。2の羽釜は、口縁部を未だ折り返す形状であり、玉緑化する以前である。これらの特徴から、13世紀中葉から後葉頃に比定できる。

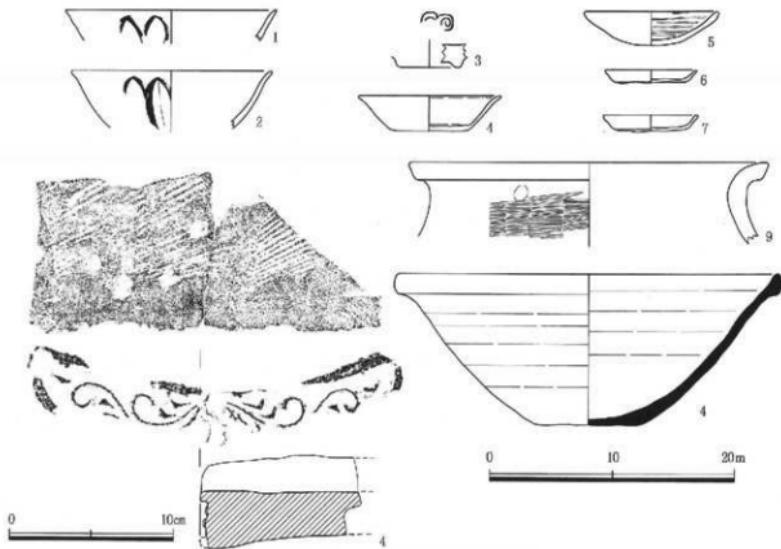
土坑64は、C17-c9で検出した。掘立柱建物97-A-2に伴うと考えられる土坑である。土坑の西側



第27図 97-A・B区溝96断面図

は調査区外に出るが、長辺2.7m、短辺約1.5m以上のはば圓丸方形の平面プランで、深さは約6cmである(第31図2)。焼けた石などはないが、焼土や鋳型片がわずかに出土した。この土坑も建物内に取り込まれており、屋内での鋳造作業に使用された土坑であると考えられる。

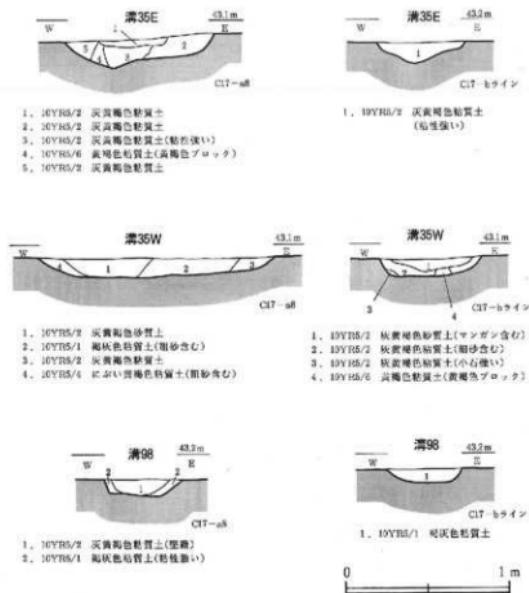
土坑150は、B17-j9からC17-a9にまたがって検出した。掘立柱建物97-A-4に伴うと考えられる土坑である。長さが約4.9m、幅が北側の広い部分で約2.6m、南側の狭い部分で約1.1mと台形気味の特徴的な平面プランである(第32図)。深さは約25cmである。ほかの土坑と比較しても



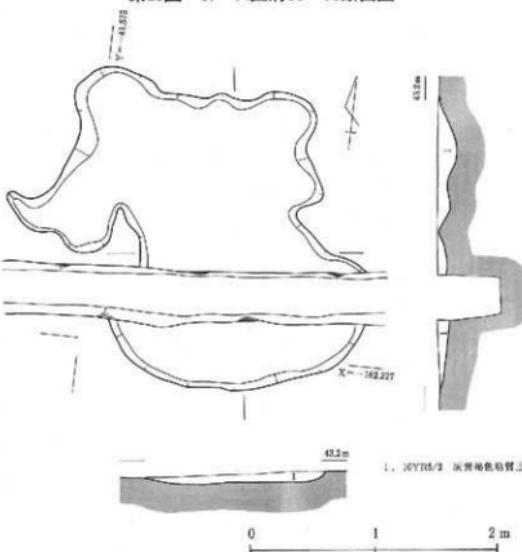
第28図 97-A・B区溝96出土遺物

かなり大きな規模である。また、この土坑の周囲には無数の柱穴が検出されている。柱穴の個別の時期は不明であり他時期の柱穴が含まれている可能性は残るが、土坑の周囲に限って取り囲むように存在する柱穴群は、かなりの割合でこの土坑に付属する柱構成していたと考えられる。土坑内からは、炭や焼土、焼け石、わずかに炉壁片も出土しており、鋳造に関わる作業を行っていたことは間違いないであろう。建物全体の柱の並びから、屋内に取り込まれていた可能性が高いと考える。

出土遺物(第33図)では、瓦器碗(5)や束縛系須恵器鉢(3)、瓦質甕(4)などが出土している。3は底部を欠くが、体部下半が丸みをもっており、体部上半から口縁部にかけてわずかに外反する。口縁部は、上下両方向への拡張が認められ丸く作られている。これは、13世紀中葉から後葉頃の特徴である。5の瓦器碗の高台はわずかに貼り付けられた形態であり、13世紀後葉頃に比定できる。このように、出土遺物には時期幅が認められる。すなわち、土坑150は13世紀中葉から後葉にかけての時期幅



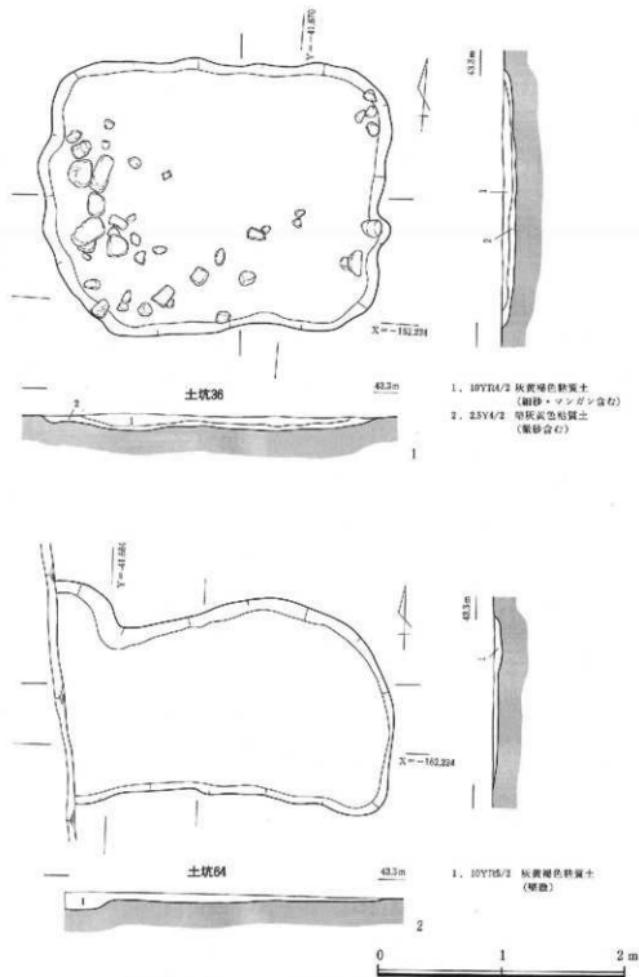
第29図 97-A区溝35・98断面図



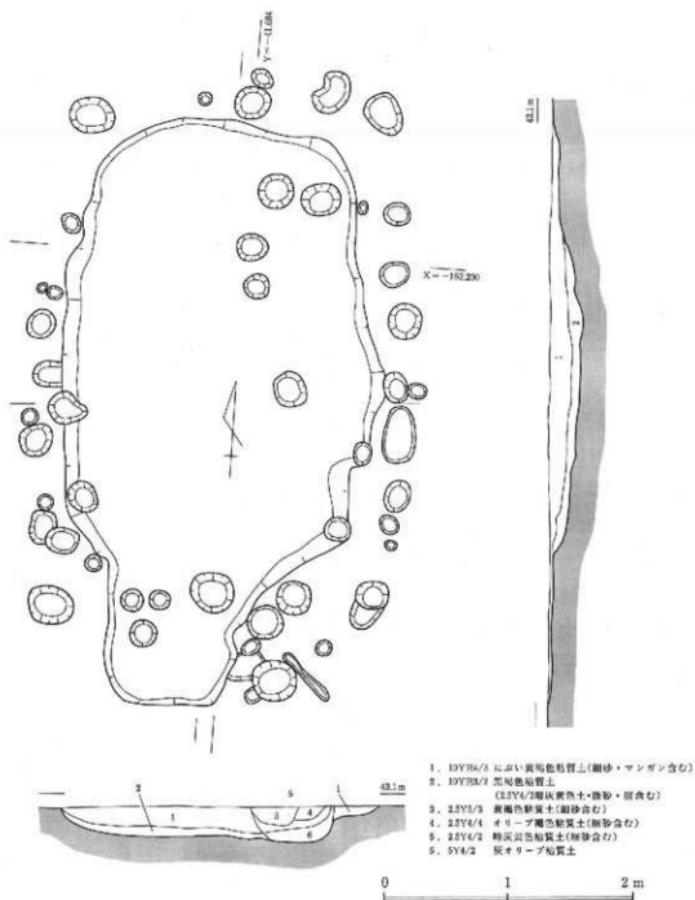
第30図 97-A区土坑33平面・断面図

でほぼおさまるものと考えられる。

上坑285は、B17-j8で検出した。規模は、長辺約3.4m、短辺約1.5m、深さ約13cmで、やや長方形に近い平面プランである(第34図)。時期決定しうる遺物は出土しておらず時期不明であるが、長軸を東西にし、ほかの中世の土坑とも規模的に類似することから、同じ中世段階の遺構と考える。ただ、周囲にピットがなく、埋土もマンガンを含む灰黄褐色粘質土で地山の土に近く、深さもごく浅いため、自然のくぼみの可能性もある。



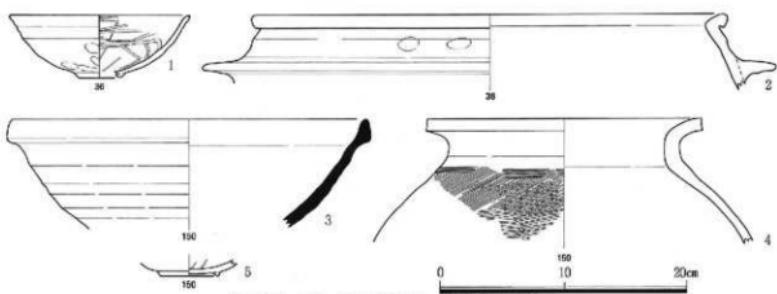
第31図 97-A区土坑36・64平面・断面図



第32図 97-A区土坑150平面・断面図

d.井戸 (第35~42図、図版5・6・44~47)

井戸10は、C17-d7中央南端で検出した。規模は、径約1.15m、深さ約70cmの円形素掘り井戸である。最下層には約20cmの暗灰黄色粘土が堆積しており、滯水層が認められる。また、この井戸は廃絶時に大量の上器類を廃棄していた(第35図1)。とくに、羽釜類が多く廃棄されているのが特徴的である。出土遺物(第36・37図)には、瓦器榤(1・2・9~20)や土師器皿(3~7)、瓦器皿(8)、瓦質羽釜(23~26)、土師質羽釜(21・22・27~31)などがある。また、炉壁片や若干の鋸型片、砥石1点(第228図23)など鋸造関連遺物も出土している。まとまった瓦器榤は、見込みに螺旋・鋸歯状の暗文が認められる、高台がかろうじて付いているものから消失してしまっている

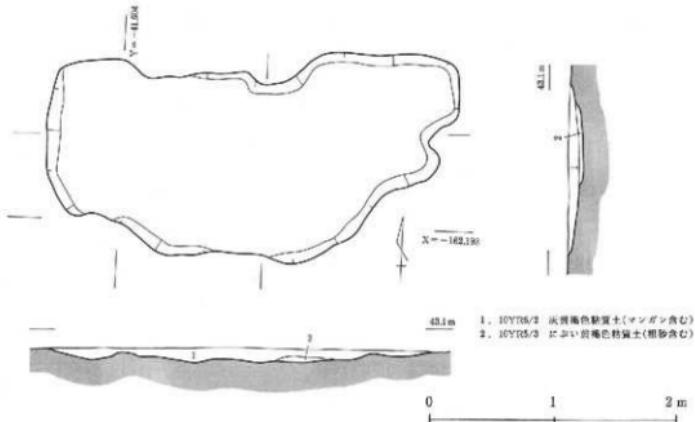


第33図 97-A区土坑36・150出土遺物

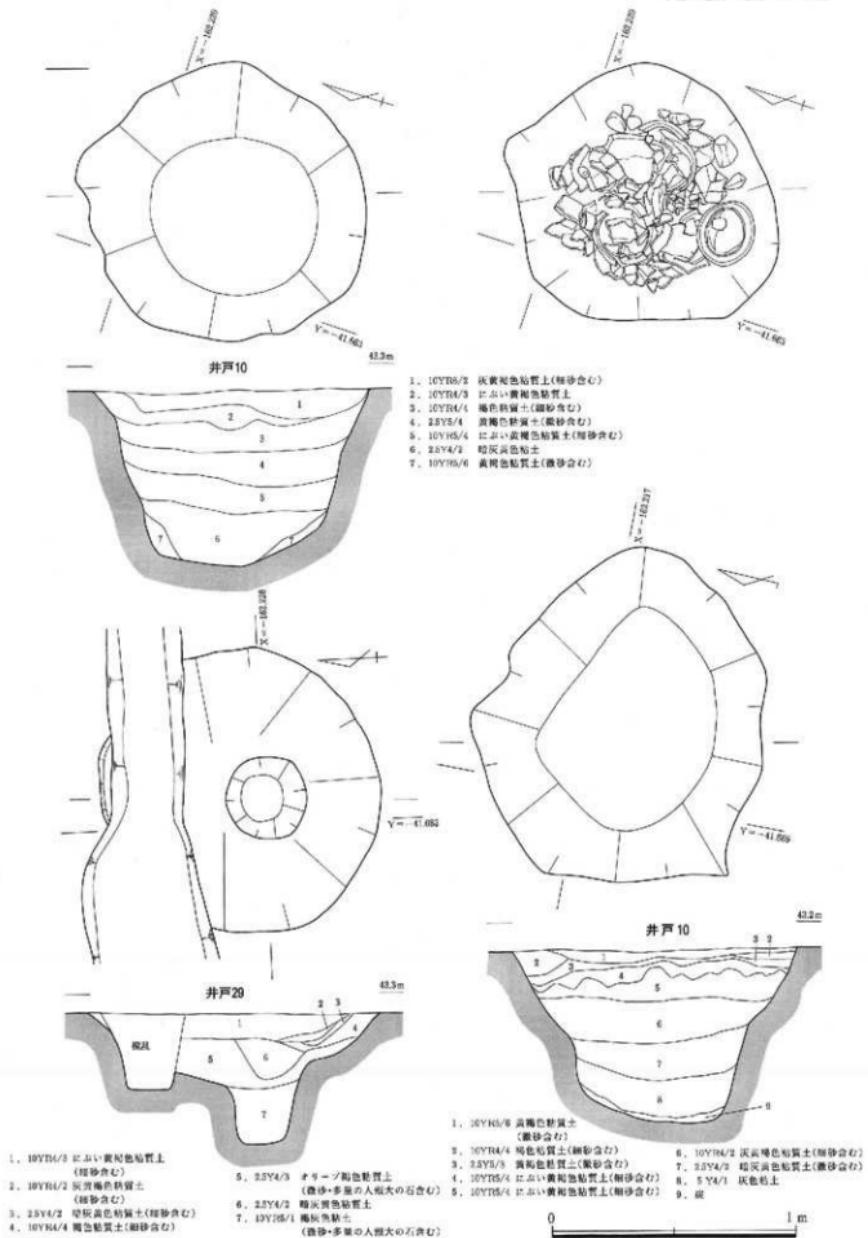
ものまで含まれている。器高はやや深みがなくなり3.5cm前後である。上師質羽釜の口縁形態やプロポーション、2の形態と共に瓦質羽釜(26)の特徴なども含めて考慮すると、この井戸10は13世紀中葉から14世紀初頭にかけて存続したと考えられる。

井戸29は、C17-c9で検出した。井戸は2段掘りで、上段径約1.15m、下段径約35cm、深さ約55cmの円形素掘り井戸である(第35図2)。この井戸29は、下段に褐灰色粘土が20数cm堆積しており、滯水が認められる。また、遺物の出土はわずかであったが、廃絶時に人頭大の礫を多数廃棄してある状態であった。その中には火を受けた石も含まれており、その他に炉壁片もわずかに出土した。出土遺物(第38図)は、土師器皿(1・2)や青磁碗(3)などである。3の青磁碗は、龍泉窯系で外面に鎬をもつ蓮弁を施している。13世紀前半に一定点が押さえられる遺物である。掘立柱建物97-A-2に伴う可能性が高いと考えられる。

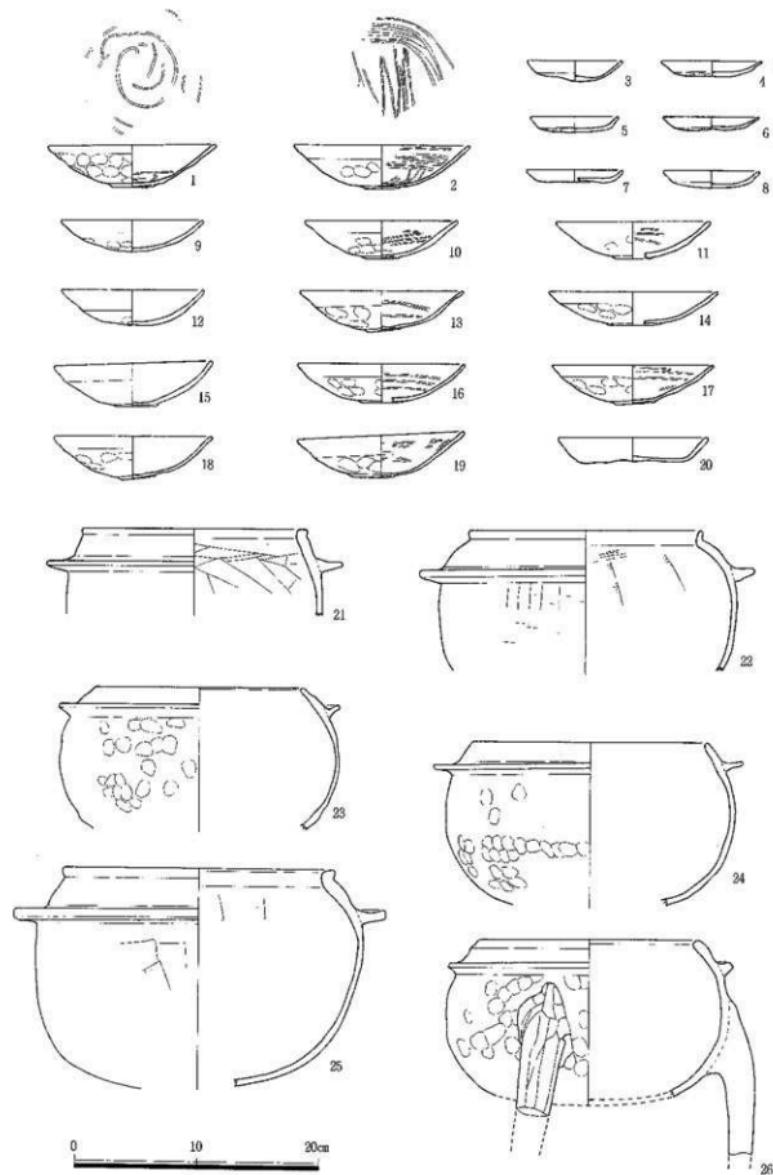
井戸102は、C17-b7で検出した。規模は、径約1.2~1.35m、深さ約70cmの素掘り井戸である。やや梢円形の平面プランである(第35図3)。断面は下段がややすぼまる台形を呈しており、底面



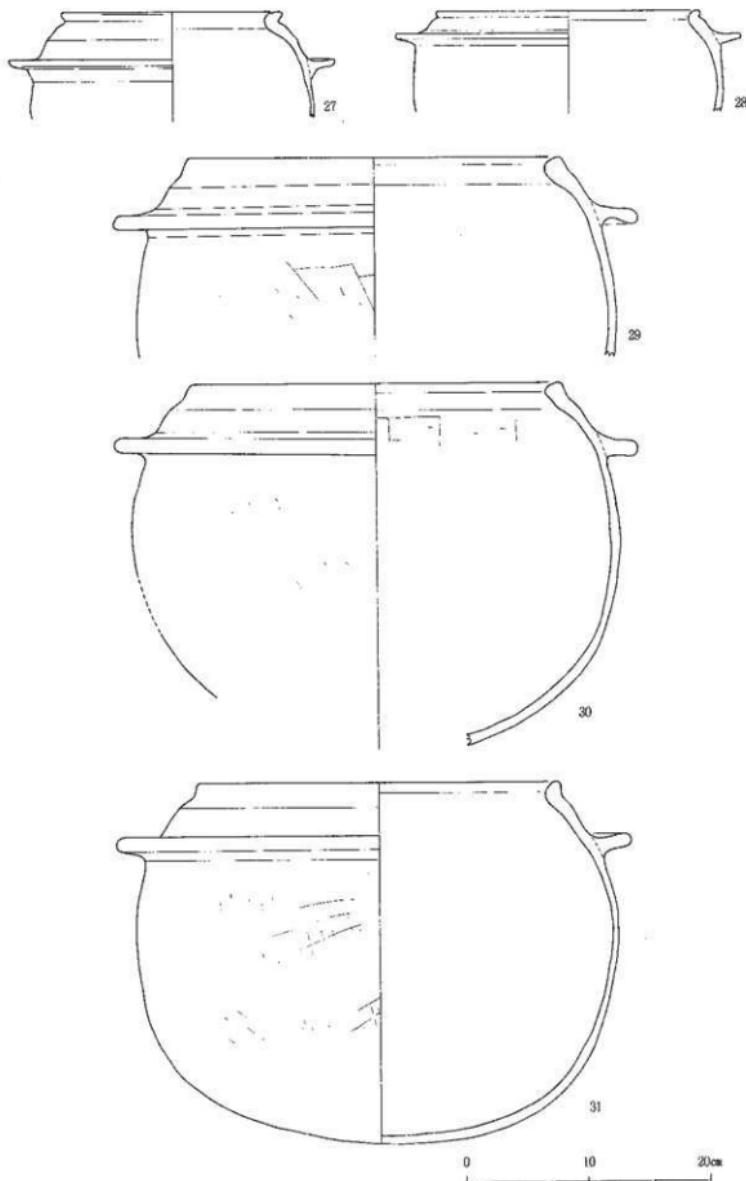
第34図 97-A区土坑285平面・断面図



第35図 97-A区井戸10・29・102平面・断面図



第36図 97-A区井戸10出土遺物①

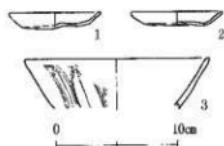


第37図 97-A区井戸10出土遺物(2)

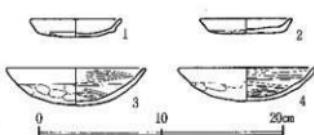
には炭が約2～3cm溜まっている状況であった。また、その上層には灰色粘土層が約15cm堆積しており、滯水層が認められた。なお、この井戸102は溝35を切りこんで構築されている。

青磁碗(1・2・4)や青磁皿(3)、上師質壺(5)、瓦質壺(6)、土師質羽釜(7)などが出土している(第40図)。青磁碗は龍泉窯系で、1は底部の器厚が厚く、内面には草花文を片彫りしている。2は外面上に鍋運弁を施している。3は同安窯系で、体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段を有する。内外面とも無文であり、外面部下半および底部には施釉されていない。12世紀後半に一定点が求められる。7の羽釜は、口縁端部の形態から13世紀代の後半頃であろう。これらの特徴から、12世紀後半以降13世紀代までの時期幅が認められる。また、井戸の中には、火を受けたこぶし大以上の大きな石が数多く廃棄されていた。掘立柱建物97-A-1に伴う可能性が高いことから、この工房の土坑36で生じた焼け石を井戸102に廃棄したことも想定できる。

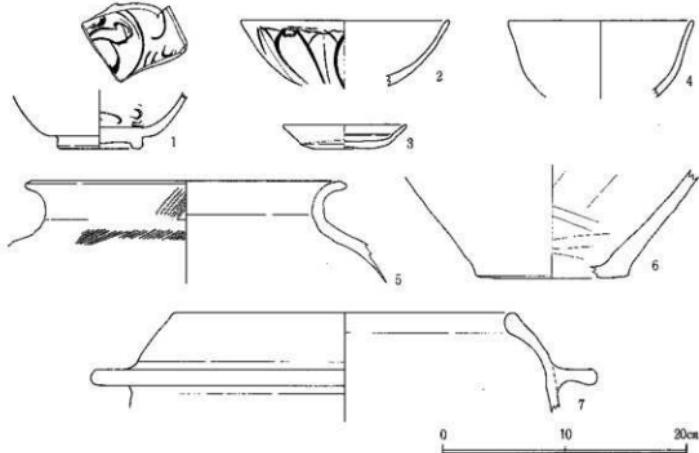
井戸140・141は、C17-a9で近接して検出された。掘立柱建物97-A-3および掘立柱建物97-A-4に伴うものと捉えられる。とともに、炉壁片がごくわずか出土している。井戸140は、上段径約1.5m、下段径約50～70cmの2段掘りで、深さ約1.5mの円形素掘り井戸である(第41図)。この井戸140からは、土師器皿(1・2)や瓦器碗(3・4)が出土している(第39図)。瓦器碗は、ともに口径11cm程度で、器高は3cm前後である。高台が消失してしまっており、13世紀末葉から14世紀初頭頃に比定できる。



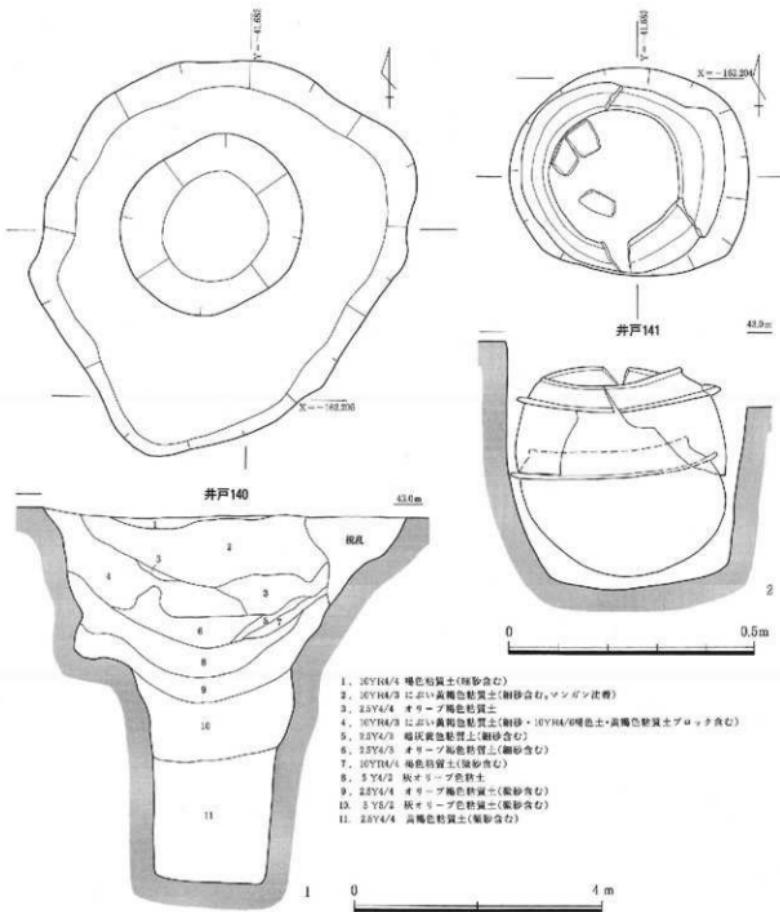
第38図 97-A区
井戸29出土遺物



第39図 97-A区井戸140出土遺物



第40図 97-A区井戸102出土遺物



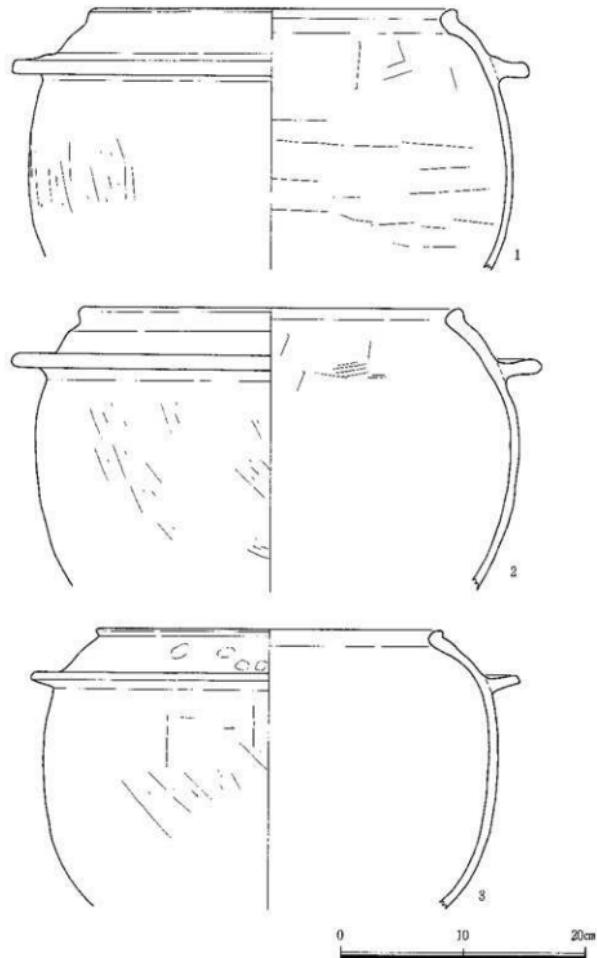
第41図 97-A区井戸140平面・断面図及び井戸141平面・立面図

すぐ北に位置する井戸141は、径約0.85~1.0m、深さ約1.0mである。羽釜を転用し、底部を打ち欠いた3個体を重ねて井戸枠としたものである(第41図2)。転用した羽釜(第42図1~3)はすべて土師質で、径29~32cm、胴部最大径38~40cmのはば同一法量の羽釜である。口縁端部が玉縁状で丸くおさめており、外面はケズリ調整を施している。13世紀代に比定できる。

井戸140は、铸造工房群に伴うと考えられる溝96の肩をわずかに切って掘削されており、井戸141は溝96を切らない。遺物の時期差では、井戸141が井戸140よりやや先行するとも考えられる。しかし、井戸の規模がまったく異なっており、また最深部のレベルがT.P.41.5m(井戸140)とT.P.

42.0m(井戸141)で、約50cmの差がある。井戸140の埋土でT.P.42.0m付近は、堆水レベルよりも上位にあることから、井戸141では水が湧かなかったと考えられる。このため井戸141は、井戸140から汲みだした水を入れて二次的に利用するなどの可能性が考えられる。このことから、時期的には併存した、用途を別にした2つの井戸でセット関係を保持していると考えておきたい。

なお、井戸10・29・102・140・141の掘削最深部のレベルは、それぞれT.P.42.5m、42.6m、42.4m、41.5m、42.0mであり、北に行くにつれて湧水レベルは低くなっていくことが推測される。

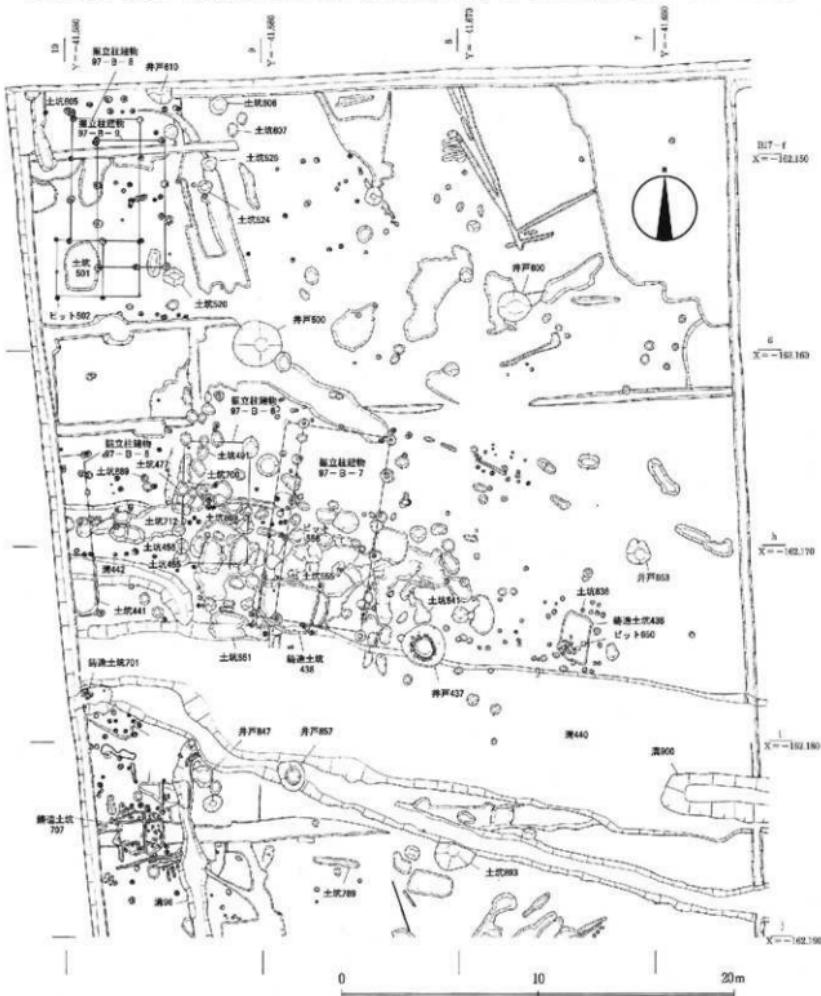


第42図 97-A区井戸141出土遺物

2. 97-B区(第43図、図版7)

a. 挖立柱建物・ピット(第44~49図、図版55)

掘立柱建物97-B-5は、桁行4間・梁行1間以上の南北棟の建物である(第44図)。南部に大型土坑441をもつ。桁行は8.4m、梁行は1.2m以上で、柱間は桁行1.5~2.0mである。ただし、土坑441をもつ部分の柱間桁行は3.1mと長い。柱掘方は円形で、径0.3m、深さ0.15~0.4mである。

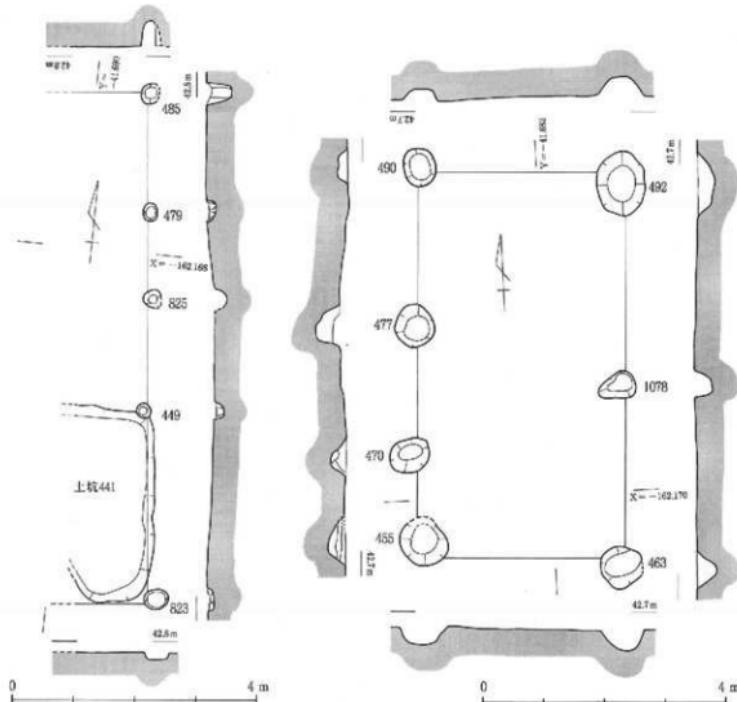


第43図 97-B区遺構図

掘立柱建物97-B-6は、桁行東側2間・西側3間・梁行1間の南北棟の建物と考えられる(第45図)。ただ、ほかと比較して掘方が大きく、柱痕が不明瞭で、柱抜き取り後の行為とも考えられるが、瓦器碗を埋納しているものも認められる。このため、建物でない可能性も残る。建物とした場合、桁行は6.3m、梁行は3.5mで、柱間は桁行東側2.8・3.5m・西側1.5・2.0・2.5m、梁行3.5mである。柱掘方は不整円形で、径が0.6~0.7m、深さが0.3~0.4mである。

掘立柱建物97-B-7は、桁行5間・梁行1間の南北棟の建物である(第46図)。西側に庇をもち、全体では梁行2間になる。桁行は10.0m、梁行は4.5~4.6mで、柱間は桁行1.8~2.1m、梁行4.5~4.6mである。庇の出は、0.9mである。柱掘方は円形で、径が0.4~0.7m、深さが0.3~0.7mである。ただし、庇部分の柱掘方径は、0.2~0.3mと小さい。ピット556から、瓦器碗片が1点(第49図1)出土している。底部の小片であるが、13世紀中葉前後の時期でおさまるであろう。

掘立柱建物97-B-8は、基本的には桁行4間・梁行1間の南北棟の建物である(第47図)。南西部を若干西側に張り出させて間仕切り、土坑501をもつ特異な平面形であると考えている。桁行は9.1m、梁行は3.5mで柱間は桁行2.0~2.1m、梁行3.5mである。ただし、土坑501を取り囲む

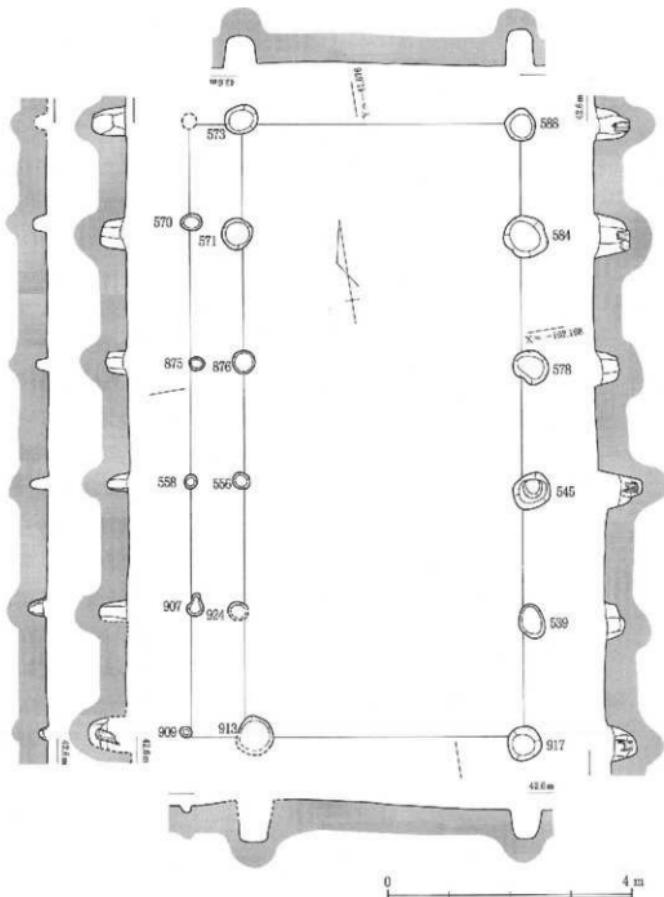


第44図 掘立柱建物97-B-5平面・断面図 第45図 掘立柱建物97-B-6平面・断面図

部分の柱間桁行2.9m、柱間梁行2.4mである。柱掘方は円形で、径が0.2~0.3m、深さが0.1~0.3mである。ピット502から瓦器挽片が1点(第49図2)出土している。13世紀中葉に比定できる。

掘立柱建物97-B-9は、桁行3間・梁行北側1間・南側2間の南北棟の建物である(第48図)。桁行は6.4m、梁行は3.5mで、柱間は桁行1.9~2.3m、梁行北側3.5m、南側1.5~2.0mである。柱掘方は円形で、径が0.3~0.5m、深さが0.2~0.4mである。

ピット650は、B17-h7の、鋳造土坑436の内部から検出された。円形のピットで、径約35cm、深さ約30cmを測る。鋳造土坑436の東辺中央で見つかったが、関連は不明である。口径12.8cm、器高約3.3cmの瓦器挽が出土(第49図3)している。13世紀後葉頃と考えられる。



第46図 挖立柱建物97-B-7 平面・断面図

b. 鋳造遺構 (第50~62図、巻頭図版2・4、図版8~12・48・49)

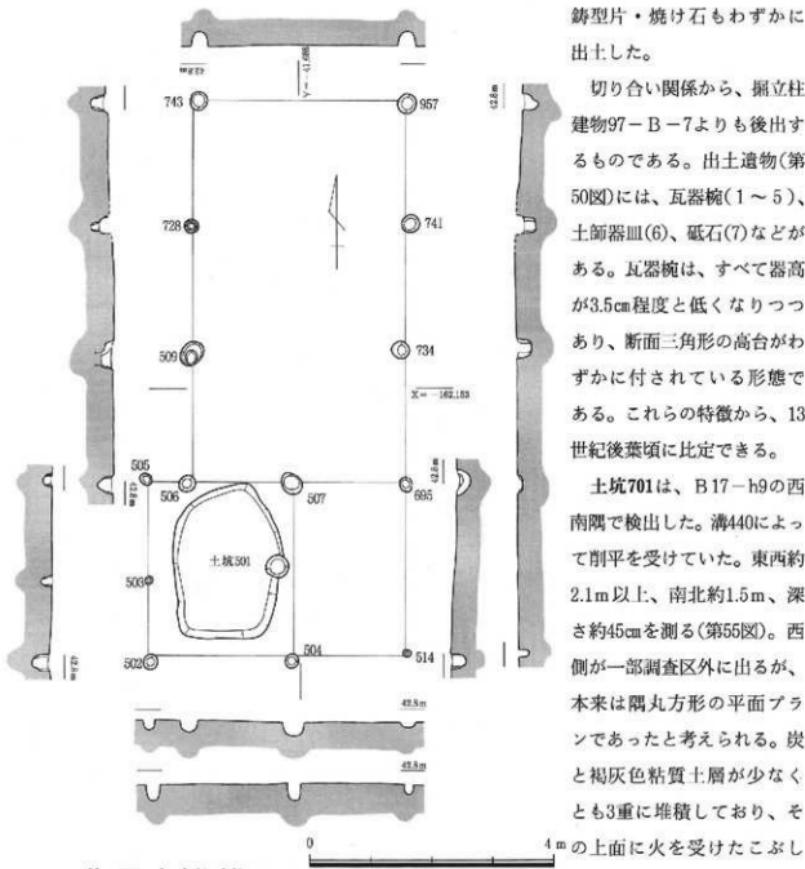
土坑436は、B17-h7で検出した。検出段階で規模は、東西約1.5m、南北2.6m、深さ約5~8cmの土坑である(第51図)。ほぼ長方形の平面プランである。削平度が強く、かろうじて検出し得た土坑であるが、火を受けたこぶし人の礫や炭・焼土塊が出土した。後述する土坑435のすぐ北側であり、この土坑436からの廃棄行為で形成されたのが、土坑435である可能性がある。また、柱穴の並びから、覆屋根があったことも考えられる(第52図)。出土遺物はないが、廃棄土坑の土坑435との関連から、ほぼ同時期の13世紀中葉から後葉頃であると考えられる。

土坑438は、B17-h8・9で検出した。規模は東西約2.9m、南北約2.45m、深さ約40cmである(第53図)。上層から下層まですべてに炭・焼土塊が多量に含まれていた。また、炉壁片が多量に、

鋳型片・焼け石もわずかに出土した。

切り合ひ関係から、掘立柱建物97-B-7よりも後出するものである。出土遺物(第50図)には、瓦器碗(1~5)、土師器皿(6)、磁石(7)などがある。瓦器碗は、すべて器高が3.5cm程度と低くなりつつあり、断面三角形の高台がわずかに付されている形態である。これらの特徴から、13世紀後葉頃に比定できる。

土坑701は、B17-h9の西南隅で検出した。溝440によつて削平を受けていた。東西約2.1m以上、南北約1.5m、深さ約45cmを測る(第55図)。西側が一部調査区外に出るが、本来は隅丸方形の平面プランであったと考えられる。炭と褐灰色粘質土層が少なくとも3重に堆積しており、そ



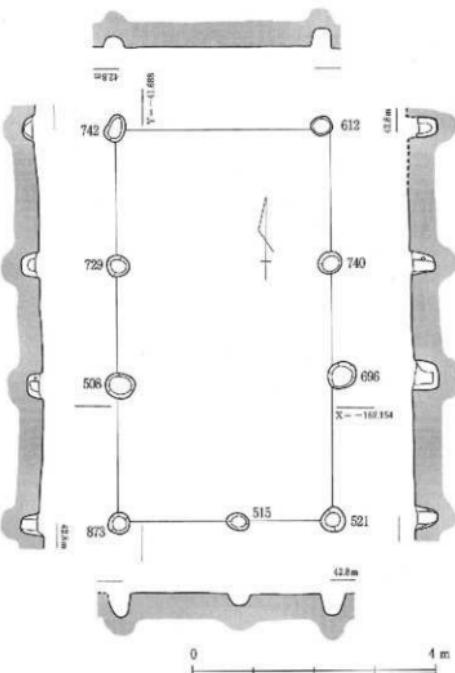
第47図 掘立柱建物97-B-8 平面・断面図

大以上の石が西半部に比較的密集して出土した。堆積の具体は、炭・褐灰色粘質土層が水平に積むのではなく、横断面形の四字状に互層堆積している。つまり、土坑底面(地山面)から1cmの灰白色粘質土を敷き、その上に約10cmの灰褐色粘質土、さらに約1cmの炭層が堆積している。この上面には、東西方向に長い約10cm×約80cmの板材が乗っていたが、この板材が鋳造作業に関わる材で、原位置をとどめているものか否かは不明である。それより上層は、炭や焼土塊・褐灰色粘質土が土坑中央に向かって傾斜堆積している状況であった。石は、火を受けた面が上面や側面ではなく、裏面に認められるものが多いことから、原位置で火を受けたものではなく、むしろ廃棄さ

れた状況を示していると考えられる。削平を受けているため、上部構造は不明で、鋳造作業を行う場と明確には特定できないが、土坑内の堆積層や炉壁・鋳型片・焼け石などが含まれていることなどから、鋳造関連土坑と捉えることは妥当であろう。土坑内からは、わずかに土師質羽釜(1)や瓦器碗(2)の破片が出土した(第56図)。瓦器碗の高台や羽釜口縁の形態的特徴などから、13世紀中葉頃に比定できる。

土坑705は、土坑7

01の約6m南、B17-19で検出した。溝96によって土坑の東側が一部削平を受けていた。規模は、検出状況で東西約2.1m、南北約1.3m、深さ約20cmでやや遺存状

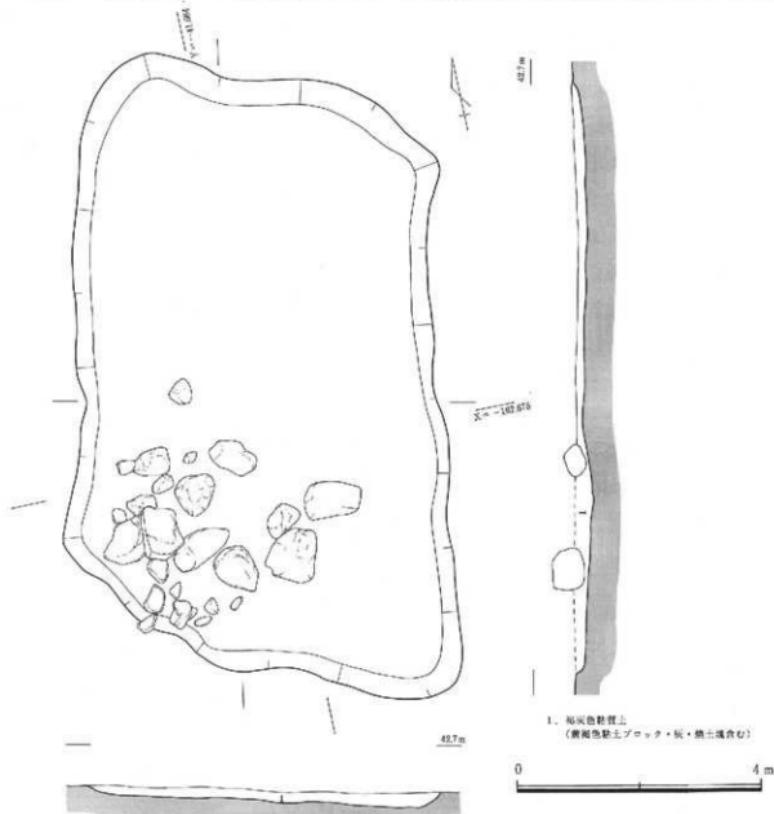


第48図 据立柱建物97-B-9平面・断面図

第49図 97-B各区各ピット出土遺物
(502・556・650・944)

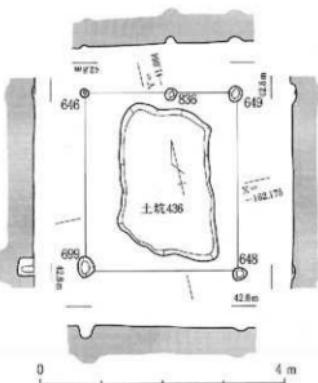
況が悪く、不定形の平面プランである(第57図)。埋土は、黄褐色粘質土を10数cm積み、その上に炭層が薄く堆積している状況であった。さらに、その上面には、こぶし大程度の礫が東半部にやや偏って密に出土した。これは、粘土と炭を互層にする点や、その上面に礫が置かれている点で、様相が土坑701と類似している。上部構造は分からぬが、炉壁片や鋳型片、鉄製刀子(第58図)なども含まれており、上坑701と同様鋳造関連土坑であると考えられる。出土遺物(第59図)は、青磁碗(1)、土師器皿(2)、瓦器碗(4・5)、土師質羽釜(6)、東播系須恵器の鉢(7・8)などがある。瓦器碗は、わずかに高台が付される5と、高台が消失してしまっている4が共伴する。また、7・8は、口縁端部が上方への拡張が強調されており、底径も縮小傾向にある。これらの特徴から、13世紀中葉から14世紀初頭頃の時期幅が認められる。

上坑707は、土坑705のすぐ南に隣接し、B17-i9で検出した。上部は削平を受けていたが、他

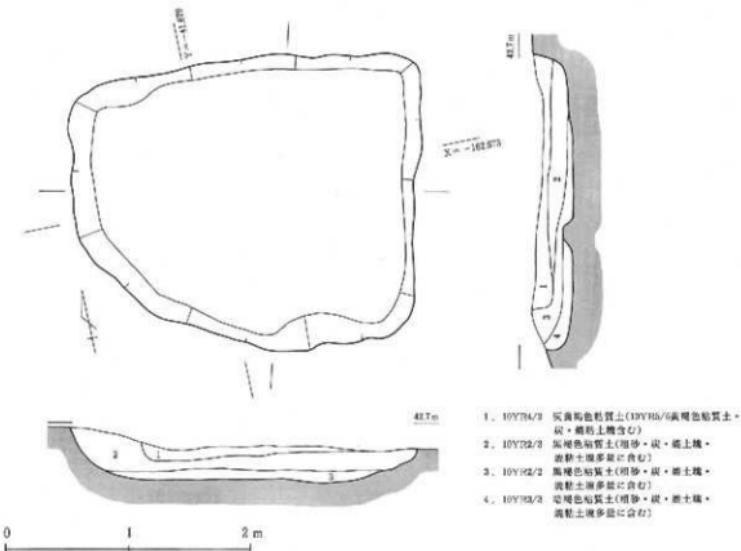


第51図 97-B区鋳造土坑436平面・断面図

の2基の土坑よりは掘削深度が深く、検出状況の規模は、東西約2.5m、南北約2.4m、深さ約50cmを測る(第60図)。平面プランはほぼ隅丸方形である。土坑底面(地山面)から黄灰色粘質土が約13~15cm、その上に灰黄褐色粘質土が約7~11cm積まれており、その直上面に小円礫が全面に敷かれている状況であった。また、その面の土坑壁際周囲には、人頭大からこぶし大までの石が多数出土した。これらの石には火を受けているものも含まれる。小円礫は火を受けていなかった。小円礫検出面の上層には黄褐色粘質土が5cm程度被覆しており、その上に炭や焼土塊・鋳型片など铸造関連遺物が廃棄された状況であった。また、特記すべきは、**第52図 97-B区铸造土坑436の覆屋構造**土坑構築の際、青磁碗を打ち欠いて高台のみにした破片が、土坑中央に高台を上にして据えられた状態で出土したことである(第61図)。これは、土坑を構築する際の地鎮行為に当たると考えられる。出土遺物(第62図)には、その青磁碗(1)のほか、瓦器碗(2・3)、瓦質甕(4)などがある。また、砥石(第228図2)も出土している。5は土師質の鉢形であるが、形態は例を見ず不明である。铸造土坑から出土したことを考慮すると、用途としては铸造作業に関わることが推測される。



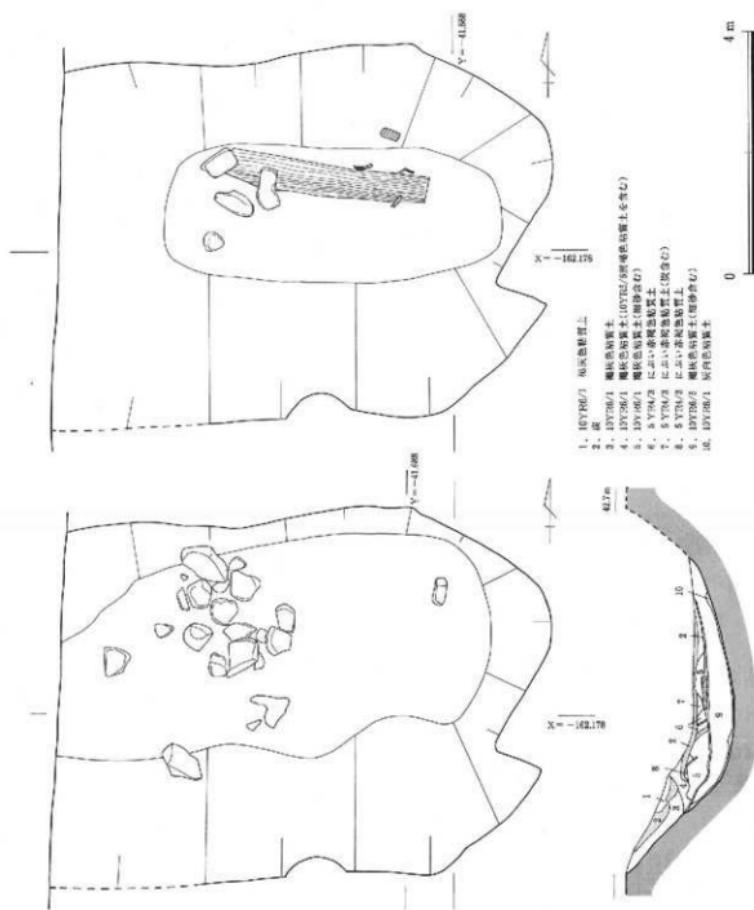
第52図 97-B区铸造土坑436の覆屋構造



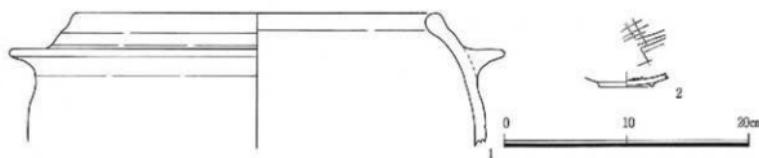
第53図 97-B区铸造土坑438平面・断面図



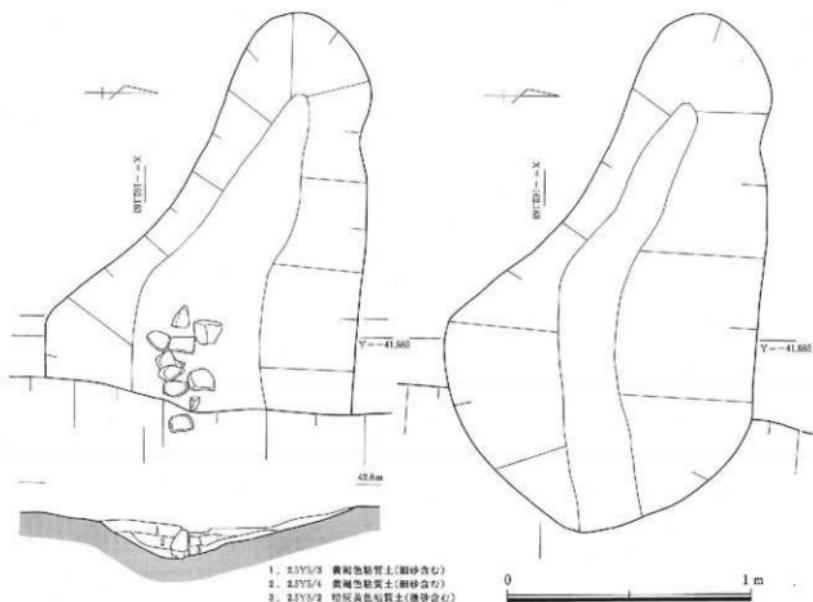
第54図 97-B区鋳造土坑群遺構図



第55図 97-B区鋳造土坑701平面・断面図



第56図 97-B区鋳造土坑701出土遺物

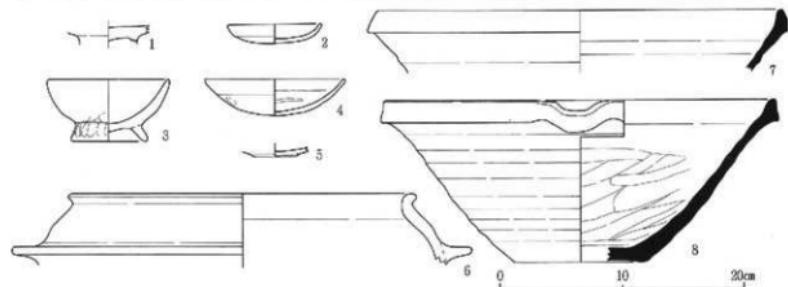


第57図 97-B区铸造土坑705平面・断面図

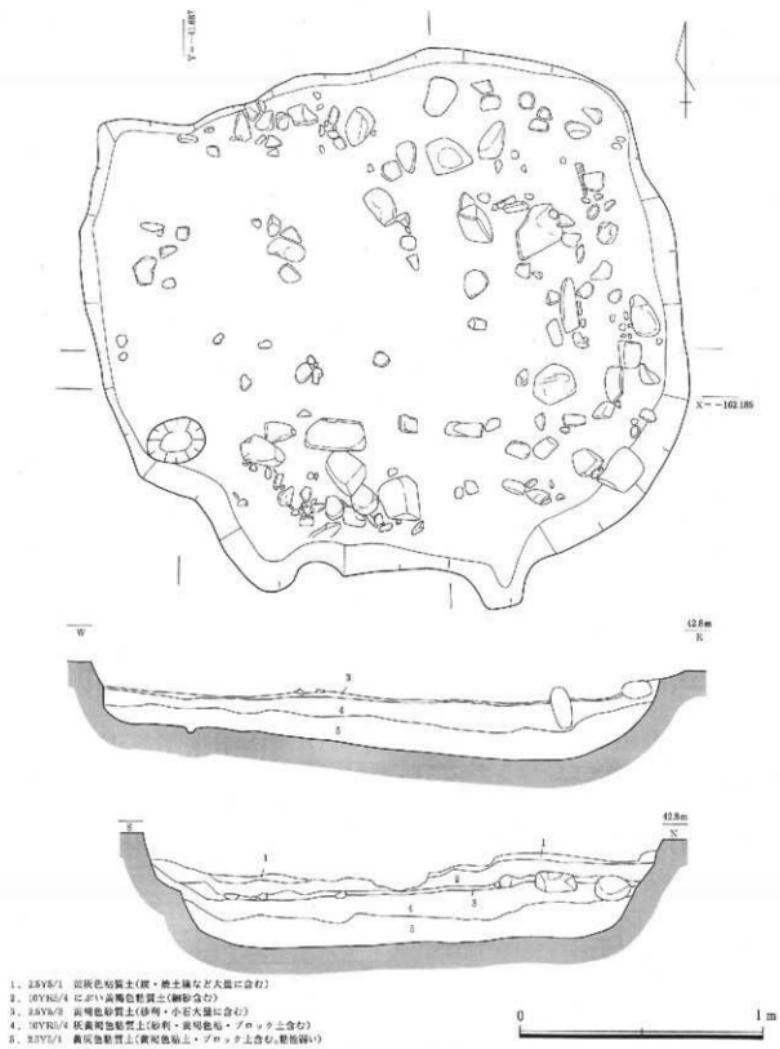
瓦器椀は2点とも底部の小片であるが、高台が断面方形のしっかりとしたタイプの3と、わずかに付された断面三角形の2が共伴している。遺物の諸特徴から13世紀代全般にわたる時期幅が想定される。

c.溝 (第63~65図、図版50)

溝442は、B17-h9・10で検出した、L字状に曲がる溝である。土坑441を切っている。また、東西方向の溝440によって分断されているが、A区の溝96と同一の溝であった可能性がある。この溝442は、幅約1.15m、深さ約30cmの規模である(第63図)。出土遺物(第64図)としては、瓦器皿(1)、土師器皿(2・3)、

第58図 鑄造土坑705
出土鉄製品

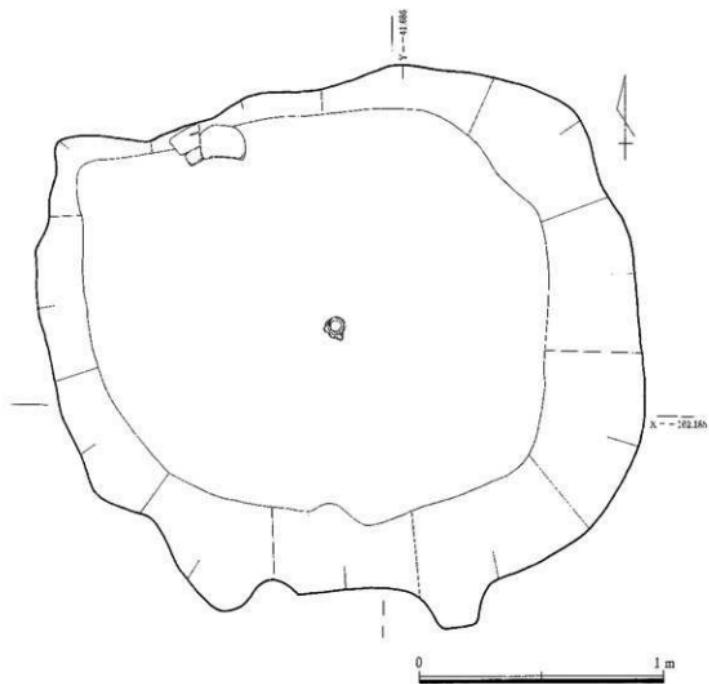
第59図 97-B区铸造土坑705出土遺物



第60図 97-B区铸造土坑707平面・断面図

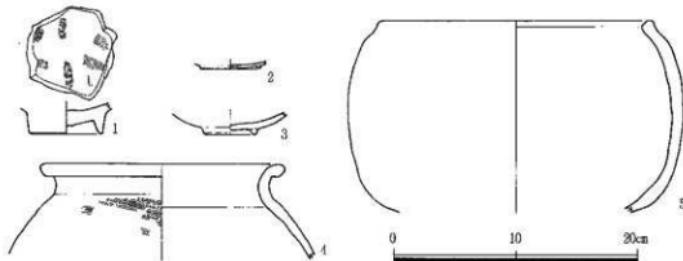
瓦器楕(4)などがある。5は、いわゆる山茶碗であり、片口をもつ。瓦器楕は、見込みに平行暗文を施している。復元口径は約15cm、器高は約4.2cmであり、高台の特徴も含めて13世紀前葉頃に比定できる。

溝806は、B17-i9で検出したが、A区で検出した溝96と同一になった溝である。本来なら、第



第61図 97-B区鋳造土坑707底面遺物出土状況

28図にまとめて報告するべきであるが、鋳造土坑が密集する地区での使用溝部分であり、出土遺物の状況より祭祀的要素をもつようであるため、敢えて区別して報告するものである。出土遺物(第65図)は、瓦器皿4点(1~4)、土師器皿8点(5~12)、土師質羽釜(13)である。瓦器皿、土師器皿はほぼ完形で出土している。これに対し、土師質羽釜は口縁部の小片である。遺構の祭祀的性格を考慮すると、別々の時期に溝内に入った可能性が高い。



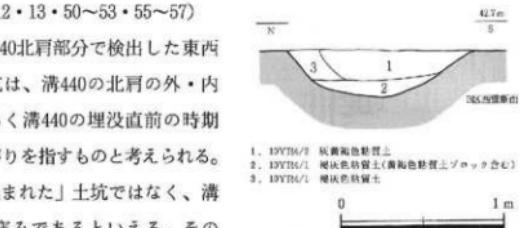
第62図 97-B区鋳造土坑707出土遺物

d. 土坑 (第66~75図、図版12・13・50~53・55~57)

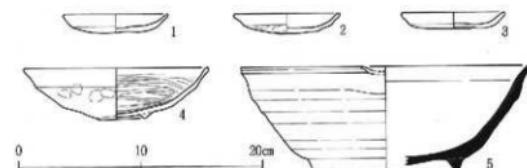
土坑435は、B17-h7の溝440北肩部分で検出した東西に長い土坑である。この土坑は、溝440の北肩の外・内側にまたがっており、おそらく溝440の埋没直前の時期に炭や焼土塊が溜まった広がりを指すものと考えられる。そのため、厳密には「掘り込まれた」土坑ではなく、溝440の自然埋没過程で生じた窪みであるといえる。その広がりは、南北約1.6m、東西約8.5m、深さ約15cmである(第67図)。出土遺物には、土師質羽釜(第74図20)のほか、炉壁片・鋳型片が含まれている。羽釜は、13世紀中葉から後葉頃であろう。前述の鋳造土坑436で生じた鋳造関連遺物などが廃棄されて形成されたものであろう。

土坑441は、B17-h9・10で検出した。掘立柱建物97-B-5に伴う土坑と考えられる。規模は、南北3.2m、東西1.3m以上、深さ約20~25cmである(第68図)。埋土中には、上層から下層まで炭や焼土塊が多量に含まれており、炉壁や鋳型片・焼け石なども若干出土した。廃棄土坑と化した鋳造関連土坑である可能性が高い。

土坑501は、B17-f9・10で検出した。規模は、南北2.5m、東西1.8m、深さ約5cmである(第69図)。北側にややすぼまる長方形の平面プランである。埋土に



第63図 97-B区溝442断面図

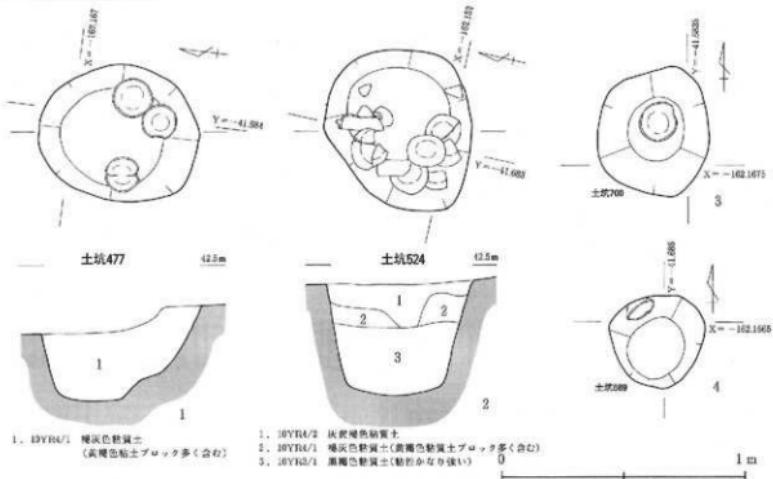


第64図 97-B区溝442出土遺物

は炭・焼土塊を含み、わずかな炉壁片のほか鉄塊系遺物が1点(第229図2)出土した。この鉄塊系遺物は、金属学的分析より、鋳造作業中の低温湯こぼれによって生じたものである可能性が高い(第5章第1節参照)。この土坑で鋳造作業が行われたか否かは、遺構の痕跡から明確でない。他の地点から廃棄された可能性も残るが、掘立柱建物97-B-8に伴うと考えられる土坑であることから、屋外に生じた屑を屋内に廃棄する可能性は低いと思われる所以、実際に土坑501で鋳造作業を行ったのではないかと考えられる。出土遺物は、瓦器碗の底部片がわずかに1点出土しているのみである(第71図2)。高台の特徴から、13世紀前葉から中葉頃であろう。

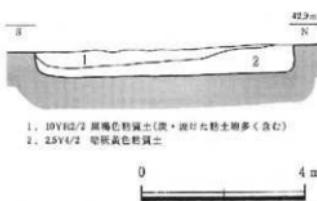


第65図 97-B区溝806出土遺物



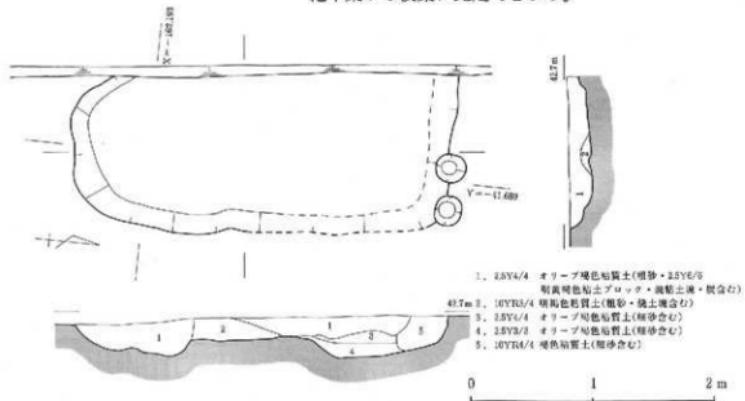
第66図 97-B区土坑477・524平・断面図及び土坑689・700平面図

土坑477は、B17-g9で検出した。径約56~66cm、



第67図 97-B区土坑435断面図

深さ約40cmの、平面プランが椭円形の土坑である(第66図1)。底面から、瓦器碗が3個体ほぼ完形で出土した。1個体は摩滅が著しいため、2個体を掲載した(第74図1・2)。ともに、口径14cm弱、器高3.7cm程度であり、器高の低さに比べ口径はあまり縮小化していない。高台の形態やミガキの粗雑さなども含め、13世紀中葉から後葉に比定できよう。

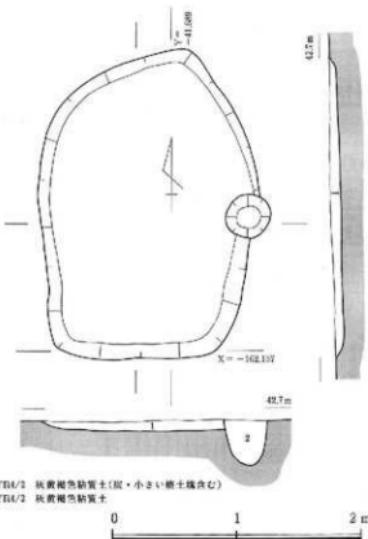


第68図 97-B区土坑441平面・断面図

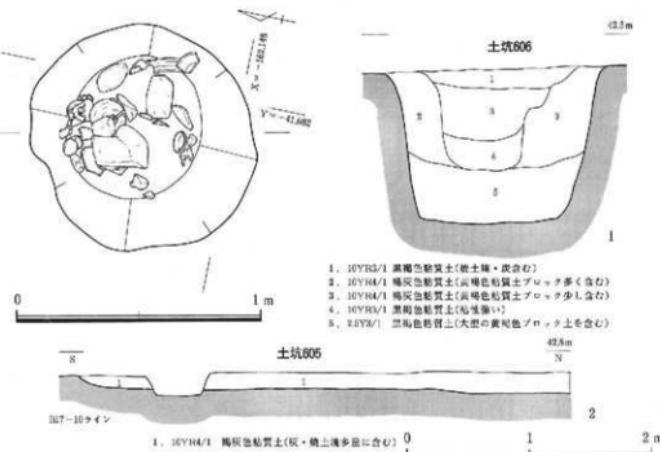
土坑524は、B17-f9で検出した。径約60～65cm、深さ約45cmの、平面プランが不整円形の土坑である(第66図2)。底面から、瓦器碗10点、瓦器皿1点、土師質羽釜1点が出土した(第72図)。瓦器碗の中には完形でないものもあり、羽釜も鋸部から口縁部にかけての破片のみであった。瓦器碗は、口径15cm強、器高約4.5～5.0cmの範囲にまとまっている。平行の暗文をもつ例が多い。13世紀前葉頃であろう。

土坑689は、B17-g9で検出した。径約40cm、深さ約10cmの、平面プランがやや楕円形の土坑である(第66図4)。底面より浮いた位置から、瓦器碗が1点(第74図10)出土した。この瓦器碗は、口径15.8cm、器高6.1cmである。体部の丸みが強く、口径・器高とも大きい。高台は断面方形で、ハの字状に踏ん張る。今回の調査では、最も古い段階の瓦器碗であり、12世紀中葉頃であろう。

土坑700は、B17-g9で検出した。径約46～54cm、深さ約17cmの、平面プランがほぼ円形の土坑である(第66図3)。底面から、瓦器碗が2個体重なった状態で出土した(第74図6・7)。6は、



第69図 97-B区土坑501平面・断面図

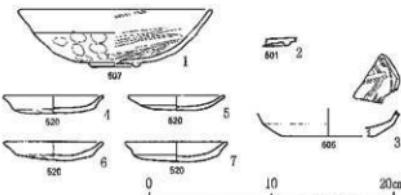


第70図 97-B区土坑605断面図及び土坑606平面・断面図

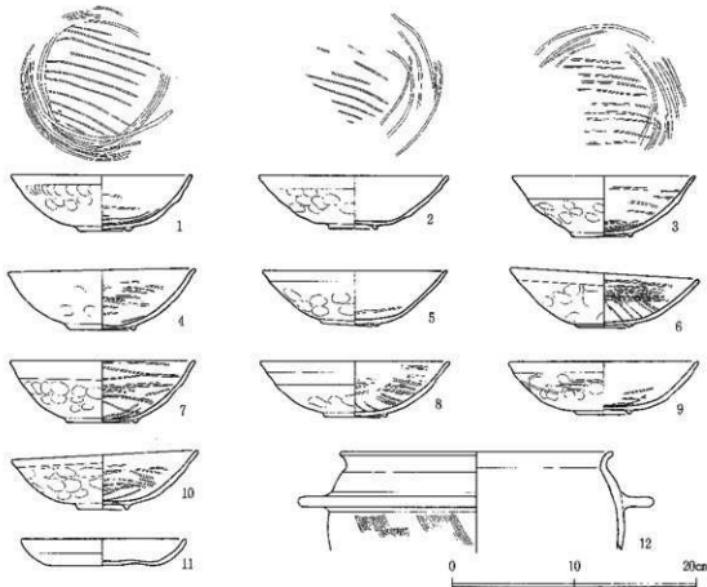
口径13.7cm、器高3.6cmで、高台がわずかに付されたタイプであり、7は口径14.9cm、器高4.9cmで、断面三角形の高台をもつ。この2者には1型式以上の時期差が認められる。13世紀中葉から後葉頃に比定できる。

上記の土坑477・524・689・700は、遺物の出土状況から地鎮土坑の様相をもつ。しかし、土坑477は、掘立柱建物97-B-6を構成する柱穴としても考え得るものである。土坑477・土坑524・689は、瓦器楕などの出土位置が中央ではなく、偏っている。柱芯が真ん中にくる場合に、それを避けて何らかの意味を込めて柱穴におさめられた可能性がある。

土坑605は、B17-c9・10で検出した。北側および西側が調査区外にのびており、東西に約8m以上、南北に4m以上の広がりをもつ(第70図2)。切り合い関係より、掘立柱建物97-B-8の廃絶後に形成された土坑である。厳密には人為的な土坑ではなく、掘立柱建物97-B-8の廃絶後に生じた窪みに遺物などが廃棄されてできた遺構である。出土遺物は少なく、わずかに青磁皿(第71図3)などがあるのみである。ただし、埋土には炭や焼土塊・焼け石が多量に含まれおり、また炉壁片や鋳型片・繩の羽口片なども、他の造構と比較して最も多く出土した。



第71図 97-B区土坑501・520・605・607出土遺物

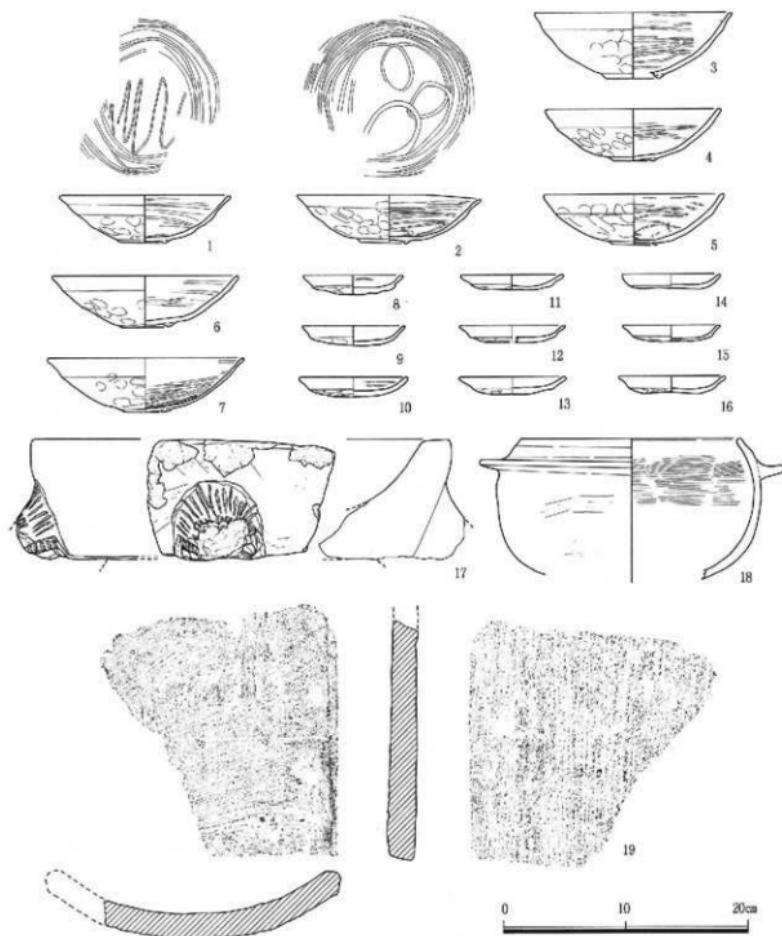


第72図 97-B区土坑524出土遺物

土坑606は、B17-c9で検出した。規模は、径約1.9m、深さ約1.25mの、平面プランがほぼ円形の土坑である(第70図1)。埋上中から、瓦器椀(1~7)、瓦器皿(8~13)、土師器皿(14~16)、瓦質羽釜(18)のほか、火鉢(17)や平瓦(19)なども出土した(第73図)。瓦器椀は、すべて口径14cm以上で、器高は4cmを越える。これらの特徴などから、13世紀中葉頃だと考えられる。

そのほか、遺物掲載の土坑について述べる。なお、以下に述べる出土遺物とくに瓦器の年代については、ほぼ13世紀の中葉前後のものが多い。

土坑520は、B17-f9の、掘立柱建物97-B-9の南東付近で検出された。長径1.1m、短径0.95



第73図 97-B区土坑606出土遺物

m、深さ約40cmの、不定形土坑である。光形の瓦器皿4点がまとまって出土した(第71図4～7)。

土坑607は、B17-e9の、土坑606の南0.6mの地点で検出された。南北長約70cm、東西幅約50cm、深さ約15cmで、平面が梢円形の土坑である。復元口径約15.4cm、器高4.7cmの瓦器碗が1点出土した(第71図1)。また、埋上から炉壁片が若干量出土した。

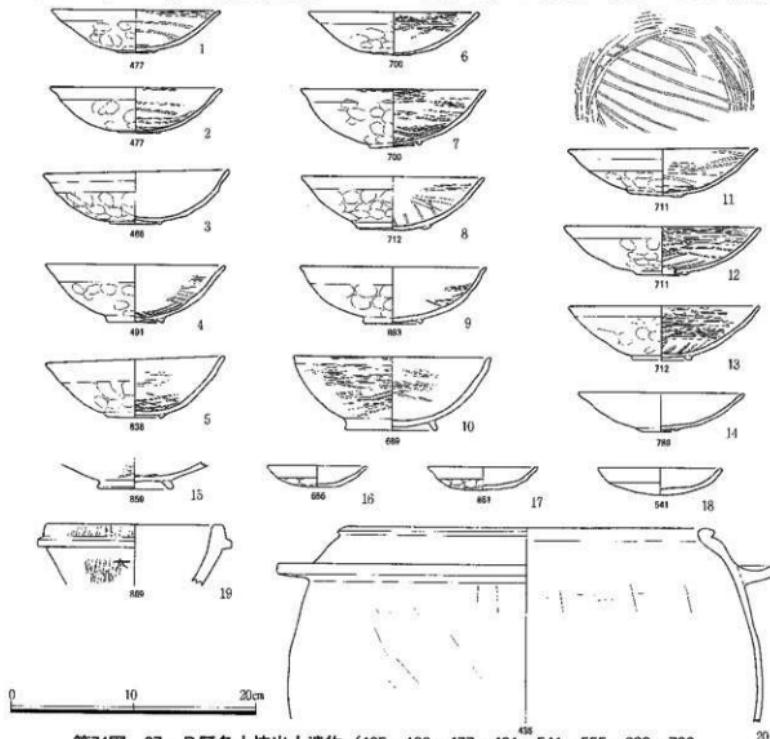
土坑491は、B17-g9で検出された。長さ約1.3m、幅約0.45m、深さ最大で約30cmを測る。瓦器碗が1点出土している(第74図4)。

土坑541は、B17-h8の、井戸437の北側に広がる不定形な土坑である。瓦器皿が1点山上している(第74図17)。

土坑555は、B17-h8の、鉄造土坑438の北側に広がる不定形な土坑である。瓦器皿が1点出土している(第74図16)。

土坑711は、B17-h9の、掘立柱建物97-B-6の南側に広がる不定形な土坑である。瓦器碗が2点出土している(第74図11・12)。ともに、口径15cm強、器高4cm前後である。

土坑712は、B17-g9の、掘立柱建物97-B-6の西側に広がる不定形な土坑である。土坑内



第74図 97-B区各土坑出土遺物 (435・466・477・491・541・555・689・700
711・712・789・836・851・859・860・893)

から、瓦器碗が1点出土している(第74図13)。

土坑789は、B17-i8で検出された。長さ約2.4m、幅約0.4m、深さ最大で約15cmを測る、細長い形状の上坑である。瓦器碗が1点出土している(第74図14)。

土坑836は、B17-h7で検出された。平面が円形で、径約20cm、深さ約10cmを測る。鋳造土坑436の覆屋を構成する柱穴になる可能性もある。瓦器碗が1点出土している(第74図5)。

土坑851は、B17-h9の、鋳造土坑438の南西側に広がる不定形な上坑である。上坑内から、瓦器皿が1点出土している(第74図18)。

土坑859は、B17-h9の、鋳造土坑701の南に広がる、不定形の浅い上坑である。出土した瓦器碗(第74図15)は、土坑689出土資料と同様最も古い段階の12世紀中葉頃に遡る可能性が高い。

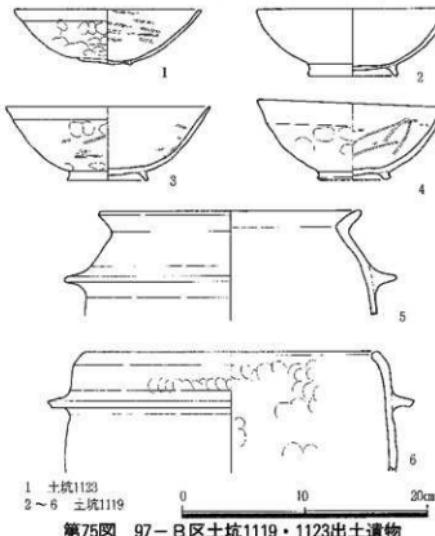
土坑869は、B17-g9で検出された。平面は円形で、径約30cm、深さ約10cmを測る。滑石製の石鍋が出土している(第74図19)。

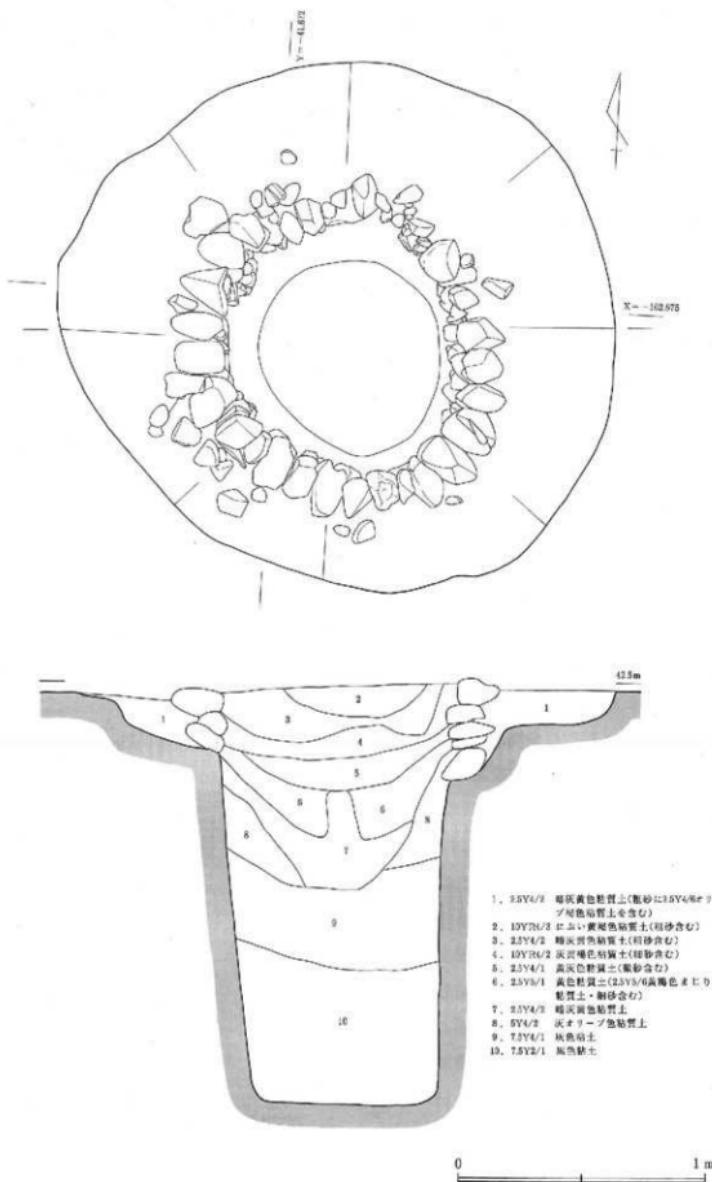
土坑893は、B17-i7・8で検出された。溝892(C区溝1126と同一)が埋没した後、形成された上坑である。平面形は不整円形で、径約2.0m、深さ約50cmを測る。片口であった可能性も残る。瓦器碗(第74図9)などが出土している。

e. 井戸 (第76~81図、図版13・53・54)

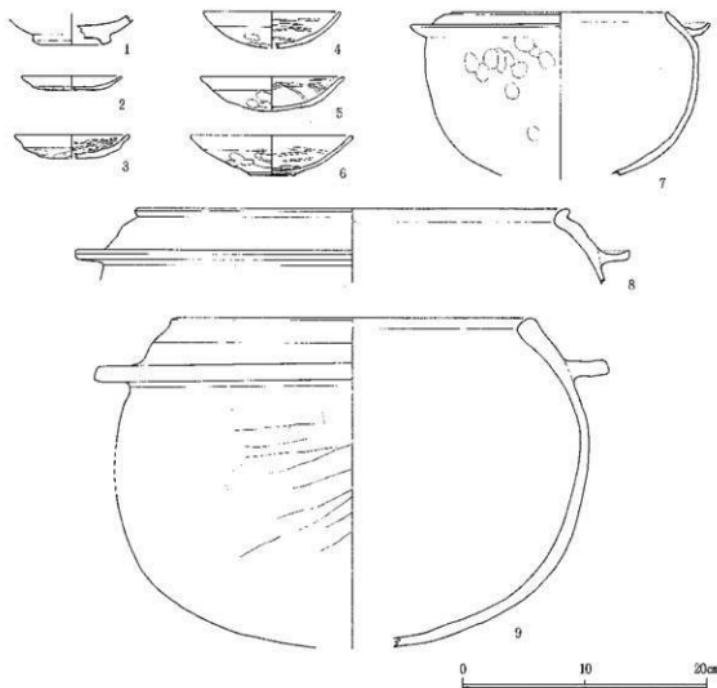
井戸437は、B17-h8で検出した、素掘りと石組みを併用した井戸である。掘方は、2段掘りで、掘方2段目の最大径約2.2~2.3m、掘方1段目と石組み内法がほぼ同一径で径約0.9~1.0m、深さ約1.7mである(第76図)。下層約90cmは滞水層が認められた。掘立柱建物97-B-7に伴う可能性がある。出土遺物(第77図)には、青磁碗(1)、瓦器皿(2・3)、瓦器碗(4~6)、瓦質羽釜(7)、土師質羽釜(8・9)などがある。また炉壁片が多量に、鋳型片や焼け石もわずかに出土している。13世紀後葉から14世紀初頭頃に比定できる。

井戸500は、B17-f8・9およびg8・9にまたがって位置する。径約2.4m、深さ約1.2mの円形素掘り井戸である(第79図1)。下層約45cmは、滞水層が認められた。位置的には、掘立柱建物97-B-6~9に伴う可能性がある。青磁碗(1)や瓦器碗(2・3)、瓦質羽釜(4・5)および一足羽釜(8)、土師質羽釜(6)、瓦質甕(7)などが出土している(第81図)。これらの様相から、13世紀後葉頃であると考えられる。また、





第76図 97-B区井戸437平面・断面図



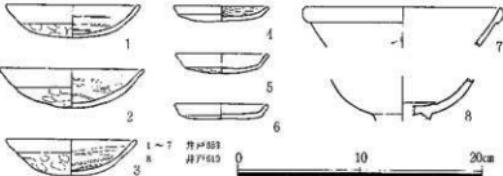
第77図 97-B区井戸437出土遺物

炉壁片が多量に、鋳型片や焼け石もわずかに出土している。

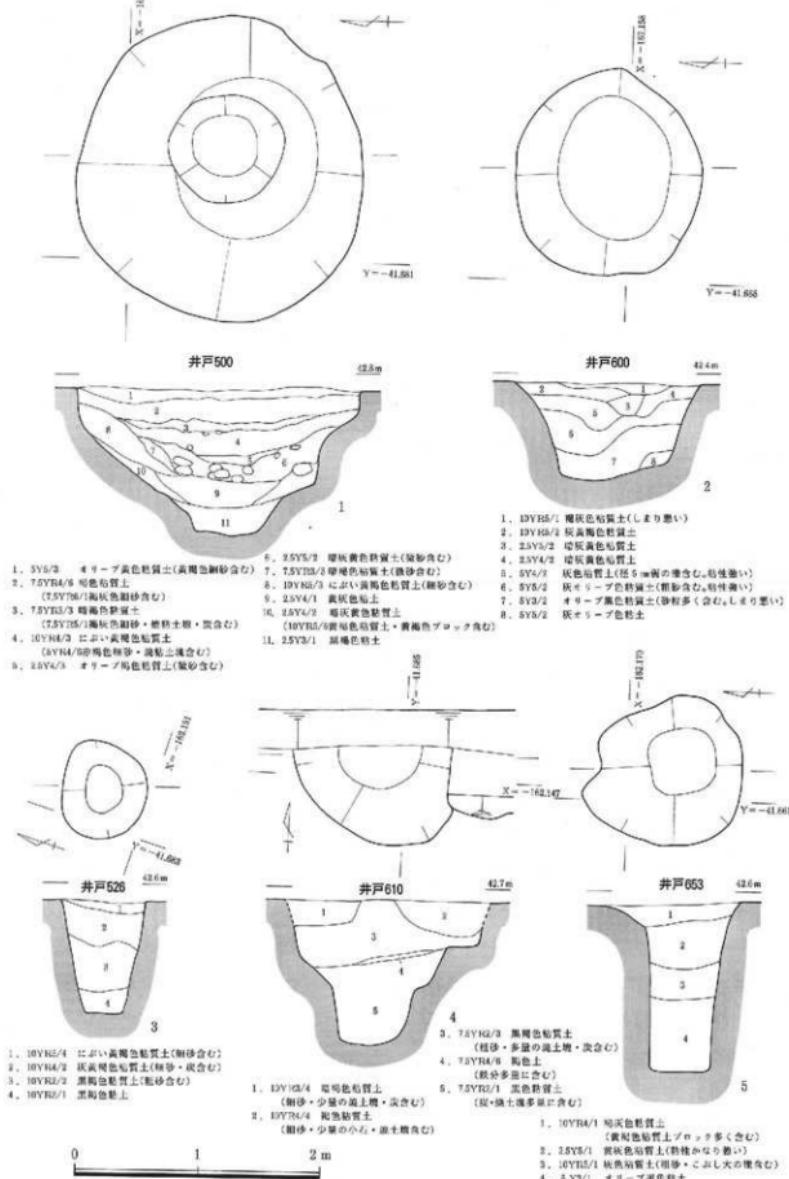
井戸526は、B17-f9に位置する。径約70~80cm、深さ約90cmの、ほぼ円形の素掘り井戸である(第79図3)。埋土に、炉壁片や焼け石が若干含まれていた。

井戸600は、B17-f7に位置する。径約1.55~1.7m、深さ約80cmの、平面プランが円形の素掘り井戸である(第79図2)。鋳造に関わる遺物は、まったく山上していない。位置的に、鋳造工房群から遠く離れているためと思われる。

井戸610は、B17-e9、調査区北辺で、わずかに遺構の南肩が検出された。この井戸は、98年度調査のA区井戸177と同一である。径約1.7m、深さ約1.2mである。平面プランがほぼ円形の、素掘り井戸である(第79図4)。遺物は青磁皿が山上したのみである(第78図8)。炉壁片や焼け石が出土しており、掘立柱建物97-B-8・9や98-A-7に伴う可能性がある。



第78図 97-B区井戸610・653出土遺物

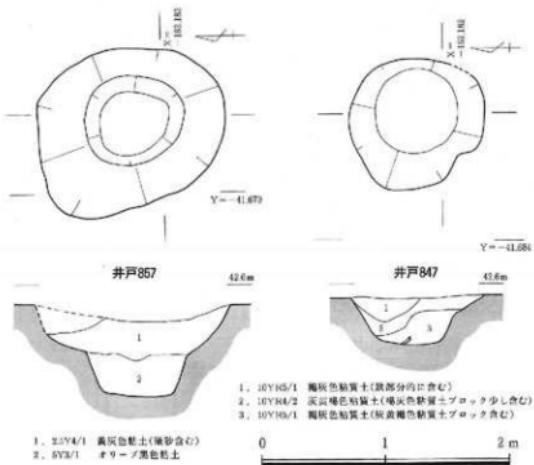


第79図 97-B区井戸 500・526・600・610・653平面・断面図

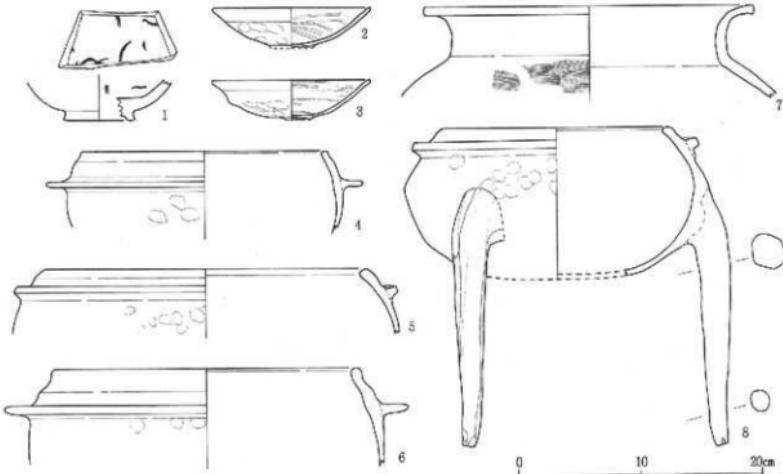
井戸653は、B17-g・h7で検出した。規模は、上部径約1.2m、下部径約0.5m、深さ約1.4mの、平面プランが円形の素掘り井戸である(第79図5)。位置的に、土坑436を伴う小屋での作業で用いられた可能性がある。瓦器椀(1～3)、瓦器皿(4)、土師器皿(5・6)、白磁椀(7)などが出土している(第78図)。また、炉壁片もわずかに出土している。瓦器椀は、すべて高台が消失してしまった形態で、13世紀末から14世紀初頭にかけての時期に比定できる。

井戸847は、B17-i9で検出した。規模は、径約1.1m、深さ約40cmである(第80図1)。検出深度は浅く、滲水層は認められないが、規模的に井戸であると捉えている。

井戸857は、B17-j8で検出した。規模は、径約1.3～1.6m、深さ約70cmである(第80図2)。平面プランが不整円形の素掘り井戸である。下層約30cmはオリーブ黒色粘土が堆積している。



第80図 97-B区井戸847・857平面・断面図



第81図 97-B区井戸500出土遺物

3. 97-C区

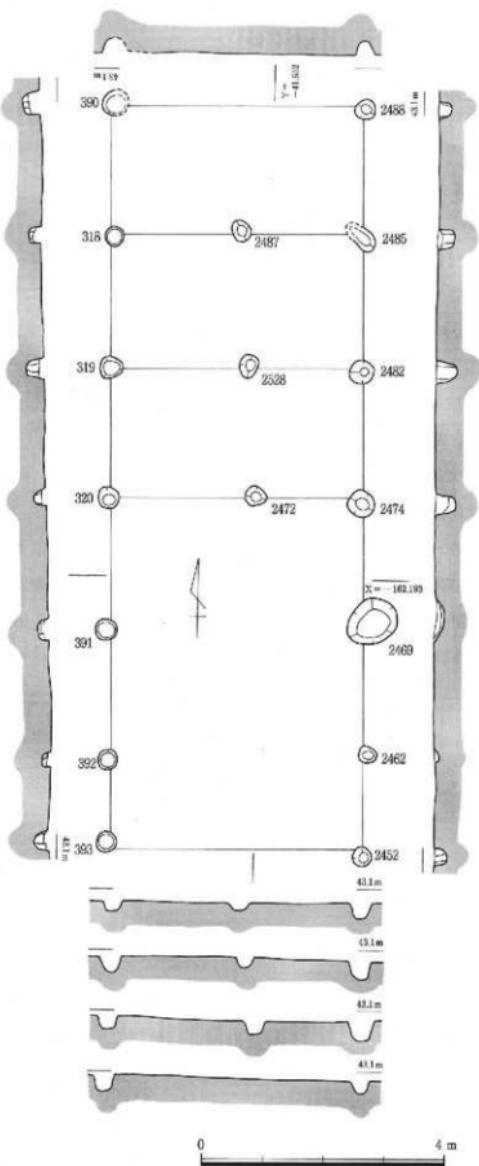
(第83図、図版14・15)

a. 据立柱建物・柵列・ピット
(第82・84~95図、図版58~60)

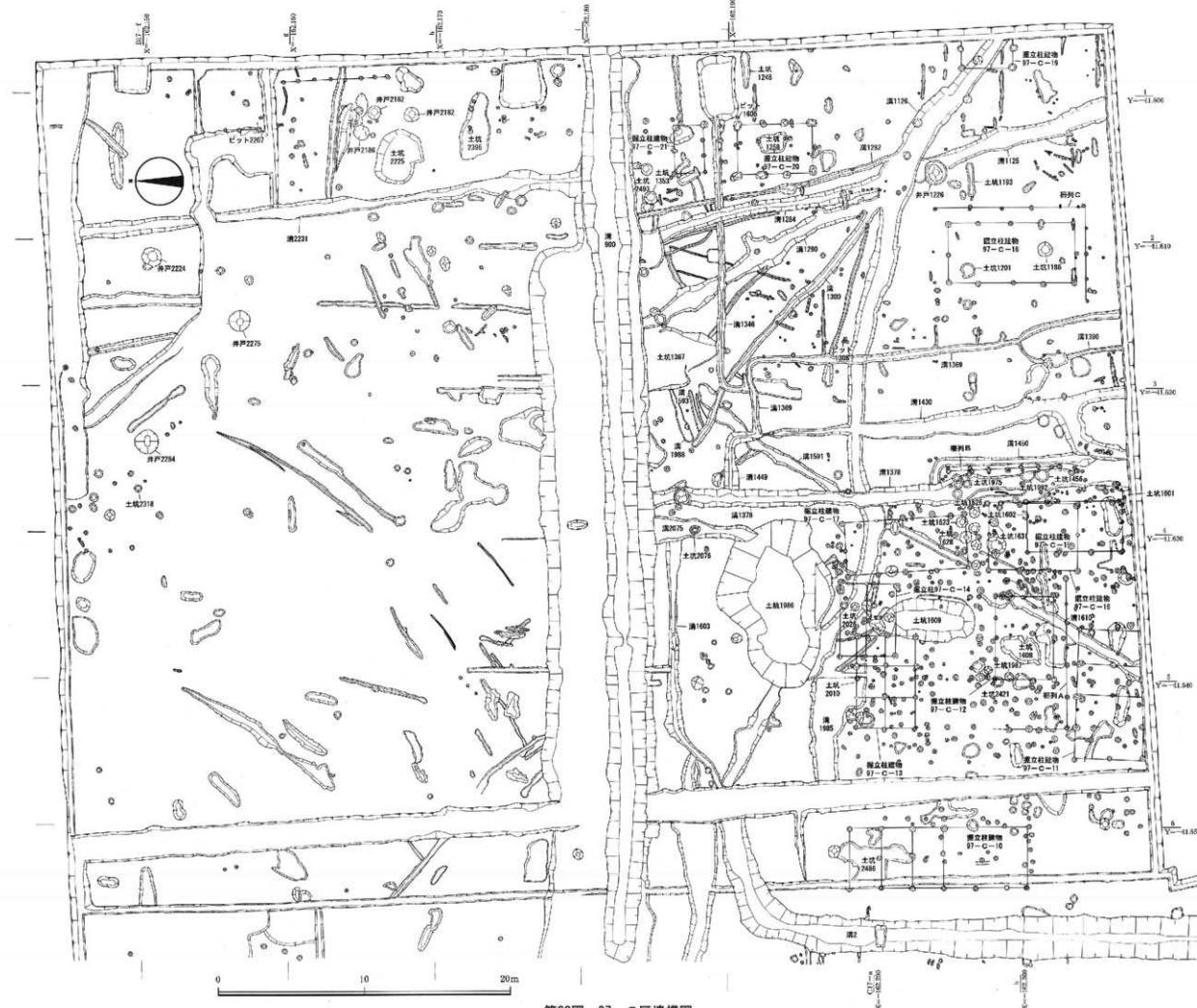
据立柱建物97-C-10は、基本的には桁行5間・梁行2間の南北棟の建物である(第82図)。南側に庇をもち、全体では桁行6間となる。桁行は12.2m、梁行は4.1mで、柱間は桁行2.1m、梁行1.9~2.1mである。庇の出は1.3~1.5mである。柱掘方は円形で、径が0.3~0.45m、深さが0.2~0.35mである。ピット2474から、瓦器碗が1点(第92図8)出土しており、13世紀後葉頃に比定できる。

据立柱建物97-C-11は、桁行4間・梁行2間の東西棟の建物である(第84図)。桁行は8.9m、梁行は4.6mで、柱間は桁行2.2m、梁行2.3m間隔である。柱掘方はほぼ円形で、径が0.25~0.4m、深さが0.2~0.6mである。

据立柱建物97-C-12は、桁行4間・梁行2間の東西棟の建物と考えられる(第85図)。西半部に大きな土坑1608をもつと考えられる。桁行は5.7m、梁行は4.0mで、柱間は桁行1.4~1.5m、梁行1.8~2.2mである。柱掘方は円形で、径が0.25~0.4m、深さが0.1~0.4mである。ピット1690から、瓦器皿が1点出土(第92図14)している。13世紀代であろう。



第82図 据立柱建物97-C-10平面・断面図



第83図 97-C区遺構図

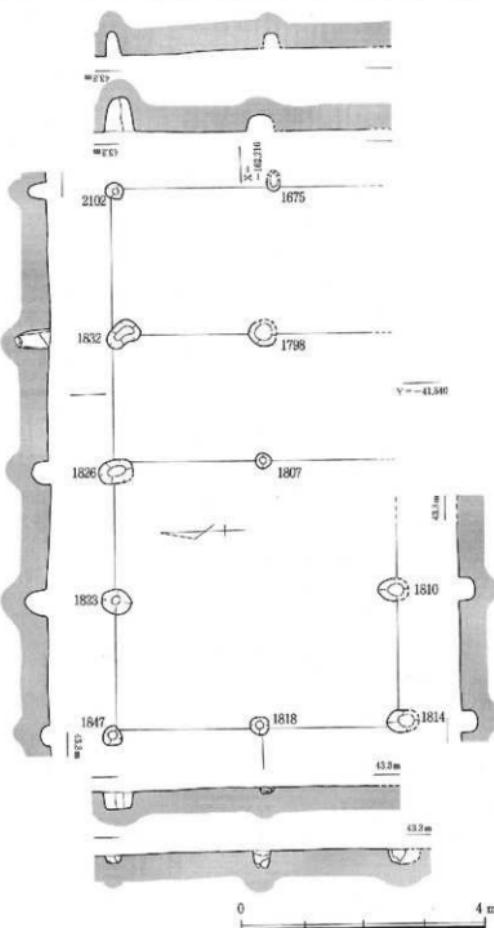
掘立柱建物97-C-13は、桁行2間・梁行2間の東西棟の建物である(第86図)。桁行は6.3m、梁行は4.0mで、柱間は桁行2.1m、梁行2.0m間隔である。柱掘方はほぼ円形で、径が0.25~0.35m、深さが0.2~0.4mである。

掘立柱建物97-C-14は、柱穴を部分的にしか確認できていないが、桁行2間・梁行2間の東西棟の総柱建物と考えられる(第87図)。桁行は5.1m、梁行は3.9mで、柱間は桁行2.5~2.6m、梁行1.9~2.0mである。柱掘方は円形で、径が0.2~0.4m、深さが0.25~0.4mである。

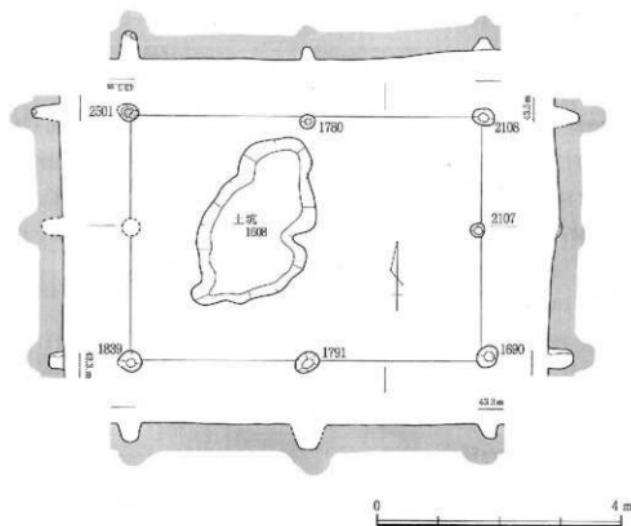
掘立柱建物97-C-15は、桁行3間・梁行1間の南北棟の建物である(第89図)。桁行は6.6m、梁行は3.5mで、柱間は桁行2.2m、梁行3.5m間隔である。柱掘方は円形で、径が0.3~0.4m、深さが0.2~0.3mである。ピット1657から青磁碗の高台片(第92図5)が、ピット1983から鍋運弁の青磁碗(第92図2)が出土している。13世紀代であろう。

掘立柱建物97-C-16は、桁行3間・梁行2間の南北棟の建物である(第88図)。桁行は6.1m、梁行は4.6mで、柱間は桁行2.0~2.1m、梁行2.1~2.5mである。柱掘方は円形で径が0.25~0.4m、深さが0.1~0.3mである。ピット1653から瓦器碗が1点(第92図10)出土している。13世紀前葉から中葉頃に比定できるであろう。

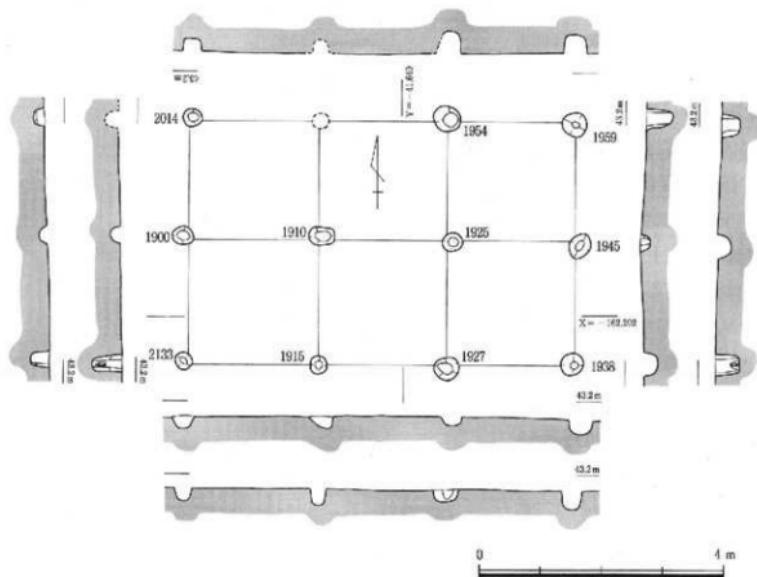
掘立柱建物97-C-17は、桁行4間・梁行2間の南北棟の建物である(第90図)。桁行は8.3m、梁行は3.7mで、柱間は桁行1.9~2.1m、梁行1.8~1.9m間隔である。柱掘方はほぼ円形で、径が0.25~0.4m、深さが0.2~0.3mである。



第84図 掘立柱建物97-C-11平面・断面図



第85図 振立柱建物97-C-12平面・断面図



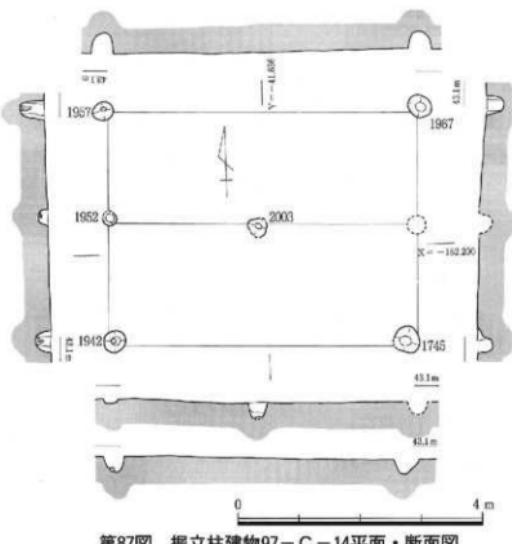
第86図 振立柱建物97-C-13平面・断面図

掘立柱建物97-C-18は、桁行4間・梁行2間の南北棟の建物である(第91図)。東側と南側を取り囲む塀があったと考えられる。桁行は8.7m、梁行は4.2mで、柱間は桁行2.0~2.2m、梁行2.1m間隔である。柱掘方はほぼ円形で径が0.3m、深さが0.2~0.3mである。塀までの距離は、東側で1.1m、南側で0.75mである。

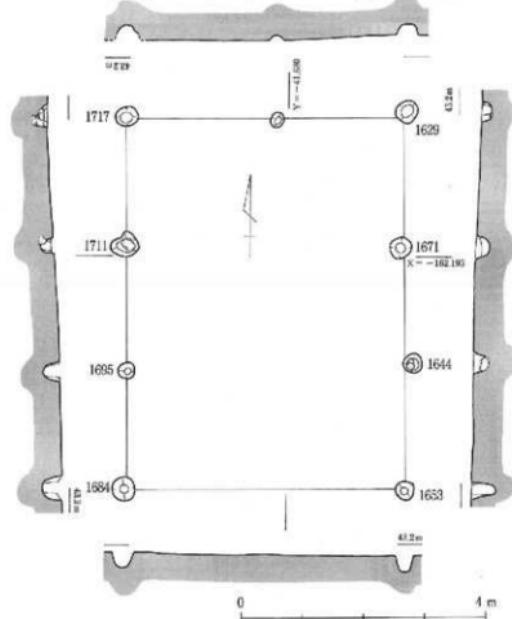
掘立柱建物97-C-19は、桁行2間以上・梁行1間の東西棟の建物と考えられる(第93図)。桁行は2.0m以上、梁行は3.5mで、柱間は桁行1.3~1.4m、梁行3.5mである。柱掘方は他と比べてやや大きめの円形で、径0.4~0.5m、深さ0.2~0.25mである。

掘立柱建物97-C-20は、桁行3間・梁行2間の東西棟の建物である(第95図)。中央や東寄りに土坑1258をもつ。桁行は5.2m、梁行は3.5mで、柱間は桁行1.8m、梁行1.7~1.8m間隔である。柱掘方は不整円形で大きく、径0.4~0.7m、深さ0.3~0.5mである。

掘立柱建物97-C-21は、桁行北側2間・南側3間・梁行1間の棟の建物である(第94図)。桁行は3.3m、梁行は2.0mで、柱間は桁行北側1.5・



第87図 掘立柱建物97-C-14平面・断面図

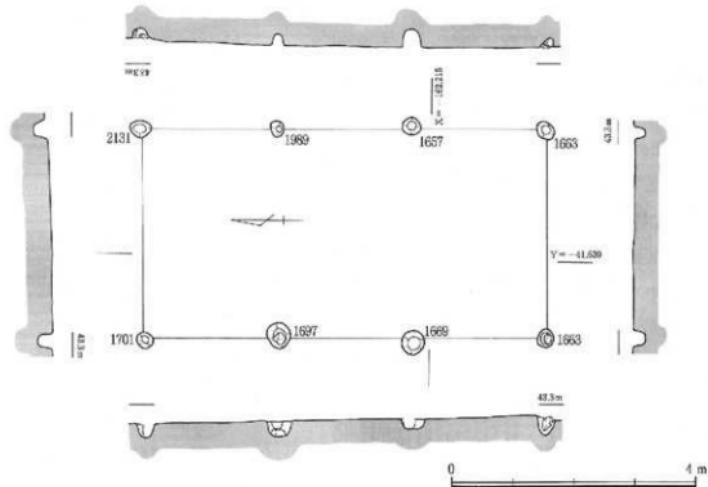


第88図 掘立柱建物97-C-16平面・断面図

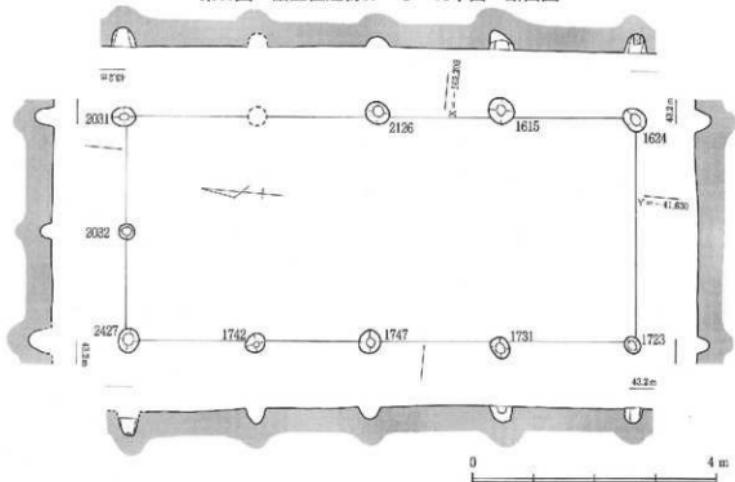
1.8m、南側1.1~1.2m、梁行2.0mである。柱掘方は不整円形で、径が0.25~0.5m、深さが0.15~0.4mである。

柵列Aは、L字型になるもので、掘立柱建物97-C-11と97-C-12を南北に画している。また、掘立柱建物97-C-12と掘立柱建物97-C-10を東西に画する。

柵列Bは、溝1378と溝1450の間に設置された南北方向の柵である。この柵列が設置されている



第89図 挖立柱建物97-C-15平面・断面図

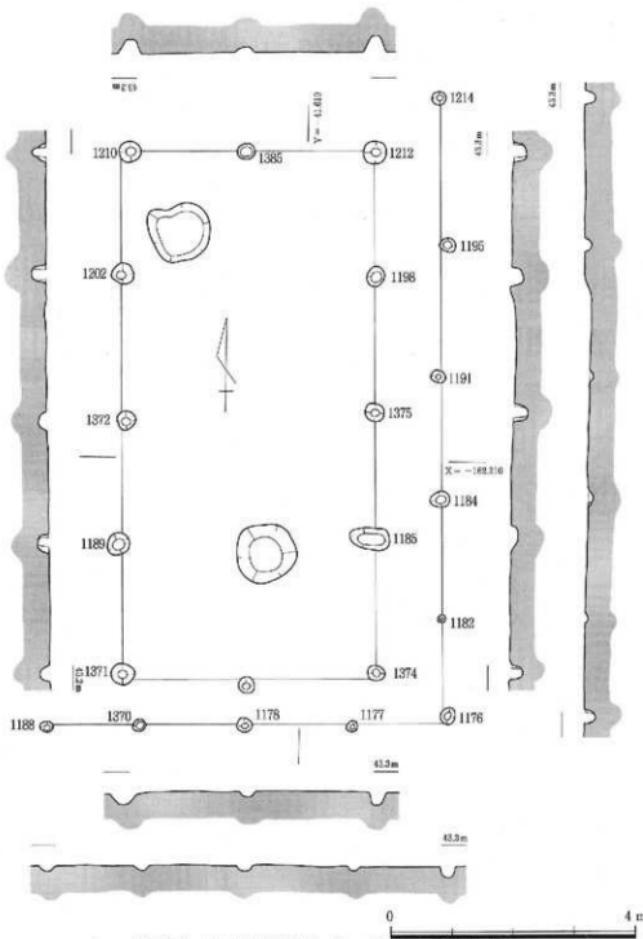


第90図 挖立柱建物97-C-17平面・断面図

場所はごく狭い空間で、柵列のためだけの用地である。おそらく、屋敷地内を東西に大きく分断する溝1378に付属して設置された柵列であろう。

柵列Cは、掘立柱建物97-C-18の東・南を画している。この柵列は、庇の可能性も考えられたが、柱筋が建物の桁梁と不整合であるため、柵列と捉えている。

そのほか、C区の北半東端、B16-g10で一列に並ぶピット群が認められた。径約20~30cm、深さ約20cmのピットが0.9~1.1m間隔で南北方向に8基確認できる。間隔が短いため、建物を構成する柱穴ではなく、柵列と考えられる。主体となる廃物遺構などは、調査区より東側に広がる



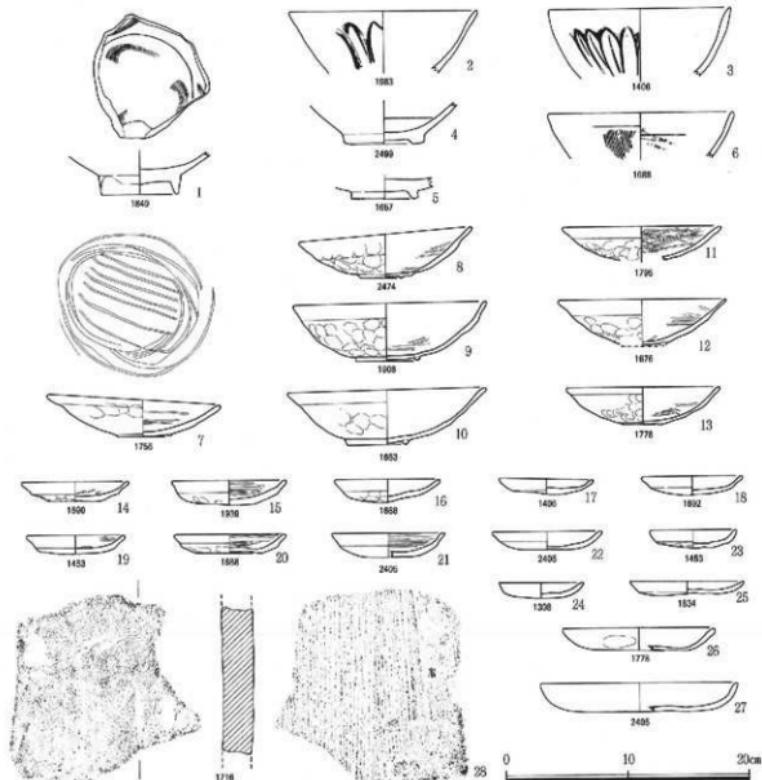
第91図 挖立柱建物97-C-18平面・断面図

と思われる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。すぐ西側に古墳時代の土坑なども存在することから、この柵列が古墳時代に属する可能性も残るが、後述の、この柵列に平行する柵列が、13世紀前葉頃を一定点とすることができますため、同じく中世段階の遺構である可能性が高い。

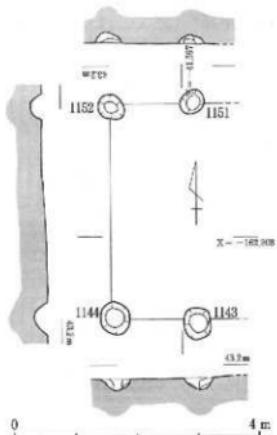
この柵列から西に約3.3m離れ、北側に延長した位置では、ピットが3基南北方向に一列に並ぶ遺構が認められた。これらのピットの間隔は1.0~1.3mと短く、上記のピット群と同様、柵列の可能性がある。この場合、上記の柵列と平行する。このピット群の内、一番南側のピット2207からは、瓦器碗・瓦器皿(第128図1・8)が出土している。とくに、3の形態・調整などから、13世紀前葉頃と考えられる。なお、このピット2207は径約35~40cm、深さ約25cmを測る。

なお、そのほかのピットについて、遺物を掲載している遺構の概要を述べる(第92図)。

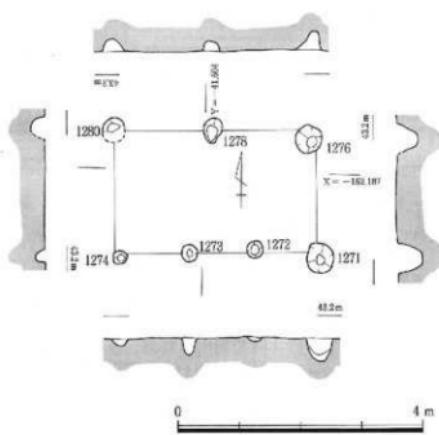
ピット1308は、C17-j2で検出された、径約20~25cm、深さ約10cmの、平面円形のピットである。土師皿が1点(第92図24)出土している。



第92図 97-C区各ピット出土遺物(1308・1406・1453・1653・1657・1657・1676・1688・1690・1692
1716・1756・1778・1795・1834・1849・1906・1939・1983・2405・2474・2499)



第93図 挖立柱建物97-C-19平面・断面図



第94図 挖立柱建物97-C-21平面・断面図

ピット1406は、C17-b3で検出された、径約30~50cm、深さ約30cmの、平面楕円形のピットである。鎧蓮弁文をもつ青磁碗(3)や瓦器皿(17)が出土している。

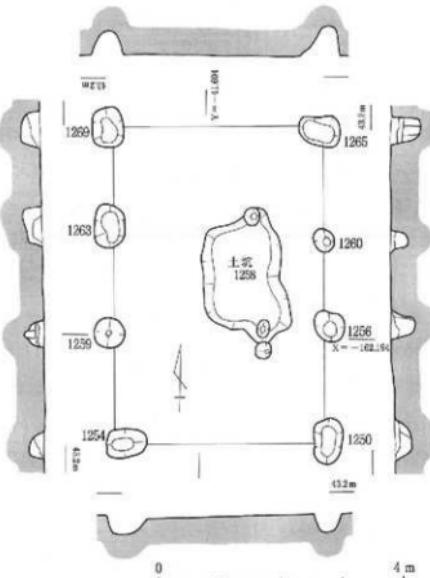
ピット1453は、C17-b3で検出された、径約30~45cm、深さ約15cmの、平面楕円形のピットである。瓦器皿(19)と土師器皿(23)が出土している。

ピット1676は、C17-b4で検出された、径約30~35cm、深さ約25cmの、平面隅丸方形のピットである。瓦器皿(12)が1点出土している。

ピット1688は、C17-b4で検出された、径約15cm、深さ約10cmの、平面円形のピットである。青磁碗(6)と瓦器皿(20)が出土している。6は、外面に櫛目を縦に施している。内面にも、櫛状工具による施文が認められる。

ピット1692は、C17-b4で検出された、径約25~35cm、深さ約25cmの、平面楕円形のピットである。土師器皿(18)が1点出土している。

ピット1716は、C17-a4で検出され



第95図 挖立柱建物97-C-20平面・断面図

た、径約30~50cm、深さ約25cmの、平面楕円形のピットである。平瓦片(28)が出土している。

ピット1756は、C17-a4で検出された、径約20cm、深さ約20cmの、平面円形のピットである。瓦器椀(7)が出土している。

ピット1778は、C17-a4で検出された、径約40cm、深さ約15cmの、平面円形のピットである。瓦器椀(13)と土師器皿(26)が出土している。26は、口径12.3cm、器高1.85cmである。

ピット1795は、C17-b4で検出された、径約35cm、深さ25cmの、平面円形のピットである。瓦器椀(11)が1点出土している。

ピット1834は、C17-b4で検出された、径約30~35cm、深さ約25cmの、平面円形のピットである。土師器皿(25)が1点出土している。

ピット1849は、C17-b5で検出された、径約40cm、深さ約30cmの、平面円形のピットである。掘方内から、青磁碗(1)が1点出土している。1は、内面および見込みに櫛状工具による施文が認められる。

ピット1906は、C17-a5で検出された、径約30cm、深さ約25cmの、平面円形のピットである。瓦器椀(9)が出土している。

ピット1939は、C17-a4で検出された、径約20~25cmで、平面円形のピットである。瓦器皿(15)が1点出土している。

ピット2499は、C17-b3で検出された、径約25cm、深さ約15cmの、平面円形のピットである。白磁碗(4)が出土している。4は、口縁を欠くが、本来下縁状の口縁を有するものである。残存部の外縁は、すべて露胎である。高台の削り出しが浅い。

b. 溝 (第96~114図、図版4・16・17・19~21・60~70・104)

まず、南北約50m・東西約70m以上の区画溝と位置づける溝について、詳述する。そのため、調査区としてはA区に属する溝2については、機能的にこの区画溝に当たるため、ここで述べる。なお、区画溝となるのは、このほかに溝900である。

溝2は、B17-i6からC17-d6にかけて、南北約50mの範囲で検出した(第21図参照)。規模は、幅約2.1~2.8m、深さ約40~55cmである。削平度から考えると、本來の規模はさらに大きくなる。断面観察から、何度か浚渫されながら、廃絶時まで存続したと推測される(第96図)。

溝900は、溝2の北側コーナーから北へ約5m離れた位置を基点に、東側に掘削されている(第83図参照)。規模は、幅約2.6~2.8m、深さ約40~60cmであり、溝2とほぼ同じである(第99図)。

山上遺物を見てみると、溝2からは瓦器椀(1・2)や土師器皿(3~6)、須恵器鉢(9・10)、土師質羽釜(11)、須恵質甕(12)のほか、白磁(7)や青磁(8)も出土している(第97図)。また、瓦類も若干出土している(第98図13~15)。瓦器椀2点は、ともに外面にもミガキが多く残る段階のものであり、12世紀後葉頃に位置づけられる。また、上縁口縁を持つ白磁碗は、体部が緩やかな傾斜から急な傾斜へと移行したもので、12世紀代に出現するものである。これらの特徴から、溝2は遅くとも12世紀後葉には、既に掘削されていたと考えられる。また、形骸化した梵字を中心

もつ15の軒平瓦も12世紀代でおさまる資料である。存続時期の下限は、軒平瓦が珠文をもつ点や、11の土師質羽釜の口縁形態の特徴などから、も13世紀後葉以降に求められる。

溝900からは瓦器碗(1~4)や土師質羽釜(6~10)、瓦質甕(5)が出土(第100図)。また、溝2と同様、瓦類が若干出土している(12~14)。溝900から出土した遺物については、浚渫されて上層の溝440の存続時期までの遺物が混在する可能性が残るが、瓦器碗には器高が低くなるものの、高台が消失したタイプは含まれていない。また、羽釜類の口縁形態や珠文をもつ軒平瓦の特徴などから、溝2と同様、ほぼ13世紀代に存続していたことが分かる。

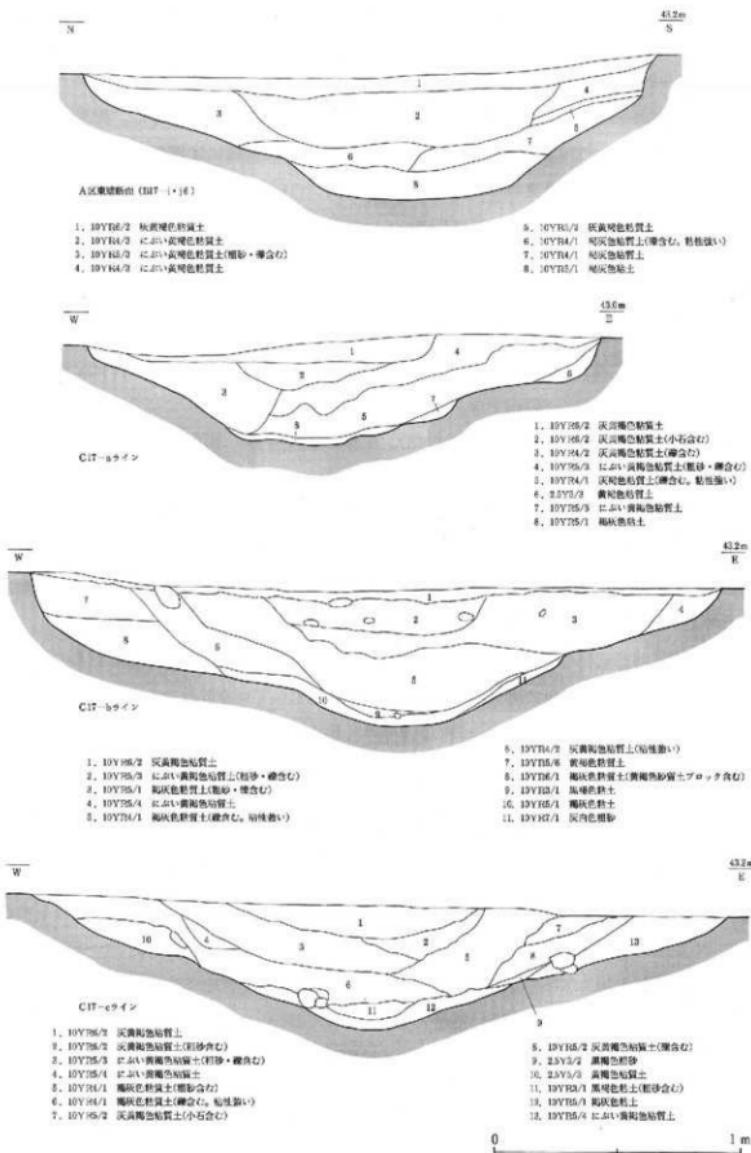
溝440は、溝900の上層にさらに幅を広げて掘削された溝である(第99図)。全調査区の東から西まで東西に走る溝であり、全長は90mを越えている(第83図参照)。調査区の東端B16-i10~B17-i1にかけての約13mの部分は溝900をそのまま利用しているが、B17-i2からB17-i6の約50m間は、溝900を利用しながら北にも幅を広げており、幅約7.5~8.0mを測る。方向はほぼ東西を示すが、調査区西端のB17-h9以西では、幅を北側半分の約3m幅に縮小している。出土遺物(第101図)には、瓦器碗(1~2・4)や土師器皿(5)、瓦器皿(3・6~10)、須恵質甕(11)、土師質羽釜(12~14)、瓦質鉢(16)、東播系須恵器鉢(17)、瓦類(18~19)などがある。羽釜は口縁形態から、12世紀後葉から13世紀中葉頃と比定できる。しかし、瓦器碗には、12世紀後葉頃に比定できる1から、高台が消失してしまっている13世紀末から14世紀初頭頃の2までが含まれている。また、16の瓦質鉢はより後出する可能性がある。およその存続時期を示すものと考えられ、溝900が廃絶することなく、溝440として拡幅され、存続したと考えられる。

なお、鋳造関連遺物の出土状況をみてみると、溝2では灰壁片が少暈出土しているのみで、溝440・900でも灰壁片のほかに鋳型片や蘭羽口片が数点出土しているのみである。区画溝で開まれた屋敷地内の遺構からは、鋳造関連遺物がまったく出土していないことから、これらの鋳造関連遺物は、区画溝の外側、鋳造工房からの流入であると捉えられる。

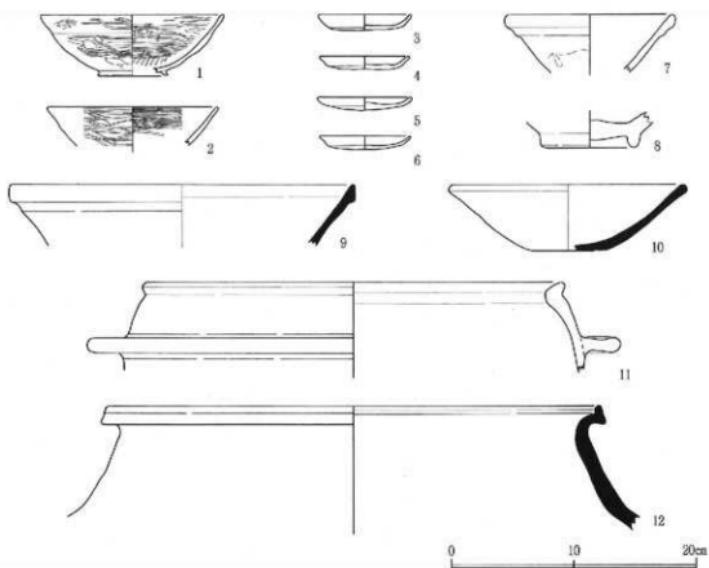
区画溝内をさらに小さく区画する溝が多数ある(第83図)。

溝1378は、溝2から約33m東で、南北方向に走る溝である。規模は、幅約1.1~2.0m、深さ約25cmを測る(第110図)。この溝は、小区画溝のなかで、唯一屋敷地の北限の溝900に直接接続する溝であり、区画溝内の屋敷地を大きく東西に二分する役割を果たす溝であったと考えられる。出土遺物(第111図~第113図)には、土師器皿(1~25)、瓦器皿(26~44)、瓦器碗(45~65)、青磁皿(66)、東播系須恵器鉢(67~70)、土師質羽釜(71~73~76)、瓦質羽釜(72)、瓦類(77~80)などがある。瓦器碗は、内面見込み部分に格子・平行・螺旋の3種が認められる。口径は15cm前後と大きいが、器高は3.5cm前後に集中しており、高台も断面三角形で径が小さいものが多い。全体的には、13世紀中葉から後葉にかけての時期に比定できる。

このほか、小区画溝と考えられる溝に、溝1450・溝1430(溝1449)・溝1369・溝1390・溝1346がある。すべて、溝1378によって二分された屋敷地の東側をさらに小さく区画する溝である。これらの溝は、溝1346を除いて、屋敷地の一部を小さく東西に分断する溝である。溝1346は、屋敷地



第96図 97-A区溝2断面図



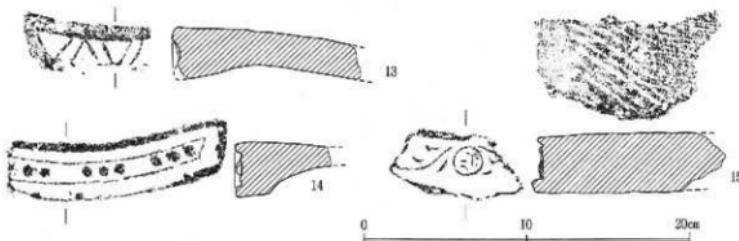
第97図 97-A区溝2出土遺物①

の一部を南北に分断する東西方向の溝である。また、これらの溝はすべてL字状を呈しており、いずれかに連結して閉じている。溝で囲まれた小範囲には、まったく建物を配さない。建物が存在するのは、溝1378以西の屋敷地西半分と、小区画溝の中で最も東辺の溝1369以東の部分である。

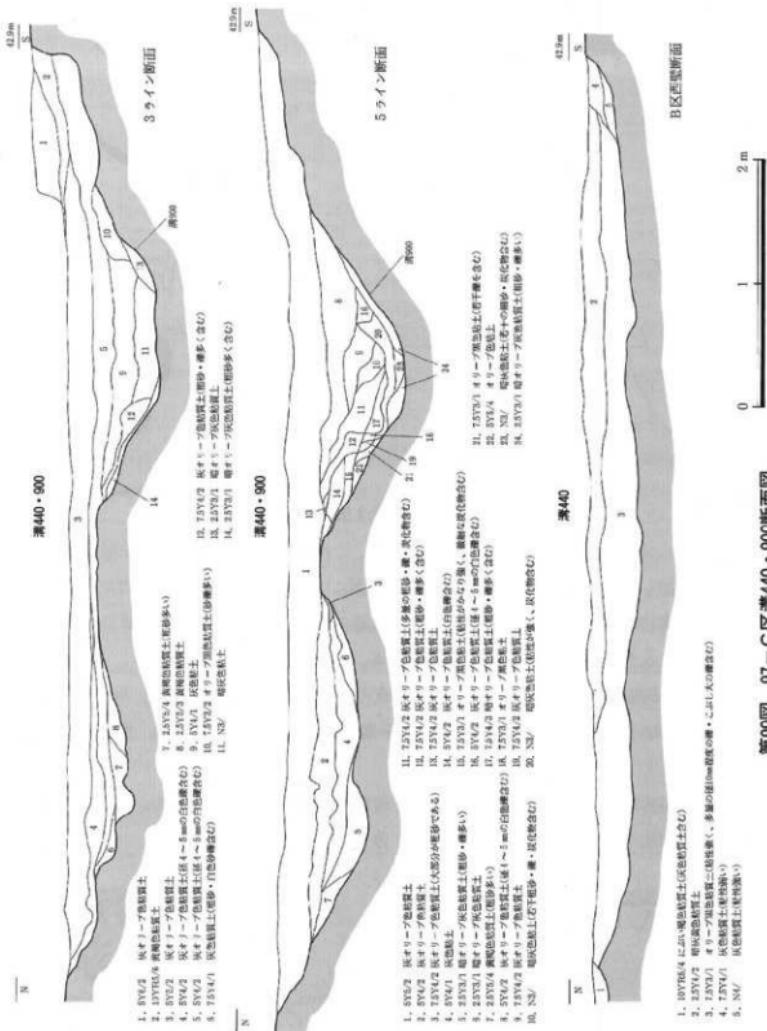
それでは、それぞれの小区画溝について概観する。

溝1346は、幅約50cm、深さ約20cmの、主として東西方向の溝である(第110図)。西端で南に直角に屈曲して溝1369と接続する。溝900から南に7.5m離れた位置を平行している。瓦質羽釜の口縁部片などが出土している(第103図4)。

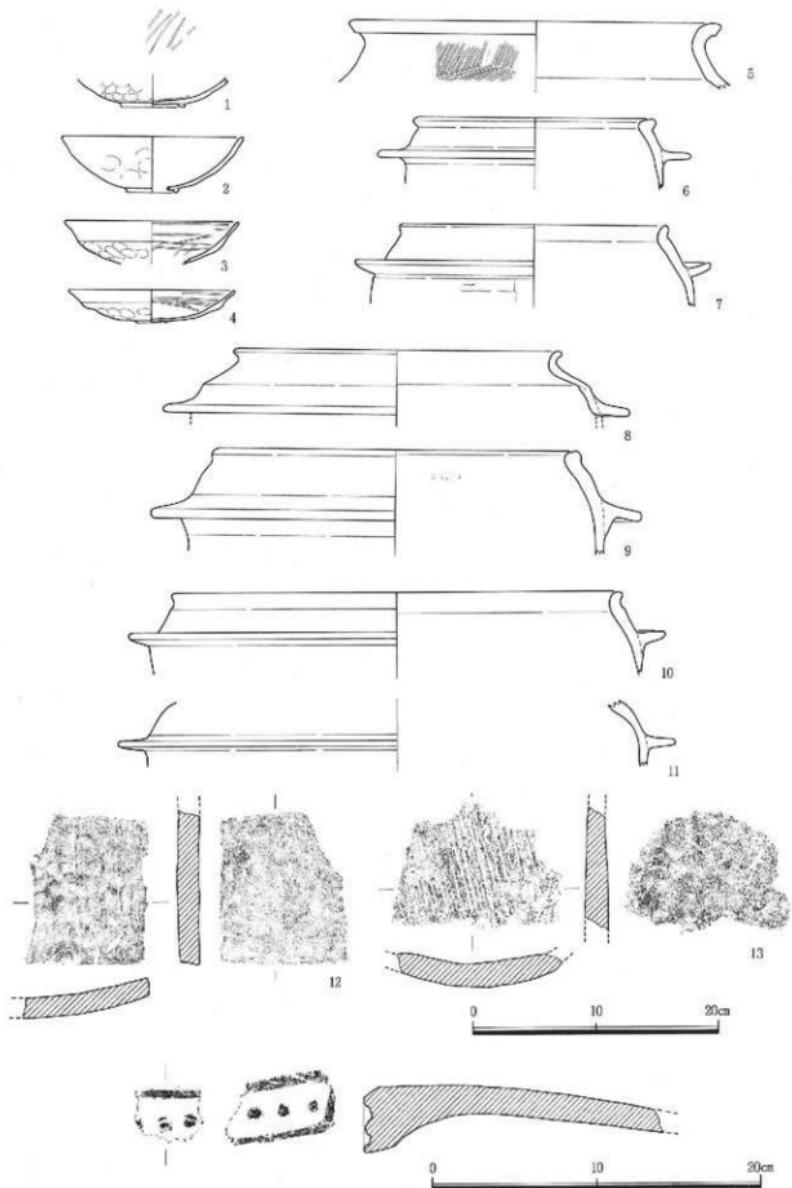
溝1369は、幅約40cm、深さ約15cmの、主として南北方向の溝である(第110図)。北端で西に直角に屈曲して溝1430に接続する。南側で分岐して、南北方向の溝1390が派生する。



第98図 97-A区溝2出土遺物②



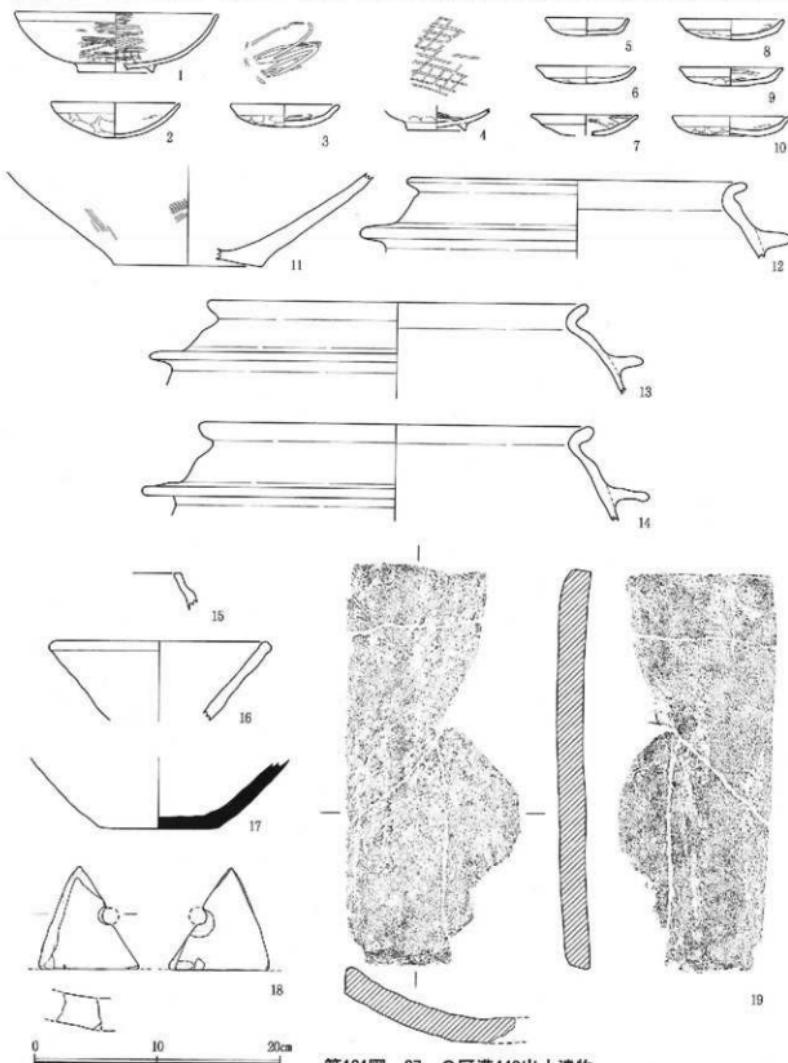
第99図 97-C区構440・900断面図



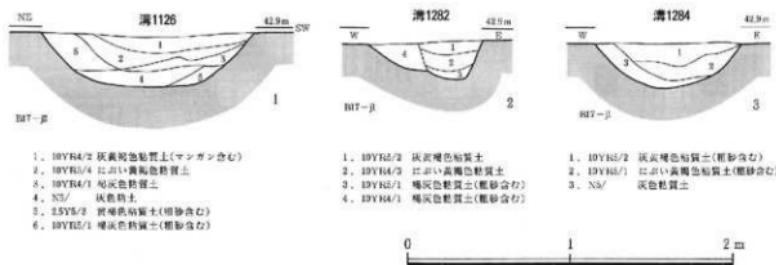
第100図 97-B + C区溝900出土遺物

溝1390は、幅約30cm、深さ約5cmを測る。98年度調査区C1区の溝1004と同一溝となる。青磁楓の高台片などが出土している(第103図1)。高台の置付けおよび内側は露胎である。

溝1430(1449)は、幅約0.6~1.7m、深さ約10~20cmの、主として南北方向の溝である(第110図)。北端で西に直角に屈曲して溝1378に接続する。また、南側でも西にほぼ直角に屈曲して溝1378と



第101図 97-C区溝440出土遺物



第102図 97-C区溝1126・1282・1284断面図

接続する。出土遺物(第114図)には、瓦器椀(1~8)、土師器皿(9~23)、瓦器皿(24~25)、白磁皿(26)、山茶椀(28)、瓦質羽釜(29~31)、土師質羽釜(32)などがある。これらのうち、土師器皿の資料はすべて溝1430のなかでも調査区の南端付近にまとまって廃棄された状態で見つかったものである。瓦器椀は、すべて口径10.5~11.5cm程度で、器高も3cm未満と規格が揃っており、しかも高台を消失してしまっている。羽釜類の口縁形態の特徴なども合わせて、13世紀末から14世紀初頭頃の時期に比定できる。

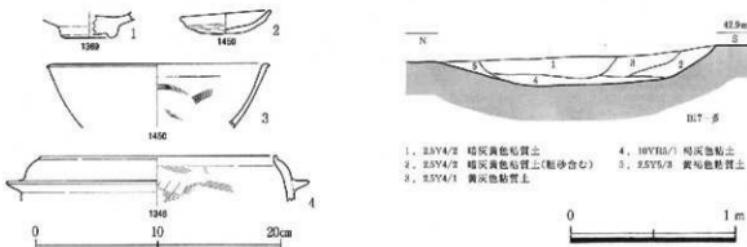
溝1450は、幅約50cm、深さ約5cmの、主として南北方向の溝である(第110図)。北端で西に直角に屈曲して溝1378に接続する。また、南端は東西幅が拡張した溝1378と接続する。瓦器皿や青磁椀などが出土している(第103図2・3)。3の青磁椀は、内面に櫛状工具による施文がある。

そのほか、方形区画内にある溝について述べる。

溝1126は、幅約1.0~1.8m、深さ約30cmの、南東・北西方向の溝である(第102図1)。溝底面のレベル差から、南東から北西方向に、ゆるやかな傾斜で蛇行しながら流れていたと考えられる。他の屋敷地内を東西・南北方向に流れる規則的な溝とは明らかに性格を異にしており、それらの溝との切り合い関係より、屋敷地成立以前に遡る溝である可能性が高い。

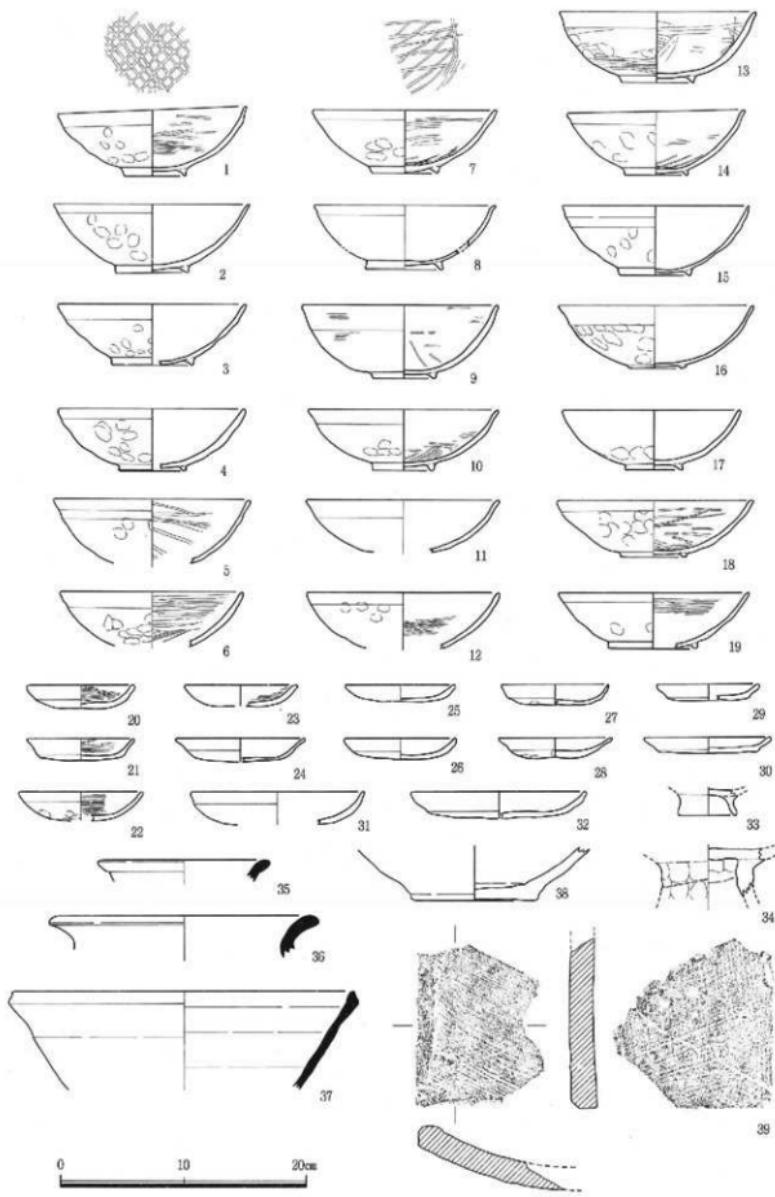
溝1282は、幅約70cm、深さ約25cmの、北西に約10° 振る溝である(第102図2)。溝1126から派生したと考えられる。

溝1284は、幅約90cm、深さ約30cmの、北西に約10~15° 振る溝である(第102図3)。溝1126から

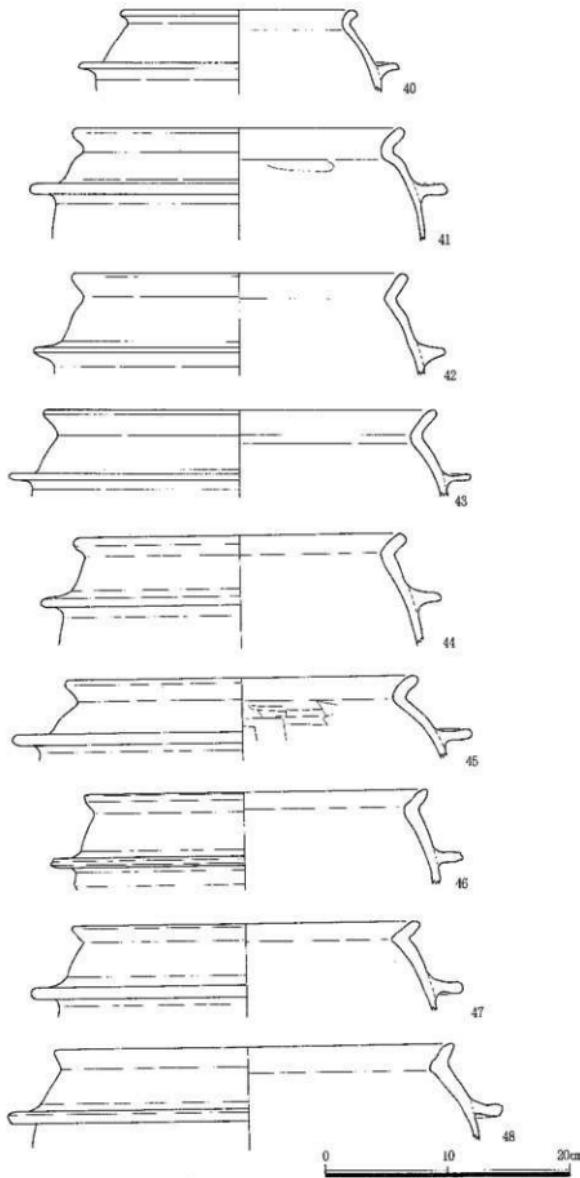


第103図 97-C区溝1346・1369・1450出土遺物

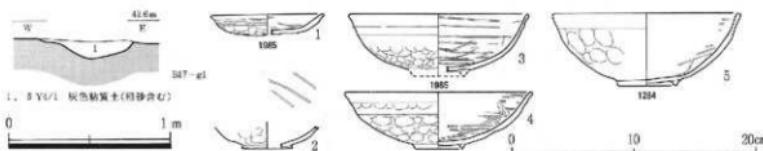
第104図 97-C区溝1985出土遺物



第105図 97-C区溝1126出土遺物①



第106図 97-C区溝1126出土遺物②

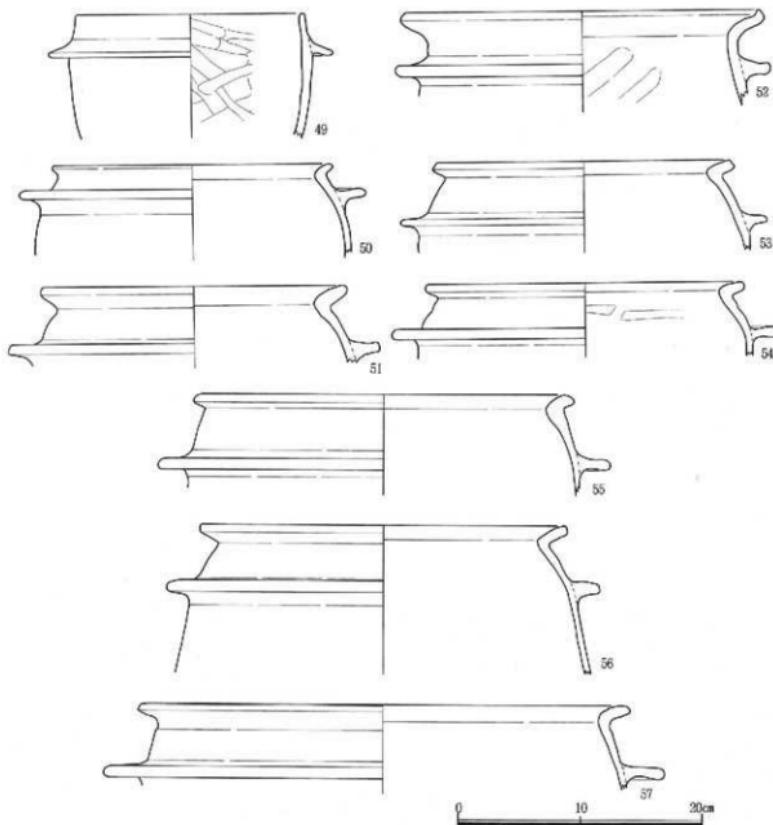


第107図 97-C区溝2231断面図

第108図 97-C区溝1284・1603・1985出土遺物

派生したと考えられる。溝1282とほぼ平行する。瓦器碗が1点出土している(第108図5)。

溝1603は、幅約50~70cm、深さ約10~15cmの、東西方向の溝である(第110図)。溝2が屋敷地の北西隅で東に屈曲した後、幅を狭めて溝1603となり、溝2075に接続する。溝900の南約3.5m地点を平行して走る。瓦器碗片が1点出土している(第108図2)。



第109図 97-C区溝1126出土遺物③